

来たる艱難期： 黙示録の歴史

第2部-A： 七つの教会

黙示録 2章1節-3章22節

ロバート・D・ルギンビル博士著

<<https://ichthys.com/Tribulation-Part2A.htm>

の和訳>



来たる艱難期--黙示録の歴史

このシリーズは、
ヨハネの黙示録を一節ずつ釈義し、
来たる艱難期の全側面について
考察するものです：

- 第1部： はじめに 艱難期の聖書的根拠
- ▶ 第2部 A： 七つの教会：教会時代の七つの時代
B： 天の前奏曲：天国における艱難前夜
- 第3部 A： 艱難の始まり：艱難期前半
B： 反キリストとその王国：獣：反キリストの全て
- 第4部： 大艱難期：艱難期後半
- 第5部： 再臨とハルマゲドン：キリストの再臨
- 第6部： 最後の出来事：千年王国と新しいエルサレム
- 第7部： 艱難に備える：艱難期における行動規範

来たる艱難期：黙示録の歴史

第2部-A：七つの教会

黙示録 2章1節-3章22節

内容

七つの教会: 黙示録 2章1-3章22節.....	3
1. エペソ: 移行期 (黙示録 2章1-7節)	24
2. スミルナ: 迫害の時代 (黙示録 2章8-11節)	74
3. ペルガモ: 迎合の時代 (黙示録 2章12-17節)	107
4. テアテラ: 妥協の時代 (黙示録 2章18-29節)	143
5. サルデス: 墮落の時代 (黙示録 3章1-6節)	169
6. ヒラデルヒヤ: リバイバルの時代 (黙示録 3章7-13節)	188
7. ラオディキア: 退廃の時代 (黙示録 3章14-22節)	212

はじめに

来たる艱難期： 黙示録の歴史 第2部-A:

七つの教会

黙示録 2 章 1 節-3 章 22 節

ロバート・D・ルギンビル博士著

<<https://ichthys.com/Tribulation-Part2A.htm> からの
訳>

はじめに： 私たちはこのシリーズの第一部を、真のクリスチャンの希望、すなわち私たちの愛する主イエス・キリストとともにある究極的復活と永遠の未来について考察することで締めくくりました。艱難の瀬戸際に立つ私たち教会の今の世代にとって、この「希望」はかつてないほど具体的なものです。というのも、この言葉を読んでいる人の中には、主が地上に戻って来られるのを生身で見届け、その瞬間、主の栄光の再臨の時に復活して「挙げられる」ことは、(必然ではないにせよ)現実的に予想できることだからです。艱難期の恐ろしい出来事について詳しく調べる際には、恐れではなく、希望というこの視点を注意深く保つべきです。主を選んだ私たちは、その恐ろしい年月の間に地上に注がれる神の怒りの対象**ではありません**し、艱難期が始まってから主が再臨されるまでの間に私たちがどんな苦しみを受けることになっても、それは主の栄光と私たちの称賛のためであり、私たちの労苦は主にあって無駄ではないからです(第一コリント 15 章 58 節)。主の最終的な勝利の圧倒的な現実と、その時に主と一つになる祝福された私たちの姿は、その間に

はじめに

私たちがどんな恐ろしい試練に耐えなければならないとしても、それをはるかに超越し、そのような比較的「軽い苦難」はすべて、その後が続く運命にある栄光とは比べものにならないでしょう。私たちの光である主が、私たちの心の中で、これらの出来事を、来るべき闇の中においてさえも超越してくださいますように！

わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。(ローマ8章18節)

七つの教会

七つの教会：黙示録 2 章 1-3 章 22 節

このシリーズの前の七つの教会についての予備的考察では、ヨハネの時代に存在した文字通りの歴史的な七つの地方教会であることに加えて、この七つは黙示録が書かれた時に始まったばかりの教会時代の七つの時代を代表するものであることが説明されました。これらは次のような事柄を述べています：

- ・ ヨハネの使徒としての権威は（特に最後の使徒として）、この七つの教会だけでなく教会全体に及んでいました（第一コリント 9 章 1-5 節, 12 章 28 節; ガラテヤ 2 章 7-9 節）。これは、（ヨハネの黙示録 1 章 3 節からわかるように）当時の特定の教会の特定の問題に対処するためのメッセージではなく、七つの「教会」すべてに対してです。（黙示録 1 章 11 節：ここでは定冠詞が重要です。執筆当時、7 つ以上の地域教会があったことは明らかですから。）
- ・ 私たちの主イエス・キリストは、これら七つの地方教会だけでなく、教会全体のことを案じておられたし、またく今も > 案じておられます。この御自身の啓示は明らかに、御自身の花嫁全体、普遍的な教会全体に対するもので、単にそのごく一部に対してのものではありません。

七つの教会

- 黙示録は全教会の遺産です。黙示録は、それを読むすべての人を祝福し(黙示録 1 章 3 節)、それに注意を払うすべての人に終末の時代に何が起こるかを示す(黙示録 22 章 7 節)ことを意図しています。
- 黙示録は、2 章と 3 章の七つの教会へのメッセージで始まった後、すぐに教会時代の二千年の期間の終わりにある終末の歴史に移ります。この書は紛れもなく教会時代の終結に焦点を合わせているので、その前の七つの教会へのメッセージは、その二千年の間を概観するものとして意味していると取らざるをえません。
- 七つの燭台をこれらの七つの地方教会としての解釈だけに留めることはできません。七つの燭台は、1 章ではキリストの御前(黙示録 1 章 12-13 節)で、また 4 章では父の御座(黙示録 4 章 5 節)で、それぞれの場面で単独で見られるからです。この暗黒の世界にキリストの真理を反映させる普遍的な教会の役割を象徴する光を与える燭台は、どちらの場合も全体として役割を果たしているので、一世紀に存在していた七つの地域教会以上のものを表しているに違いありません。
- イエス・キリストが七つの燭台の「真ん中におられ」、これらの教会の天使たちである七つの星を持っておられた(黙示録 1 章 12-16 節)という描写は、教会、それも教会

七つの教会

全体に対するイエスの権威を強く示唆する象徴であり、七つの地方教会だけに適用するのは非常に困難です。聖書における完全の数である七という数字も、この七つの「教会」が完全な一つの教会の象徴的表現であることを表しています(参照:イザヤ 11 章 1-2 節と黙示録 4 章 5 節の七つの霊は、唯一無二の聖霊を象徴しています)。

- ・ 黙示録 4 章 1 節の「この後(すなわち、七つの教会の「出来事」の後)[直ちに]必ず起こること(すなわち、艱難期)」は、七つの教会をヨハネがこの言葉を書いた後から艱難期が始まるまでの期間を一つのまとまりとして捉えた場合にのみ意味をなします。
- ・ 最後に、この書がキリストの教会全体(単に七つの地方教会にではなく)に宛てられたのは聖書の最後の書として適切です。

この解釈は、七つの教会へのメッセージに見られる他の明白な矛盾を説明するのに役立ちます。たとえば、ラオデキヤからほんの数十マイルしか離れておらず、使徒パウロから十年も前に正典の書簡を受け取っていたコロサイの教会が、なぜ省かれ、ラオデキヤが代わりに入っているのか。これは、ラオデキヤにおける状況が、後の普遍的教会となるものに、象徴的に該当するためであるに他ならないでしょう。

そして、もちろん、執筆当時、小アジア内だけでなく、小アジア

七つの教会

ア以外の地域にも多くの教会があったのです。実際、これらの教会がリストに含まれたのは、それぞれが代表する教会の歴史的時代にとって象徴的な重要性を持っていた教会だったために他なりません。これらの考察に加え、これら七つの教会へのメッセージの解釈は、上記で示唆されたことを補強するものであることが分かるでしょう：七つの教会は、使徒ヨハネがほぼ二千年前に奉仕していた七つの地域教会に加えて、教会時代の歴史における七つの明確な期間を象徴するもので、今現在はその最後の段階にあるということです。

構造的な観点からは、この七つはまた、教会の始まりからその歴史を経て、終末の時代、すなわちキリストの再臨の入り口である艱難期の始まりに至らせ、私たちに重要な歴史的視点をくれます。このように、二章にわたる七つの教会、あるいは教会の七つの段階の説明は、ヨハネの現在(1章)と終わりの出来事(4章以降)をつなぐ重要なリンクとなっています。従って、2章と3章は、執筆時から終末の時までの間に起こる教会時代の出来事に関する「空白を埋める」ものとなります。この過渡的な考察が、(歴史的な後知恵の恩恵を受ける前の)非常に流れが速く、識別可能で特定できるような日付が含まれていないということが、かえって、この歴史的な調査がなされていくことによって、終末が近づいているという即時性と切迫感(そして、それに対して信者が警戒し、その事態に備えるという緊急性)が、減少するどころか、むしろ高まるということになります。

七つの教会

将来の現実を理解するためのモデルとして、現在の出来事や状況をこのように関連付けることは、このシリーズの第 1 部で苦心して示したように、聖書の預言の中でかなり頻繁に起こる現象です(イザヤ書の後半全体を参照すると、私たちが見たように、終末の時代への拡大されたアナロジーとして、[当時からみた]将来の出来事であるバビロン捕囚を扱っている)。このように、実際の七つの教会を使って、その後の 2 千年にわたる教会時代に起こる傾向を示したことは、聖書において類似がないわけではありません。これら七つの教会の経験から、私たちは教会の七つの歴史的時代のそれぞれのユニークな特徴を見ることができます。また、七つの教会時代のように、集団的な傾向が何世紀にもわたって支配することは、前例のないことはありません。イエスは、当時のイスラエルが陥っていた律法主義的不信仰の行動パターンを念頭に置きながら、その期間の長さによってではなく、一貫した行動内容によって特徴づけられる集団としての当時の「世代」について、御自分が再臨されるまで「過ぎ去ることはない」と預言されました(ルカ 21 章 32 節文脈上)。(これは使徒パウロが繰り返し述べている点です:特にローマ 11 章 25-27 節; ルカ 11 章 50-51 節参照)。このように、七つの教会へのメッセージは、長い余談とは程遠い、教会の本質的かつ包括的な歴史であり、私たちの焦点を素早く一世紀から(偶然にも、私たちが今直面している)艱難期の瀬戸際まで運んでくれ、その過程で私たちに非常に多くのことを教えてくれているのです。

七つの教会

七つの教会時代の概要：ヨハネの黙示録の 2 章と 3 章の詳細な釈義に進む前に、七つの教会時代の概略を説明することが有益でしょう：

1. 時系列と歴史的概観：七つの教会はそれぞれ、教会の時代を表しています。これらの時代は順番に説明され、最初と最後の時代（つまりエペソとラオデキヤ）を除いて、同じ長さです。人類の歴史に関する神のご計画の千年王国時代の構造（サタン
の反乱シリーズの第 5 部で取り上げた）を学ぶと、教会の時代は二つの千年期間、すなわち二千年（そのうちの最後の七年は艱難期と重なる）から成ることがわかります。大雑把に言えば、教会の七つの時代は、使徒時代の終わりから艱難時代の始まりまで、つまり西暦 70 年から西暦 2026 年までの合計 1956 年間です。この合計には、艱難時代の七年間と「使徒の時代」（ヨハネが最後の使徒）である教会時代の最初の 37 年間は含まれていません。艱難期（ヨハネの黙示録 4 章から 19 章の主題）は、ユダヤ時代と教会時代に共通する時代であり、独自の傾向と発展を持つ時代であるため、計算に含まれていません。また、「使徒の時代」は、ヨハネがこの書を書いた時にはすでに「歴史」であったことに加え（独自の傾向の下で活動するのではなく）、小羊の十二使徒の特別な権威と指導の下で教会が建設され、発展していった独特な時代であり、エペソ時代から始まる七つの教会の予言よりも本質的に古い時代であるため、除外されています。教会時代の二つの千年期の残りの 1956 年間については、エペソとラオデキヤの二つの「ブックエンド」時代に挟ま

七つの教会

れた、五つの同じ長さの期間の時代に分けられます。最初の時代であるエペソは、紀元 70 年の春に最後の使徒であるヨハネの死から始まる、わずか 12 年間の短い過渡期です¹。

このシリーズの第 1 部で論じたように、ヨハネの黙示録は紀元 64 年から 68 年の間に書かれたと考えるのが最も妥当です（この 4 年間の期間の終わりに向かうにつれ、その妥当性は、

¹ . ヨハネの没年がもっと後であるとする歴史的証言は、いささか矛盾しており、まったく説得力がありません。残されている「証拠」は派生的なもので、黙示録の伝統的な日付とヨハネの死の日付の両方が、ドミティアヌスの教会に対する激しい迫害と不審に重ね合わされている。しかし、イレナイオスの記述(特に *Adversus Omnes Haereses* 5.30.3 参照: イレナイオスは神学的な問題には長けていても、年代的な問題には欠陥があることで有名です)は、それ自体が紛らわしく、解釈の仕方の範囲が広いです。特別な証拠を持たない初期の歴史家たちが、ヨハネの死をドミティアヌスの手による殉教と結びつけたいと考えるのは自然なことです。詳細と解説は、R.H. Mounce, *The Book of Revelation* (Grand Rapids 1998) 12, n.60 と、R.H. Charles, *The Revelation of St. John* v.1 (Edinburgh 1920) xlv-1 を参照。しかし、第 1 部で論じたように、ヨハネの黙示録はネロ帝の治世の終わり頃に書かれたと考えるのが妥当です。というのも、ネロはヨハネが書いた時点で「今いる」第六の王であり(黙示録 17 章 10 節: 第 3 部 B、II.1.c.4 節の議論を参照)、遠い未来に「第七の王」(反キリスト)が続くユリオ=クラウディア朝の最後の皇帝だからです。したがって、ヨハネの死は、この正典<聖書>の最後の書<黙示録>が書かれた直後であり、旧約聖書の神殿礼拝の時代が終わる前(それは、使徒たちの逝去によって教会が完全に運営されるようになった時点を超えるはずはありません)であることが、はるかに可能性が高いです。

七つの教会

高くなっています)²。この上記の年代と、ヨハネの死が紀元 70 年であったことを合わせると、最後の使徒は、迫害者であり、反キリストの前兆であり、事実そのひな型であったネロ(紀元 69 年没)の統治を生き延びたこととなります(それ自体が重要な象徴的出来事の組み合わせです)。ヨハネは、テトス率いるローマ軍によってエルサレムと第二神殿が破壊されるわずか 6 ヶ月前に死にました。この出来事は、神の計画のうち、ユダヤ人だけのオイコノミア(<ギリシャ語 *oikonomia*:>すなわち、モーセの律法に規定された儀式を通じた神の証人の派遣と管理)の一つの終わりを決定的かつ劇的に示すものであり、その対処は、主が小作人のたとえで示されました：マタイ 21 章 33-46 節；マルコ 12 章 1-11 節；ルカ 20 章 6-19 節。この時点から、キリストが再臨されるまで、世界に対する神の証しの「ともしび」となるのが、ユダヤ人と異邦人で構成される普遍的な教会であることに疑う余地はありません(参照：イザヤ 42 章 6 節；マタイ 5 章 15 節；マルコ 4 章 21 節；ルカ 8 章 16 節，11 章 33 節；黙示録 11 章 4 節)。この事実は、1 章のキリストの幻や、2 章と 3 章の七つの教会へのメッセージで中心的な位置を占める「燭台」(黙示録 1 章 12-13 節，1 章 20 節，2 章 1 節，2 章 5 節)にはっきりと見ることができ、また強調されています。³

² 上記の脚注1を参照のこと

³ 悪魔の反乱」シリーズ第 5 部「裁き、回復、置き替え」の II.5 節の「ディスプレイ」についての議論を参照。

七つの教会

ヨハネの死後、「エペソ教会」は、完成された聖書の正典が教会全体に配布され、教会自体が使徒の監督から地方教会による独立的自治へと移行する、短い過渡期を表しています。この最初の時代はわずか 12 年間ですが、恵みの期間となります。「エペソ」の時代、教会は、奇跡、奇跡的な出来事、小羊の使徒たち自身による監督を特徴とする時代から、地方教会が普遍的な教会の「柱と土台」(第一テモテ 3 章 15 節)となり、聖書が信仰と実践すべての唯一の試金石となる時代(第一テモテ 4 章 6 節, 5 章 13-16 節参照)に調整されていくための猶予期間となります。いわば「火の洗礼」となる次の時代の激しい迫害に備えるために、このような期間が必要であったことは明らかです。この 12 年間は、使徒一人一人に一年ずつ、あるいはイスラエルの十二部族(千年王国以前のすべての信者から成るキリストの体である教会は、最終的にはこの中に組み込まれます)一人一人に一年ずつ割り当てられたと、さまざまに説明することができます。⁴

エペソの過渡期に続いて、同じ長さの 5 つの時代が続きます。スミルナ、ペルガモ、ティアティラ、サルデス、ヒラデルヒヤの時代は、それぞれ 360 年です。360 日はユダヤの儀式年(太陽暦

⁴ 「12」という数(すなわち「十二年」)は、ユダヤ教の儀式暦における日数の基本単位でもあり、人類史の四つの時代それぞれにおける信者の割合を反映していることも、同様に想起されるであろう。悪魔の叛乱」シリーズ第 5 部「審判、回復、代替わり」の II.8.c 節を参照。

七つの教会

に合わせるために必要な閏年を除いた、30 日ずつの太陰暦の 12 ヶ月)の標準的な日数ですから、この 360 日という数字が、これら 5 つの時代のそれぞれの基本単位を表す重要なものであると考えるのは、それほど飛躍したことはありません(すでに見たように、聖書では一日が一年(またはエポック)を表すことがよくあるのと同じです)。⁵ さらに、一年 360 日ということは、黙示録の中で特別な意味を持っています。というのも、そのようなく一年を 360 日で数える<七年(その日数で二分されている)>によって、艱難期の長さが明確に定義されているからです(これは、艱難時代の前半と大艱難期の二つの期間を指します。黙示録 11 章 3 節および 12 章 6 節参照)。

導入期間であるエペソとそれに続く 360 年の五つの時代の後、教会の時代は、二番目に短い 144 年のラオデキヤの時代で終わります。先立つ五つの時代よりも短くなっている理由として、ラオデキヤ<の期間>はエペソと同様、(教会時代の最終段階である艱難期への)過渡期だからです。エペソ時代と同様に、ラオデキヤ時代の長さも重要です。まず、その 144 年間は、疑いなく、ラオデキヤ時代の完了と同時に印をおされ、伝道活動を開始する十四万四千人のユダヤ人信者の働きを予表し、示唆するものです(黙示録 7 章 1-8 節)。このように、エペソ時代の 12 年間(各使徒／イスラエル部族に一年ずつ)が、教

⁵ 特に、本シリーズ第 1 部 IV.1.b.節の「主の日のパラダイム」を参照してください。

七つの教会

会がその後の迫害の時代に備えるための恵みの期間であったように、144 年間(イスラエル 12 部族の艱難時代の伝道者一千人につき一年ずつ)も、信者が経験することになる最も激しい試練と迫害の時代、すなわち艱難期に先立つ恵みの期間、そして警告の期間なのです。もちろん、144 は 12 に 12 を掛け合わせた数であり、この事からも、艱難期はこれまでの教会の迫害をはるかに圧倒するほど大きなものになるという結論を導き出すのは間違いではありません。そして、エペソ時代の教会が、(次に述べるように)神の言葉に対する生ぬるい態度で、その業績と備えにおいて不足していたように、ラオデキア時代の教会(私たちは、この期間の教会に属しています)の業績と備えも、時間的(準備期間が 12 倍も長い)にも資源的(過去の時代に目撃されたものをはるかに超えて、また教会の過去の経験全体が土台となっている)にも卓越した利点があるにもかかわらず、同じような桁違いの不足に陥っているのです。このような悲しい現状がもたらす結果は、(現在の傾向が続くとすれば)ラオデキアの教会に属する私たちが来たる艱難期に直面するとき、教会史上、私達ほど大きな試練に直面する備えがなされておらず、言い訳の余地が他の時代よりもない信徒集団はいないということです。最後に、144 という数字は、ユダヤ教の儀式暦の十二の二乗の日数として、千年王国時代に召し出される前例のない数の信者を連想させます。⁶ このように、この 144 年の象徴

⁶ 「悪魔の反乱」シリーズ第 5 部「裁き、回復、置き替え」の II.8.c 節を参

七つの教会

を、人類史の最後の千年王国の時代に救われると予言された、この例外的な数の信者を予表するものとして、肯定的に見ることは可能かもしれませんが、ラオデキヤの 144 年は、果たされなかった約束の象徴、つまり、二千年を要して成長した教会の最終結果が、理論的には千年王国が実際にもたらすものに匹敵するような、多産な実を結ぶ期間とならなかった、主にとっては期待外れという辛辣なコメントである可能性も非常に高いです。しかし、エペソ時代の教会が使徒たちの手による奇跡的な指導があつたにも関わらず、期待に応えることができなかつたように、ラオデキヤ時代の教会は、そのような豊かな資源と機会が確実に与えるであろう期待に応えることができず、かなり失望させられるものとなっています(マタイ 21 章 18-19 節参照)。

エペソとラオデキヤの時代の期間が短くなっているのは、別の意味でも説明できるかもしれません。神は、集団や個人が霊的な機会を完全に損なうことをしばしば許される一方で、(バビロンによるユダの滅亡を見てわかるように：エレミヤ 29 章 4-23 節)彼らの行動が他の人々の霊的な将来を危うくする際には、ゆっくりと行動されないとのことです。神の言葉が無視するエペソの風潮が教会を激させることは許されませんでした(「良いいちじくと悪いいちじく」を分ける迫害の時代がすぐに続いたからです：エレミヤ 24 章 1-10 節)、「ラオデキヤ」は、同じような激しい迫害の時代、「もみ殻と麦をふるい分ける期間」(マタイ 3

照。

七つの教会

章 12 節)、すなわち艱難期が来るまで、霊的な下降をゆっくりと螺旋的にたどっていきます。スミルナは歴史的に、艱難期は預言的に、どちらの迫害の期間においても、無関心というますます生温くなる海の中で徐々に弱体化し妥協して行くのではなく、神と御子を真に愛する者(単に流されているのではない者)には、この愛を示し、「大空の輝きのように輝く」(ダニエル 12 章 3 節)絶好の機会が与えられます。

教会の七つの時代とは、イスラエルという「燭台」が一時的に取り除かれた後、キリストが再臨される前の歲月、ユダヤ人の覇権が回復されるまで、神の証人となる主に異邦人からなる七つの「燭台」に取って代わられる時代です(マタイ 21 章 43 節; マルコ 12 章 9 節; ルカ 20 章 16 節)：

1. エペソ：紀元 70 年から 82 年までの 12 年間「導入期」
2. スミルナ：紀元 82 年から 442 年までの 360 年間「迫害の時代」
3. ペルガモン：紀元 442 年から 802 年までの 360 年間「迎合の時代」
4. テアテラ：紀元 802 年から 1162 年 の 360 年間「妥協の時代」

七つの教会

5. サルデス: 紀元 1162 年から 1522 年までの 360 年間「腐敗の時代」

6. ヒラデルヒヤ: 紀元 1522 年から 1882 年までの 360 年間「リバイバルの時代」

7. ラオデキヤ: 紀元 1882 年から 2026 年の 144 年間「退化の時代」

七つの教会

悪魔の反-教会(チャート提供:チャールズ・ジョンソン博士)<https://ichthys.com/ANTI-CHURCH.pdf>

時代	特徴	当時の立場	権威の主張	標的としての弱点	具体的な攻撃
<u>エベン</u>	未信者が真の教会に潜入しようとした初期の試み [失敗]	真の教会から排斥される	「自分たちは使徒だと言う」、「ニコライ派」[多数派こそが権威であり、聖書ではないと言う]。	エベンに対するエベミことばの研究 ソ人の無頓着な態度	[エベソ人の弱点である]自由主義が正当化され、聖書の真理を攻撃される。
<u>スミルナ</u>	真の教会を破壊しようとする異教徒たち	真の教会とは別に、国教として設立された	彼らは真の正当な宗教であると主張する[「偽って」自分たちは「ユダヤ人」であると言う]。	スミルナにおける反-教会の地位	世俗的な手段がない(金もない、影響力もない、権力もない)→これら「弱さ」は、世間の目から見た場合のみ。
<u>ペルガモ</u>	バラムとバラクの陰謀のように、誘惑と馴れ合いによって、世俗主義と異教という形の悪が教会に影響を及ぼし始めた。	教会に潜入	「ニコライ派の教え」を堅持する者たちが、教会内に存在する	ペルガモにおける反-教会の地位	世俗的な安全への願望に基づき、世俗的な権力を獲得するために悪と妥協することは許されるという誤った思い込み。

七つの教会

時代	特徴	当時の立場	権威の主眼	標的としての弱点	具体的な攻撃
テアテイ ズ	教会に定着してしまつた悪は、目に見えない「イゼベ」指導者たち「イゼベル」、娼婦、彼らの「子供たち」の代表の支配権を得る。	世俗、また異教の要素が教会の中で優勢的な立場を取るようになる。「深いもの」を「教える」塵れ【彼女と「淫行する者」と「子供たち」によって支持される「イゼベル」】	これらの要素は、車窓には唾（すなわち「サタンのもつ）である「深いもの」を「教える」塵れた権威の知識を偽って主張する。	「イゼベル」とその信奉者たちは、目に見えない教会の中で、秘密の教義、精巧な儀式、見せかけの魅力に弱い人々を餌食いしている	このようなカルト的な活動を通して、まだ真の信仰と実践を守っている人々に影響を及ぼす「偶像のいけにえの食物を食べ、性的な行為にふけること」。
サルディ ズ	言及された特定のグループは、目に見えない「イゼベ」に崩壊寸前の状態で、個々のメンバーにおいてのみ生氣が認められる。	悪という毒が元々健康であった体に完全に侵入し支配する。	偽りと悪が教会の組織の職務と権威を貶辱している。	真の信者が死んだ体の中に存在し続けることは真の信仰の消滅を意味する。	真の信仰と信仰生活の残存者
フライデル フライ	かつて教会を象徴していたが、真の信者と対立し、完全に墮落し、完全に不敬虔な「サタン」の教会となり、この死体のよがな教会から、真の信者は自らを切り離した。	地上の教会の本来の組織体を篡奪(さんだつ)した偽の「会堂」が、今や真の教会に改革されたことを見聞する。	反対派は、真の合法的な宗教、「ユダヤ人である」、「唯一の真の教会である」と主張するが、実際は「サタンの会堂」「邪悪な組織」である。	フライデル 1522年から1882年まで=360年) 無し。真の信者は、神のみことばの真理を第一に考え、神はこれらの「働き」を導かれ、伝道知識、霊的成長の「難かた」を克服し、「開かれた扉」を与えられた。	真の信仰と信仰生活の残存者もいる。
ジオディ ア	言及された特定のグループは、偽ものが現存、改革派教会組織に浸透し、区別がつかないほど根付いている	「教会」の中で、不信者が相対した「無関心」を広めてきた。すべてが「良い」ものだから間違っているものは何もない(正しいものも何もない)	ジオディ 1889年から2026年まで=144年) ペルガモ/ティアテラ/サテルティスのような(特定の可能な)「毒」ではなく、急激な反応を避けるために、微妙に、そして段階的に教会内部から攻撃し、「受け入れてしまった者」に精神的麻痺をもたらした類型的な病状である。	現代の反-教会は、明確な挑戦の代わりに相対主義、弛んだ基準、神の言葉に対する無関心などを徐々に導入し、現代の教会をほとんど無気力(ぬるま湯)で効果的でないものにしていく。	

サルディズ:「腐敗の時代」における反-教会のステータス1162年から1522年まで=360年)

フライデルフライ:「リバイバルの時代」における反-教会の地位 1522年から1882年まで=360年)

ジオディア:「退廃の時代」における反-教会の状況 1889年から2026年まで=144年)

七つの教会

使徒の時代(紀元 33 年の主の十字架と復活から紀元 70 年秋のヨハネの死まで)に続く前述の一連の流れは、救われた直後の祝福された至福の霊的な高揚の時期(ここでは使徒の時代に類似)に続いて、信仰の「浮き沈み」のある個々のクリスチャンの人生の有様に類似しています。その後すぐに無関心に陥り、自分の信仰に対する大きな反対に直面したとき(エペソに続いてスミルナも)、彼は衝撃を受けても立派な対応を示します。しかし、危機が過ぎ去ると、その後はゆっくりとした緩慢な衰退期が訪れます(ペルガモ、テアテラ、サルデスの連続)。しかし、完全な萎縮と棄教が避けられないと思われたまさにその時、この信仰者は再びどん底から揺り起こされ、主とその御言葉に対して新たに積極的に反応することになります(ヒラデルヒヤ)。このリバイバルに続く祝福によってある種の盲目をもたらし、信者の霊性が繁栄の罠に陥ることとなり、ある種の盲目をもたらすことになります(ラオデキヤ)。この後、信仰を受け入れるか捨てるかの究極的な危機が訪れます(艱難期に類似)。信仰の最後の大混乱というのは現実的には艱難期であるので、ラオデキヤの時代の終わりに生きている人々にとって、このたとえばは現実のものとなるのです。本物の永続的な信仰を持つすべての人々は、教会の最も暗い時期のただ中で直面する比類のない試練に、命をかけても勇ましく応えることによって、教会史の最終章は、未曾有の迫害の炎の中で勝利した信仰の勝利の章となるのです：

…そして、[キリストを信じる]わたしたちの信仰こそ、

七つの教会

世に勝たしめた勝利の力である。(第一ヨハネ5章4節)

七つの教会とその時代について個別に考察を始める前に、最後に一点だけ概観しておく必要があります。七つのメッセージはすべて、文章の構成においてある種の類似性を持っており(これは黙示録を扱う際に注意するのが通例です)、以下の考察もこのやや似た構造に従って行われることとなります。さらに、これらのメッセージの構成の類似性は、まったく驚くべきことではありません。というのも、私たちが上記で明らかにしたように、私たちの主がここで取り上げた各教会は、主の教会の特定の時代、すなわち、世の光である主を映し出すことによって世に光を伝える忠実な人々の拡大された「世代」を表しており、ともし火を灯す役割を果たす燭台として機能しているからです：

エペソにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『右の手に七つの星を持つ者、七つの金の燭台の間を歩く者が、次のように言われる。(黙示録 2章 1節)

都は、日や月がそれを照す必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都の**あかり**だからである。(黙示録21章23節)

七つの教会

7つのメッセージに共通するポイントは以下の通りです：

1) あいさつ：七つのメッセージはすべて「...の教会の御使に、こう書き送りなさい」で始まっています。メッセージの受取人が、その教会の特定の部門(または「世代」)を担当する天使であることは、神の命令系統の重要性を示しています(神はご自身の御使のしもべたちを通して、定められた一貫した方法で働かれます：例えば、第一テモテ 5 章 21 節参照)。また、目に見える人間レベルでの教会の監督の質がどうであれ、私たちの目には見えない天使の領域では、多くの適切な監督、天の連携、後見が行われていることも示しています(しかし、これらや他の箇所を通して、目には見えなくても、存在していることは知ることができます：「サタンの反乱」シリーズやこのシリーズの第1部を参照下さい) さらに、これらのことを担当の天使に「書き送りなさい」という命令は、特定のメッセージを与えることがキリストご自身によって認可され、命じられていることを明確にしています。

2) 認可： 私たちの主イエス・キリストの序文そのものは、七つのメッセージすべてにおいてほぼ同じ形で与えられています。ギリシャ語の「タデ・レゲイ」(「次のように[主は]言われる」： τὰ δε λέγει) というフレーズは、実際、すべてのメッセージに共通する同一の特徴であり、「インプリマタ(ラテン語：「認可」)」、すなわち、この後に続く言葉が、まさに主から直接語られたものであり、主の完全な権威が付与されたものであることを保証する、主に代わる実証的な声明を構成しています。

七つの教会

3) 主の自己記述: 七つの記述の内容はすべて異なりますが、七つすべてにおいて、主はご自身のことを三人称で語っています(すなわち、「……される方」<口語訳では「…する者」>)。

4) 主からの特別なメッセージ: 七つの個別メッセージはすべて、主がその評価を下すために必要な情報を完全に持っているという一人称による(「私は知っている…」という)確言が含まれています。続いて、さまざまな構成で、各教会について評価が述べられ、それぞれの状況に適した命令や指令が続きます。

5) 訓戒: 七つのメッセージはすべて、「耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい」という戒めを含んでいます。この(主による)冷静な忠告は、それぞれの記述に示された詳細に注意を払うことの重要性を私たち皆に印象付ける役割を果たしています。なぜなら、たとえその発言が教会の特定の時代に向けられたものであったとしても、主が語った原則は私たち皆に関わるものだからです。それゆえ、各メッセージは、キリストのからだの特定の部分に対する具体的な告発に加え、「諸教会」、つまり、すべての時代の教会に対するメッセージであると説明されています。さらに、この共通の訓戒の中で、[聖]霊がこれらのメッセージを伝えているお方であることが述べられており、このメッセージはキリストから天使たちを通して七つの教会に伝えられたものですが、この世界における神の真理のすべての伝達の背後にあるのは、常に聖霊であるということです。

七つの教会

6) 約束： 警告、戒め、訓戒に加えて、各メッセージはクリスチャンの歩みにおいて私たちを励ますものです。つまずきや叱責にもかかわらず、私たちが永遠のいのちという未来の希望と、それに伴う筆舌に尽くしがたい祝福を持つ神の子であることを思い起こさせる、素晴らしい約束の数々も提示しています。これらの祝福は一つ一つが、さまざまに、そしてすばらしく描写されており、イエス・キリストに信仰を置き、最後まで忠実に従うすべての人を待ち受ける将来の栄光の異なる面を提示しています。

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

1. エペソ:移行期(70 年 9 月～82 年 9 月=12 年間)

黙示録 2 章 1-7 節:

(1) **エペソ**にある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『右の手に七つの星を持つ者、七つの金の燭台の間を歩く者が、次のように言われる。(2)わたしは、あなたのわざと労苦と忍耐とを知っている。また、あなたが、悪い者たちをゆるしておくことができず、使徒と自称してはいるが、その実、使徒でない者たちをためしてみ、にせ者であると見抜いたことも、知っている。(3) あなたは忍耐をし続け、わたしの名のために忍びとおして、弱り果てることがなかった。(4)しかし、あなたに対して責むべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。(5)そこで、あなたはどこから落ちたかを思い起し、悔い改めて初めのわざを行いなさい。もし、そうしないで悔い改めなければ、わたしはあなたのところにきて、あなたの燭台をその場所から取りのけよう。(6)しかし、こういうことはある、あなたはニコライ宗の人々のわざを憎んでおり、わたしもそれを憎んでいる。(7)耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。勝利を得る者には、神のパラダイスにある

いのちの木の実を食べることをゆるそう』。

「エペソ」という名前は、地理的な名前ですが、ギリシャ語の読者には、「その上に座る」という単語「*ephizo* エフイゾ」に由来すると受け取れます。この語源は、エペソ時代の基本的な特徴を伝えているため、重要です。「エペソ」という名前は、「確立」(良いこと)を意味する一方で、ある種の無関心さ、つまり、過去の功績に「胡坐(あぐら)をかいている」こと、そして、具体的には(メッセージの後半で明らかになるように)、神の言葉(4 節の「初めの愛」あるいは「最初に抱いていた愛」)に対する無関心な態度の発展をもはっきりと意味しているからです。このように、この時代とすべての時代の全体的な特徴(そして、この言葉を読むすべての人々に対する全体的な教訓)は、主の教会名の選択において最初から明らかにされています。エペソの場合、それは、どんなクリスチャンも霊的成長を止め、過去の成功で十分だと思ひ込む余裕はないということです。霊的な安全は、「狭い門」をくぐり、「狭い道」を上り続ける前進の中にしか見いだせないからです(マタイ 7 章 13-14 節)。

エペソは、使徒の直接支配から地域教会の支配へと移行する時代を象徴しています。それは、二つの重要な出来事で始まります。一つ目は最後の使徒ヨハネの死、二つ目はエルサレムの陥落です。二つ目の出来事である第二神殿が破壊されたことで、神殿に関連するモーセの儀式が決定的に終了することになりました: それ以来、教会は、律法の儀式が示唆していた

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

キリストの現実に焦点を合わせることになります。一つ目の出来事のヨハネの死は使徒的権威の明確な終結を意味しました: それ以降、教会はイエス・キリストのからだの対等な構成員として、その唯一の頭であるイエス・キリストに仕えることになりました。この二つの進展は、教会にとって大きな転換を意味し、エペソ時代の信者が果たすべき困難な役割でしたが、使徒時代の奇跡的な働きが彼らを備えてくれていました。この使徒後の最初の世代の教会が直面した課題の困難な性質は、その日から今日に至るまで、信徒たちが、自分たちが見るべき唯一の場所、すなわち聖書と、私たち教会が総体的に持っている賜物を通してその真理を管理することに目を向けるのではなく、似偽(じぎ)儀式(神殿儀式に戻る)や似偽(じぎ)聖職権威構造(使徒的権威に戻る)に答えを見出そうとする、この二つの面でいまだに問題を抱えているという事実において見ることができます。

すべての使徒的支配と、それに付随していた奇跡と奇跡的賜物の終焉は、教会が、聖書と、それに付随して聖霊によって与えられる力づけの賜物を通して、神の言葉を提供するという、それほど派手ではない(しかし本質的にはより強力な)働きに完全に依存しなければならなくなることを意味していました。というのも、エペソ時代の初期から現代に至るまで、救いと霊的成長という教会の業は、そのような印象的で並外れた賜物を持たない普通のクリスチャンたちによってのみ成し遂げられてきたからです。癒しや異言、使徒的権威など、あからさまな奇跡的手段によって教会がイエス・キリストのメッセージを広め、御霊の力の

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

成長してきたのではなく(エペソ 4 章 3-16 節; コロサイ 2 章 19 節)、通常の伝道、教え、牧会、そしてキリストにあって成長し、他の人々も同じように成長するのを助けるという教会の基本的な目標を支えるための、キリストのからだのメンバー一人ひとりの無数の貢献によって成し遂げられてきたのです(ヨハネ 21 章 15-17 節)。

私たちの集団的な救いと霊的成長の過程において、教会の儀式と教会運営の歴史的発展の真の重要性は、(少なくとも肯定的な影響力に関しては)非常に過大評価されてきました。確かに、地域教会が私たちの主に「適宜に、かつ秩序を正して」(1 コリント 14 章 40 節; 第一コリント 14 章 33 節参照)仕えるためには、何らかの基本的な管理体制が必要であったし、今も必要です。しかし、教会統治の形式や教会の儀式に過度に熱中し、病的とさえ言えるかもしれないほど集中したことが、過去二千年の間、良いことよりもむしろ害を及ぼしてきたということは、(このセクションに続く教会史の周辺的な扱いからも明らかなように)一つの明らかな理由で正当に論じることができます: 彼らは神の言葉よりも、むしろ彼ら自身に注目を集める傾向があったことです。

イエス・キリスト御自身が私たちに与えてくださった聖餐式(マタイ 26 章 26-28 節; マルコ 14 章 22-24 節; ルカ 22 章 17-20 節; 第一コリント 11 章 23-26 節)は、御自身と御自身の業を思い起こす儀式であり、真のクリスチャンにとっての唯一の儀式

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

ですが(「わたしの記念として、このように行いなさい」:マタイ 26 章 26-29 節; ルカ 22 章 19 節; 第一コリント 11 章 24-25 節参照)⁷、これでさえも乱用されています。なぜならその実際の目的は信者に、キリストとキリストの働き、そして私たちの彼に従うという決断を思い起こさせることであって、恵みや交わりの他、何をも「授ける」ことではないからです。また、地域教会の運営に関しては、「きちんと、秩序正しく」という指導原則を実行する上での形の柔軟性こそが聖書が命じていることであるという結論が、すべての証拠によって示されています。⁸ 聖書には、十

⁷ 水によるバプテスマという件については、聖書の基礎知識:第 6 部 B 「教会論」で扱いますので、時間と紙面の都合上、詳細な考察は割愛させていただきます。バプテスマの問題を論じる新約聖書の箇所では、ほとんど普遍的に、聖霊のバプテスマ、すなわち、すべての信者の救いに伴うキリストとの一致という祝福された現実に焦点が当てられており、儀式も(水も)意図されてはいません(特にエペソ 4 章 5 節;およびローマ 6 章 3-4 節; 第一コリント 12 章 13 節; ガラテヤ 3 章 27 節; コロサイ 2 章 12 節; テトス 3 章 5-6 節; 第一ペテロ 3 章 21 節[ギリシャ語では「水」の記述はありません]を参照)。

⁸ 例えば、パウロは助祭と長老の資格について述べていますが(第一テモテ 3 章 1-13 節; 第一テモテ 1 章 5-9 節)、彼らがどのように教会を組織するかについては何も示唆していません。特にヨハネは、最後の使徒であるにもかかわらず、非常に困難な状況においてさえも、自らの権威を行使することに関して最も遜った態度を示しています(第三ヨハネの手紙参照)。私たちは、初期イスラエルの組織においてモーセが直面した状況(出エジプト記 18 章 13-26 節)と比較することができます。モーセは多くのテーマについて最も具体的な指導を受けますが、行政は時と状況に応じて柔軟に対応することが要求されるものでした。

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

二使徒の(一時的な)働きの後に、地域教会より上位の管理的上部構造を裏付けるような証言はありません。

従って、エペソの過渡期における成功は、組織の発展ではなく、個々のクリスチャンが神の御言葉のために倍の努力をすること、すなわち、御言葉を聞き、信じ、学び、教え、それに生き、他の人々が同じようにするのを助けることにかかっています。上記で主が示された「成績表」を見ると、エペソ人の成績はまちまちです。一方では、偽りや罪の影響から遠ざかったこと(「良い弁護」と言えるかもしれない)が称賛されていますが、他方では、神の言葉に対する「はじめの愛」を捨てることによって、霊的成長とクリスチャン生活における前進のために本当に大切なことを軽んじたことが厳しく批判されています。聖書の正典は完成していたとはいえ、収集と広範な配布の初期段階にすぎなかったという事実を考えれば、エペソの時代がわずか十二年の活動で突然打ち切られた理由も理解できます。聖書に対するこのような無関心な態度が長期にわたって続けば、聖典の統合と配布は深刻な危機にさらされていたかもしれません。

使徒から地方教会自治の移行に問題が生じるであろうことは、エペソ時代が始まる以前から兆候がありました。パウロがエルサレムの信徒たち(ヘブル人への手紙)、コリントの信徒たち(コリントの人への手紙第一と第二)に対して指摘したこと、ヨハネが第三の手紙に見られるように、ある教会を指導できなくなったことなどは、その当時でさえ、使徒後の教会に対するペテロの

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

希望が過度に楽観的であったと見なされても仕方がないような、より明らかな例のほんの一部です(第二ペテロ 1 章 12-15 節)⁹。使徒たちの導きのもと、「生木」の状態でこのような問題が表面化し続けたとしたら、「枯木」の状態では何が予想されるでしょうか(ルカ 23 章 31 節)。理想は、使徒たちが去った後(彼らの時代を特徴づけていた奇跡的な賜物が去った後)、教会は(地域教会の集まりとして)神の言葉に対する努力を倍加し、ペテロが切に願ったように、彼らの教えを「思い起こさせる」ために苦心することでした(第二ペテロ 1 章 12-15 節, 3 章 1-2 節、参照:パウロの場合:第二テモテ 1 章 13 節)。しかし、私たちがエペソ人のケースで指摘したような罪の影響に対する「良い防御」にもかかわらず、使徒たちのダイナミックで聖霊に満ちた個人的な教えは、ほとんど失われてしまっていました。このことは、神の真理が少しも失われたとか、私たちから失われたとか、そういうことを意味するのではないことに注意しなければなりません。これらの聖典は実に愛情をもって保存され、収集され、配布されたので、今日、聖書の正典はすべて安全であり、広く利用できます。しかし聖典は、学び、信じ、適用されるには理解されなければなりません。聖霊の導きのもとに聖書を書いた人々によって遺された聖書の理解を保持することに失敗したことで、教会全体は霊的成長の領域で途方もなく勢いを失うことになった

⁹ ガラテヤ 1 章 6-9 節, 4 章 8-11 節, 4 章 19 節、ヘブル 5 章 11-14 節も参照。

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

のです。その勢いは、ある点においては何百年も後の宗教改革で、ようやく本当に取り戻され始めることになります。

このような出来事がなぜ起こったのか、どうして起こったのかを正確に知ることはできません。また、私たちの現在の経験が何らかの道しるべになるのであれば、主の視点から見て、何が真に重要な進展であり、誰が真に重要な人物であったかを知るためには、主による出来事の評価を待たなければならないことは確かです。¹⁰ ここで与えられた神の評価から言えることは、使徒たちが現場を去ると、神の言葉への献身の火は急速に冷めてしまい、偽りの教えや官能的な誘惑に対して、忠実な態度で抵抗しても、それは称賛に値する必要なものでしたが、聖書の教えを積極的に愛することに代わるものではなかったということです。十分な「攻め」(すなわち、神のみことばの真理を積極的に心から追い求めること)がない「堅い守り」は、私たちの主(主は、私たちが自分の賜物を、主のからだである仲間の救いと霊的成長のために用いることを期待しておられる)への奉仕という観点からは、適切でないだけでなく、最終的には、この善い「守

¹⁰ このことは、七つの教会時代すべてについて心に留めておくべき重要な注意点です。歴史家が興味を持つ事柄、過去に記録された事柄は、出来事の完全な記録を表しているわけではない。私たちは、ここに示された七つの時代の出来事に関する神の靈感による評価と、私たちのために保存されている靈感によらない「教会史」の大まかな記述を整合させることで、おおよその全体像をつかめることを望むことしかできません。

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

り」さえも損なうこととなります。クリスチャン生活において私たちが何をするにしても、何を控えるにしても、すべては私たちの主イエス・キリストに対する積極的な信仰からなされるべきなのです(ローマ 14 章 23 節; コロサイ 3 章 17 節)。つまり、罪と悪に対する抵抗も、真理と善行の遂行も、神の原理、模範、教え、教理、真理、言葉に一貫して、持続的に、有意義に浸ることによってのみ可能となるような、私たちの主であり救い主との生きたダイナミックな関係から生まれるべきなのです:

このような人は主のおきてをよろこび、昼も夜も
そのおきてを思う。(詩篇1章2節)

どんなに良い行動パターンであっても、それが元々基となる生き生きとした力強い動機の源から切り離されてしまえば、もろくも律法主義的な、単なる機械的な丸暗記と伝統になりかねません。そして、ひとたび正しいことが間違っただ理由のために行われ始めると、崩壊と腐敗は時間の問題です。聖句によってもたらされた明確に確証してくれる知恵によって、私たちはエペソ時代の短い歴史が教会にとって最善のものであったことを知ることができます。彼らの立派な振る舞いにもかかわらず、神の言葉に代わるものは昔も今もありません。

エペソに対するキリストの自己描写:

1. 「七つの星を持つ者」: ここでは、「七つの星(すなわち教会)

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

を支配する者」(ギリシャ語ではクラテオ、κρατέω 支配する)と「七つの金の燭台の間を歩く者<英語直訳>」の両方の表現が、主の教会に対する完全な権威に注意を促しています。この世で私たちが注目すべきなのは、伝統や快適な儀式(エペソの過ち)ではなく、私たちの主人、神の言葉そのものである主イエス・キリストなのです(ヨハネ 1 章 1 節)。キリストは私たちの権威であり(エペソ 1 章 22 節, 4 章 15 節, 5 章 23 節)、私たちには、どんなものも神の言葉(詩篇 138 篇 2 節 [ヘブル語と KJV])よりも重要になることを許す余裕はありません。

エペソへのキリストの特別なメッセージ:

1. 「私は、あなたがたの働きと労苦と忍耐を知っている」: 真の「良い行い」とは、信仰と誠実の結果であり、救い主イエス・キリストに対する真実で生きた信仰が、イエス・キリストのために行動する動機となるのです(ヤコブ 2 章 14-26 節)。これには、今日私たちが「慈善」と呼んでいるものも含まれますが、それだけに限定されるものではありません。善い行いの目的は神を讃えることであり、真の神の善を行う手段には、他の人々がキリストに近づき、キリストにあって忍耐し成長するのを助けるあらゆるものが含まれます。このことは、信仰と善行に関する最も議論的となる箇所、すなわちヤコブ書の中で、並外れた「信仰のわざ」の例として挙げられているのが、期待に反して、犠牲的な慈善活動の例ではなく、むしろ困難な状況の中で神を信頼した例外的な例であることを説明しています。これらの例はいずれ

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

も、信仰者が勇氣ある信仰をもってどのように行動すべきかの模範を示しており、私たちにも同じように行動するよう促しています。どちらも、単なる金銭的な犠牲や、物質的なことで手を貸す例ではありません:すなわち、アブラハムが一人息子のイサクを犠牲にしたこと(ヤコブ 2 章 21-24 節)、ラハブが命がけでイスラエルのスパイを守ったこと(ヤコブ 2 章 25 節)です。これらの例はいずれも、信仰者が勇氣ある信仰をもってどのように行動すべきかの模範を示しており、私たちにも同じように行動するよう促しています。

このような真の忍耐と信仰の業は、必然的に一緒に働くものです(ヤコブの手紙が確認しているように:ヤコブ 2 章 26 節)。なぜなら、それらはどちらも霊的成長の結果であり、神の言葉を聞き、信じ、学び、実践するという徹底的な基礎の上に成り立つものだからです¹¹。エペソの信徒たちは、以前はこのようなパターンでしたが、この「はじめの愛」はもはや彼らの最優先事項ではなく、暗記と伝統に取って代わられたようです。

物質的な慈善行為(が唯一の「善い行い」として[間違っ]て多くの人々に理解されてしまっているように)は、イエス・キリストの王国を前進させるという善い目的を念頭に置いた、適切な霊的動機の結果であることが多いのは確かですが、しかし皮肉な

¹¹「ペテロの手紙」シリーズ#10～#14 参照。

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

ことに、物質的な慈善行為は、聖書の真の目的(他の人々もイエス・キリストについて学び、弟子としてイエス・キリストに従う機会を与えられるような手段を提供することによって、神の憐れみを示すこと)から切り離され、神のダイナミックな目的と力(それを取って代わるものではなく、それに応えるべきもの)を取って代わるものとされるとき、つまずきとなる可能性があります。この点でも、エペソ人への手紙の信徒たちは、過去から引き継いだ正しい手法(慈善事業への執着)を化石化させ、その一方で霊的な土台を捨ててしまったことは明らかでしょう。

2. 「あなたが、悪い者たちをゆるしておくことができません」: ここで「悪」と訳されている語はギリシャ語のカコス(一般的に悪い、邪悪な)ですが、この語は次の節の偽使徒への言及と 6 節の「ニコライ宗の人々」への言及によって取り上げられているので、ここで示されている特定の邪悪さは、教会に関する限り、おそらく最も危険な形の邪悪さ、すなわち、偽教師とその信奉者たち、そして彼らが推進する偽教理と邪悪な実践の組織的な邪悪さであることは明らかです。各教会の時代と悪魔の影響との関係というこの同じ問題は、七つのメッセージすべてで(少なくとも暗黙的に)扱われているので、真の教会によって正しく実践される真理に対するサタンの組織的攻撃という悪質な現象を説明し、特徴づけるために主が用いられたさまざまな用語について、ここで全体の概観をとりあげることは有益でしょう。

偽教師、偽教理、そして偽クリスチャン: まず第一に、こ

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

これらの七つのメッセージの中で様々な名前(ニコライ宗の人々、イゼベル、サタン¹²の会堂、偽の使徒など)で繰り返し述べられている悪は、偽りの宗教、カルト、哲学の数々を通して不信仰な人類を陥れようとする悪魔の世界的な努力とは区別されるべきであるということに注意することが重要です¹²。それどころか、ここに記されている七つのメッセージの中で様々に述べられている偽りや悪の影響は、特別にかつ完全にイエス・キリストの教会に対して向けられたものです。より正確に言えば、これらの「グループ」は、イエス・キリストの真理、人格、目的に反する個人、グループ、偽りの教えによって、真の教会を悪魔が歴史的に攻撃し、侵入してきたことを表しているのです。結局のところ、真の教会は私たちの目で見ることにはできません。真の教会は、純粋にイエス・キリストを信じる者、イエス・キリストに従うことに生涯を捧げた真の弟子たちによって構成されています。真の教会は建物ではないし、物理的な構造で定義することもできません。組織でもなく、特定の団体や官僚組織で定義されるものでもありません。真の教会は、人間が定義できるものでもなければ、完全に確信を持って認識できるものでもないのです。誰が本当

¹² このシステム、すなわち悪魔の支配する「世界システム」は、「サタンの反乱」シリーズ第 4 部「サタンの世界システム」の主要テーマです。人類の歴史における悪魔のこのシステムの実体については、「サタンの反乱」シリーズ第 5 部「裁き、回復、置き換え」の III 項「サタンの対抗戦略」も参照してください。偽りの教えと真の教会への浸透に関する追加情報は、本シリーズのパート 3A、II 項、「大いなる背教」にもあります。また「聖書を読もう: カルトからの保護」も参照してください。

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

に主のもので、誰が本当に偽りものであるかは、主だけが知っておられるからです(第二テモテ 2 章 19 節; ヨハネ 10 章 14 節; 第一コリント 8 章 3 節; ガラテヤ 4 章 9 節も参照)。十二使徒のエリート集団の中でさえ、一人は「悪魔」(ヨハネ 6 章 70-71 節)であり、この言及による主の暗黙の戒めは、主を純粹に信じるすべての人にとって重要な教訓となります。神のみぞ知る事柄について、決めつけることは注意が必要です。最も正統的な組織の中にも、最も熱心な教会の時代の中にも、偽りの教師、偽りの教義、偽りのクリスチャンがいたからです。そして、私たちの敵は、あらゆる真のクリスチャン・グループや組織に浸透し、倒錯させ、破壊することを最優先課題としてきたと断言できます。このことは、七つの教会時代における「偽りの者たち」についての主の記述の概要からわかるように、教会の歴史を通してそうでした:

エペソ: **偽の使徒**たちは拒絶され、**ニコライ宗の人**たちは嫌われた。

スミルナ: **サタンの会堂**によって中傷される[教会の外から攻撃する偽る者]。

ペルガモ: あなたがたには**バラムとバラク**がいる[教会の中にいる偽り者達]。

テアテラ: **イゼベル**[偽りが教会と妥協し、そのため教

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

会を内側から危うくする]。

サルデス: 言及されたグループはない[偽る者によって、目に見える、見かけの「教会」から、真実が排除された]。

ヒラデルヒヤ: **サタンの会堂**の発覚[真実は偽る者から分離した]。

ラオデキヤ: 言及されたグループはない[偽りが真の教会に浸透し、教会を鈍化したため、偽りと真実が一つに溶け込み、見分けがつかないぬるま湯の塊になっている]

教会のどの時代にも、偽(組織化されたキリスト教に浸透した悪魔)と真(組織とは関係なく、イエス・キリストを信じる真の信者)との闘いがあったことを示すには、上の表を見れば十分でしょう。「クリスチャン」と名乗った人すべてが、実際にそうであったわけではなく(この原則は今日でも適用されます)、他方、世間で「正当なキリスト教」と見なされているものから除外されている人すべてが、キリストの真の体、すなわち本物の教会から排除されているわけでもありません。

私たちが認めてきたように、組織は重要であり、ある程度の官僚主義はどんなこの世の団体にも必要です。しかし、教会の大小にかかわらず、そのようなものが独自の勢いを持つように

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

なり、すべての真の教会組織はイエス・キリストの福音を広めイエス・キリストのもとに導かれたすべての人々の霊的成長を促し教化するという目的を超えた重要性を持つようになってしまうことがあまりにも多いのです：教会の歴史の中では、「キリスト教徒」を名乗るある種の組織が、この主要な任務を果たせなかったばかりか、他がそうするのを妨げ、イエス・キリストに従う真の信者を迫害し、殉教させるまでに至ったということがたびたびありました。

物理的な施設も重要です。どのような教会にとっても、集会を開く場所があることは非常に有益ですが、教会の大小を問わず、いつの時代にも、教会組織の物理的、時間的、具体的な関心事が議題を支配するようになり、神の言葉を広め、教えるための(組織的に言えば)主軸である宣教や伝道の働き、聖職者の訓練や支援から貴重な資源(物質的なものだけでなく、霊的なもの)を奪ってしまうことがあまりにも多いのです。霊的な基礎よりも物理的な上部構造を重視するこの傾向は、無意味なものであるだけでなく、その追求に任せておくと、その終わりはいつでも、それにかかわる組織や個人の信仰を完全に死に至らしめることになります。

イエスが世界史上最も崇高な宣教を成し遂げるにあたって、官僚制や建物の恩恵を受けなかったことは注目に値します。コストがかかろうともイエスに従うことを選んだ一握りの献身的な人々と、利用可能な空き地やスペースがあればそれで十分だ

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

ったのです。これは、それ以降の信者がこのモデルに正確に従うべきであるとか、確立された組織構造の発展や専用の建物の所有が誤りであると言っているのではありません。確かにどちらもためになるでしょう。ここで引用した主の例は、教会の歴史の中で、ほとんどは言わないまでも、多くの組織がそのようなことに重点を置き、優先してきたことが、実際には見当違いであり、実に多くの場合、逆効果であったばかりか、しばしば悲惨な結果を招いたことを説明するためにすぎません。私たちは目的のためにここにいるのです。私たちは主を信じ、主に従うために、主の言葉を学び、それを実践するために、そして神が私たちに与えてくださった奉仕や賜物を通して、他の人々が同じように実践するのを助けるためにここにいるのです。官僚的な組織や物理的な設備がこの第一の目的に役立つのであれば、それに越したことはありませんが、イエス・キリストを信じる真の信者として、私たちは、そのような二次的なものが私たちの真の第一の義務である神の御言葉を学び、生きることから私たちを遠ざけたり、注意をそらしたりしないように、努力しなければなりません。

3. 「...あなたが…使徒と自称してはいるが、その実、使徒でない者たちをためしてみ、にせ者であると見抜いた…」(黙示録2章2節): 「にせ者」について上記の歴史的概要で述べたように、エペソ時代の教会は、偽りの影響や偽りの教師を見分けるという非常に重要な点で成功し、彼らに迎合したり、妥協したり、彼らと交わるのではなく、彼らを拒絶しました。使徒パウロ

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

が文字どおりのエペソの長老たちに告げた別れの言葉は、この点に関して適切なものであり、使徒後の教会がこの警告と同様の他の警告を実際に心に留めていたことを示しています(ローマ16章17-18節; 第二コリント11章13-15節; エペソ4章14節; コロサイ2章16-23節; 第一テモテ4章1-5節; 第二テモテ2章23節-3章9節; テトス1章11節; 第二ペテロ2章1-22節; 第一ヨハネ2章22節; ユダ4節参照):

わたしが去った後、狂暴なおおかみが、あなたがたの中にはいり込んで、容赦なく群れを荒すようになることを、わたしは知っている。また、あなたがた(長老たち)自身の中からも、いろいろ曲ったことを言って、弟子たち(信者たち)を自分の方に、ひっぱり込もうとする者らが起るであろう。だから、目をさましていなさい。そして、わたしが三年の間、夜も昼も涙をもって、あなたがたひとりびとりを絶えずさとしてきたことを、忘れないでほしい。(使徒行伝 20章29-31節)

パウロの警告は、使徒ペテロとヨハネによっても繰り返されています:

しかし、民の間に、にせ預言者が起ったことがあるが、それと同じく、あなたがたの間にも、にせ教師が現れるであろう。彼らは、滅びに至らせる異端をひ

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

そかに持ち込み、自分たちをあがなって下さった主を否定して、すみやかな滅亡を自分の身に招いている。また、大ぜいの人が彼らの放縱を見習い、そのために、真理の道がそしりを受けるに至るのである。彼らは、貪欲のために、甘言をもってあなたがたをあざむき、利をむさぼるであろう。(第二ペテロ2章1-3節前半)

愛する者たちよ。すべての[預言者と呼ばれる人たちの]霊を信じることはしないで、それらの[預言者たちの]霊が神から出たものであるかどうか、ためしなさい。(第一ヨハネ4章1節)

これらの警告は、主ご自身が語られた同様の言葉を思い起こさせてくれます:

にせ預言者を警戒せよ。彼らは、羊の衣を着てあなたगतのところに來るが、その内側は強欲なおおかみである。(マタイ7章15節) (参照:ヨハネ10章12節)

「使徒」(あるいは伝道者、預言者、教師、牧師など)を名乗ることは非常に簡単です。初代教会の時代には、真の使徒たちがこの世を去ってしまえば、よそ者がどこかの町にやっけてきて、(例えば、實際の使徒の一人と以前から関係があったと主張す

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

ることを根拠に)ある程度の使徒的權威の所有を主張することは簡単なことだったでしょう。上に引用した箇所(および列挙した他の文献)から、交わりの右手を差し伸べたり、彼らの言葉を真実として受け入れたりする前に、そのような人物や彼らの教えが本物であることを確かめる責任があったことは明らかです。結局のところ、私たちがここで考察しているエペソ時代の教会の場合、この時代のクリスチャンたちは、そのような偽りの主張を拒絶したことを主から称賛されています。すぐ上に引用したマタイによる福音書七章の箇所で、偽教師について主が述べられた「羊の皮をかぶった狼」の言葉の引用の続きは、次のとおりです:

あなたがたは、その実(すなわち、彼らの言葉、教え、行状、やり口)によって彼ら[偽預言者たち]を見わけけるであろう。茨からぶどうを、あざみからいちじくを集める者があるか。そのように、すべて良い木は[益をもたらす]良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。良い木が悪い実をならせることはないし、悪い木が[好ましい]良い実をならせることはできない。良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれる。このように、あなたがたはその実によって彼ら[偽預言者たち]を見わけるのである。(マタイ7章16-20節)

イエスご自身が私たちに与えてくださった「実のテスト」は、ど

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

のような形であれ、神の御言葉を伝えようとするすべての人を私たちが判断し、評価する基準であり続けており、私たちは(主ご自身によって)、エペソ時代の教会が行ったように、新しい要素(個人またはグループ)の教え、権威、交わりを私たちの中に受け入れる前に、このテストを注意深く用いるよう、よく勧められています。なぜなら、神の御言葉の真理に関して厳格であることを怠ることこそが、真理と偽りが混ざり合うことにつながり、私たちのラオデキヤ時代の教会を特徴づけているからです。

この基準は「良い木」に適用されるのであって、悪い木に適用されるのではないことに注意すべきである。本当にみことばに仕える者は、イエス・キリストが個人的に管理される、より高い裁きの基準の下で働きます(すなわち、適切な実を結ばなければ、「切り倒され、火に投げ込まれる」)。それゆえ、真の牧者(「良い木」)の有効性を判断するのは、個々のクリスチャンの役割ではありません。- それはキリスがされることですし、本物の教師であれば、彼の間違いはいつでも、どこでも、すぐに戒められることとなります。むしろ、「良い木」と完全に「悪い」木の間の区別をするのが、個々のクリスチャンの責任なのです。したがって、「実のテスト」は、見分けることが不可能な基準ではなく、神の言葉を教えていると称する人々の働きを調査する際に適用する比較的簡単な経験則なのです。聖書の基本原則を最低限知っている普通の知性と常識のある人なら、特定の木が「一般的に、本質的に、救いようのないほど悪い」カテゴリーに属するかどうかを見極めるのは難しいことではありません。

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

というのも、そのようなミニストリーの悪い実を隠すことは不可能だからです。最近の格言でこの事柄に当てはまるものがあります:「正直者をだますことはできない」。普遍的な事実でないにしても、その裏にある意味は吟味するに値します。つまり、不誠実な人ほど、その性質ゆえにペテンにかかりやすいということです。同様に、精力的に靈的成長を追求し、熱心に師に従っている人を欺くのは、師への献身が少なく、クリスチャンとしての歩みがいい加減な人を欺くよりもはるかに難しいのです。神の御言葉の真理を追い求めることにあまり興味がない人は、必然的に「もっと面白いこと」を熱望し、それゆえ「スパイシーな(興味を惹く)」偽りの教えに陥りやすいのです。また、個人的な行動において主に忠実に従っていない人は、自分がしている間違ったこと(あるいは、自分が陥っている正しいと思える事)が本当は大丈夫だと教えてくれる人に対して、どうしても好意的になってしまうのです。言い換えれば、自分自身が「悪い木」になりかけている人は、偽教師のこの特徴に気づくことができない(あるいは、気づこうともしない)可能性が高いのです:

[テモテよ、]神のみまえと、生きている者と死んだ者とをさばくべきキリスト・イエスのみまえで、キリストの[再臨の]出現とその御国とを思い、おごそかに命じる。御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても、それを励み、あくまでも寛容な心でよく教えて、責め、戒め、勧めなさい。人々が健全な教に耐え

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

られなくなり、耳ざわりのよい話をしてもらおうとして、自分勝手な好みにまかせて教師たちを[自分たちの取り計らいにより]寄せ集め、そして、真理からは耳をそむけて、(偽教師たちによる)作り話の方にそれていく時が来るであろう。(第二テモテ4章1-4節)

教会の歴史において、自分たちの利己的な利益(それが富であれ、権力であれ、名声であれ、何であれ)のために、私たちがここで論じているような弱いクリスチャンに、彼らが聞きたいと思うことをそのまま伝えようとする人たちに欠けることはありませんでした。このように、聴衆の願望に教えを合わせようとする姿勢は、偽教師の特徴です。もう一つ、一見これに対して正反対に見える偽教師たちの特徴として、自分たちの周囲にいるすべての人をいじめ、威張り散らし、洗脳して、とんでもない、明らかに聖書的でない教えを受け入れさせようとする傾向があります。しかし、実際には正反対であるどころか、どちらの行動パターンにも共通しているのは、聖書に見出される真の真理に対しても、彼らに従う人々の福祉に対しても、まったく無関心であることです(つまり、彼らは羊を捕食する本当の狼です:ゼカリヤ 11 章 16 節参照)。実際、この両方の行動は、同じ個人、カルト、偽キリスト教組織の中にしばしば見られます。新しい信者は、彼らの「かゆい耳」が聞きたいと望むものであれば何でも引き付けられ、後に、釣り針が適切に仕掛けられた後、彼らを搾取する寄生虫のために、彼らをより柔順にするように設計された間違った教えの数々を受け入れさせられ、徐々に奴隷にされるだけだからで

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

す。

「**実のテスト**」：キリストから離れようとする者にとっては、偽りの虜になるのは時間の問題なので、このような「**霊のテスト**」はすべて無意味です。純粹にイエス・キリストに従い、キリストの弟子であろうとする人々にとっては、偽りの教え、偽りの教師、偽キリスト教集団に影響されにくいのは事実ですが、それでも、霊的な安全のためには、主が指示された方法で「**実のテスト**」を適用し続けることが不可欠です。

1) 教師をテストする:他人を評価したり裁いたりすることは、常に危険なことであり、不必要であれば避けるべきことです(マタイ 7 章 1-2 節; ルカ 6 章 37 節)。しかし、聖書の深い教えがなければ、霊的な成長は非常に難しく、またそのためには、信者がその教師の権威をある程度受け入れる必要があることを考えると、そもそも特定の人の教えの権威を受け入れるかどうかという問題に関しては、少なくとも最初に評価をすることが望ましいわけです。

これは、この特定の教師のライフスタイルや個人的な行動は、非難のないものであることを、そしてそれが少なくとも正確で公平な裁きで、うわべで判断しているものでないことを(第一テモテ 3 章 1-15 節; テス 1 章 5-9 節参照)意味します(ヨハネ 7

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

章 24 節)。¹³ 結局のところ、多くの偽教師は、自分の本性を覆い隠して、聖なるイメージを演出するために多大な労力を費やし、問題が明白なものでなくすることが多いのです(マタイ 23 章 27-28 節)。詐欺師がしばしば自分の欠点を隠すことに細心の注意を払う一方で、本物の教師は、無邪気さゆえに、自分の欠点を隠すことにあまり注意を払わないかもしれません(結局のところ、私たちの誰もが完璧ではありません)。ですから多数の人に見てもらうための聖人ぶった行動は誰をも警戒させるべきで、偽教師には少なくとも一つの「ボロ」が出てしまうもの、または見逃すことができない欠点があり、その根底にあるものが明らかになることが多いものの、その根源を見定めるのは簡単ではありません。このことが、少なくとも部分的には、(もっとわきまえていべき)ある人たちが(その洗練された欺瞞に基づいて)偽教師を受け入れてしまったり、(過剰な律法主義に基づいて)ある人たちが(特有のクセや些細な欠陥に基づいて)真の教師を拒絶することの原因となっています。すべてのことについて言えることですが、祈りと御霊の助けによって、注意深く、バランスの取れた、冷静な判断をすることによって、この両極端を避けること

¹³ というのも、本当に罪のある人は、自分たちの不愉快な行動に関する報道を封じたり、隠したりするのに苦勞することが多いからです。結局のところ、少なくとも一度、私たちの主は、「ベツレヘムではなくナザレの出身である」という誤った理由で、エルサレムの人々から疑われました(しかし、広まった噂とは裏腹に、現実には:ヨハネ 7 章 41-42 節; マタイ 2 章 1 節も参照)。

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

はできるはずです。

2) 教えをテストする : 私たちの主が、このような問題において、私たちの注意を木そのもの(「良い」ように見えるかもしれない)ではなく、むしろ、その良し悪しを隠すことのできない実に向けられるのは、まさにこのためであることは確かです。私たちは、人々が個人的な行動で「私たちに見せる」ことを選んだものから、心の本質を見分けることは必ずしもできないかもしれませんが、その生産物である果実の質を判断することは、より簡単なことです。この点では、文字通りの果物の例えが役に立ちます。良い果実は一般的に見れば一目瞭然で、見た目も香りも良いです。特定の種類の果物の経験が少しでもあると、試食する前から品質について騙されることはめったにありません(そして私たちはしばしば、重さ、色、光沢、匂いなどを判断するために市場で労を惜しみません)。もし間違えたとしても、一口食べれば、その果物が腐っている、熟していないか、あるいは品質が悪い(害虫がいるなど)かなどがわかります。また、まれにこうした要素があるにもかかわらず食べてしまうことがあれば、私たちの身体はそれに対して、そのような間違った判断を継続させないような反応をしてくれるでしょう(例えば、青リンゴを食べ過ぎることは滅多に繰り返すことはありません)。実際の果実の話では、このようなことは明らかなのですが(そして主は、私たちが弁解の余地も、無知を弁明する機会もないような例えを選ばれました)、これほど多くの人々が、悪い「霊的な果実」、つまり偽りの、あるいは不適切な、あるいは準備不足の教師の嘘やごまかしに甘

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

んじること固執し続けるのは、驚くべきことではないでしょうか。木について確信を持ってなくても(偽り教師は、魅力的で、人気があり、上品で、禁欲の手本とでも言えるような人かも知れません)。(この問題を文字通りの実に置き換えてみると)もしその実や教えが悪いものであれば、それは目に見えて悪臭を放ち、味は明らかに悪く、まぎれもない霊的な消化不良を引き起こすからです。もしその教えが偽りであれば、(外側が傷ついたバナナのように)私たちの霊的疑惑を即座に呼び起こし、(内側がまだらになったアボカドのように)聖書を精査しても一致せず、(良識があるにもかかわらず食べてしまった腐ったリンゴのように)もし私たちが愚かにも「それを受け入れてしまう」のであれば、私たちの霊的生活に突然の問題を引き起こし、その問題は私たちに間違いを即座に警告してくれるはずです。

現実の果実に関しては、悪い果実を我慢して食べ続け、とんでもないことになることはわかっているが、その結果を耐え続けるというのは「気が狂っている」としか言いようがありません(前代未聞の事態です)。霊的な実の話では、(肉、目、エゴが欲するものではなく、キリストに従うことに献身していることになっている：第一ヨハネ 2 章 15-17 節)霊的にまだ正気を保っている信者は、(最初から怪しかった)問題の根源から離れるという、同じような反応をしなればなりません。悪い実と悪い教えのこの例えの主な違いは、悲しいことに、明らかに悪い実を良い実と呼ぶような物理的な現実の認識を意図的に歪めようとする人間はほとんどいませんが、心を頑なにしていまい、霊的な現実を

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

歪めて、危険なほど不十分な教えや意図的に欺く教えを良い教えと呼ぶことが、あまりにもよくあるということです(エペソ 4 章 17-19 節)。これは、私たちが置かれている霊的な戦いと大いに関係があるのです。一方では、果物の木には隠された意図はありませんが、偽教師(そして彼らを動機づけ、利用する悪魔)には明らかに意図があります。一方、腐った文字通りの果実を食べる動機は、支払うべき痛みを伴う代償によって簡単にとり去られてしまいます。しかし、私たちの心の隠れた欲望すべてに関して言えば、私たち人間は常に、間違っているとわかっていること(しかしやりたい、あるいはやりたいこと)が本当はすべてそれでいいのだと教えてくれる人々に最も影響されやすいということです。蛇がエバに、あの最も有名な果実を食べれば、主が予告されたような悲惨な結果をもたらすことはないばかりか、むしろ良い効果さえあると告げて以来、ずっと当てはまることです(創世記 3 章 4-5 節)¹⁴。

また、古い世界をそのままにしておかないで、その不信仰な世界に洪水をきたらせ、ただ、義の宣伝者ノアたち八人の者だけを保護された。(第二ペテロ 2 章 5 節)

¹⁴ エバに対する悪魔の誘惑についての詳細な解説と考察については、『ペテロの手紙』シリーズ #27、およびサタン¹の反乱』の第 3 部「人間の目的、創造と墮落」(IV.1-2 節)を参照のこと

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

偽教師たちの「悪い実」を選ぶことは、そもそも霊的な近視の結果であり、そのような有害な行動を続けるなら、最後には霊的に完全な盲目となります。(マタイ 6 章 22-23 節, 15 章 14 節; マルコ 4 章 12 節; ルカ 8 章 10 節後半; ヨハネ 9 章 34-41 節, 12 章 40 節; ローマ 1 章 21-32 節; 第一ヨハネ 2 章 11 節):

もしわたしたちの福音がおおわれているなら、滅びる者どもにとっておおわれているのである。彼らの場合、この世の神が不信の者たちの思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光の福音の輝きを、見えなくしているのである。(第二コリント 4 章 3-4 節)

親愛なる友よ、イエス・キリストの熱心な信者が「悪い実」の誘惑に捕らわれることはめったにない(たとえそれを望んでも、霊的な「知恵」を保ち、それを拒む)のはこういう理由だからです。一方、中途半端で生ぬるい人は、偽教師の格好の標的となってしまう(自分の様々な欲望を満たすために、それが何であれ、提供される現実の偽りバージョンを受け入れることにあまりに熱心になってしまうからです)。

3) グループをテストする: 完璧な人間などいないのだから、たとえ正当なキリスト教会であっても、どんなグループにも完璧な振る舞いを期待することはできません。とはいえ、大規模な乱暴な行動や奇妙な行動は、「キリスト教」教会であろうとも、その聖性

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

を疑うに十分な理由となるはずですが(もちろん、どのような組織にも時折「[何をしでかすか分からない]危険人物」のような者がいることを考慮に入れてのことです: テトス 1 章 16 節)。一方では不道徳に、他方では律法主義的な独善に向かう傾向が会員の行動において明らかであり、著しい場合を除けば、特定の自称「信者」のグループが本当に私たちの主に従っているかどうかを判断するには、他の要因も考慮する必要があります。神と神の御言葉から離れて、自分たちの目的のために活動している組織には、(偽って)クリスチャンだと公言しているグループにも、ある種の特徴づける兆候が必ず存在します。「偽のグループ」であることを示すものには、次のようなものがあります(ただし、これらに限定されるものではありません)。

- 聖書によって明白かつ容易に反論されることを教え、実践する(1 コリント 15 章 12-19 節参照)。
- 個人的な聖書通読や個人的な聖書研究を奨励しない(または禁止する)(使徒行伝 17 章 11 節参照)。
- 指導者のみが利用でき、指導者のみが解釈する「秘密の教義」や「口伝」に固執する(コロサイ 2 章 18-23 節参照)。
- 公言し宣言している善良な基準を、(公然とではないが)偽善的に犯す(マタイ 23 章 27-32 節参照)。

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

- 金銭や快樂のために自分たちの会員を利用しようとしたり、その他の方法で利益を得ようとしたりする(使徒行伝 20 章 29-30 節参照)。
- 会員の生活を管理し、意思決定を支配しようとする(第二ペテロ 2 章 18-22 節参照)。
- 会員を友人や家族、社会全体から孤立させようとする(ガラテヤ 4 章 17 節参照)。
- キリストの働きではなく、自分の行いに基づいて、優れた義や道徳を主張する(ヒリピ 3 章 7-9 節参照)。
- イエス・キリストへの信仰と忠実さから離れての永遠の命と救いを約束する(ガラテヤ 1 章 6-9 節参照)。
- 教えや行動によってイエス・キリストを否定する(第二ヨハネの手紙 7 節参照)。

この最後の評価基準である「キリスト・テスト」は、キリスト教を名乗るグループの評価の核心であるべきです：

…イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白する霊は、すべて神から出ているものであり、イエスを告白しない霊は、すべて神から出ているも

のではない…(第一ヨハネ 4章2後半-3節前半)

この条件を満たすためには、以下の原則(「イエス・キリストは肉となって来られ、神である」という命題に自然に伴附するものとして聖書が教えている)を認め、それを堅持しなければなりません:

- イエス・キリストは限りない神であり、また真の人間である(ローマ9章5節; 第一ヨハネ5章6-12節)。
- 全人類のために死なれるためにこの世に来られたこと(ヨハネ 3 章 16 節; 第一ペテロ 2 章 24 節)。
- その御業が御父によって受け入れられるとみなされたこと(ローマ 3 章 21-26 節)。
- 私たちが救われるのは、イエス・キリストを信じる信仰と、イエス・キリストの御業のみによるのであって、私たち自身の行いによるのではないこと(エペソ 2 章 8-9 節)。
- イエス・キリストを信じる信仰がなければ、父なる神に近づく道はない(ヨハネ 14 章 6 節)。
- イエス・キリストを信じる真の信者は、この地上での生涯を通して、キリストとその教えに従う(マタイ 7 章 20 節; ヨハ

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

ネ 8 章 31 節; 第一ヨハネ 2 章 4 節; 第二ヨハネ 1 章 9 節)。

教師、教え、グループを「テスト」することは、ある人々には(間違っ)て無礼に見えるかもしれないため、そのようなテストが必要であるいわゆる「クリスチャン」と呼ばれるグループの多くは、聖書が何を語っているかをチェックする習慣を必然的に避けてしまっています。この一つの面では、エペソの信者らは、よくやっていると主から称賛されました。

このような適切な「試すこと」は容易ではありません。特定の教えや行動ややり方が聖書的でないと判断するためには、時間と思考と努力が必要です(これは、聖書が広く一般に利用できるわけでもなく、利用できたとしても特に容易ではなかった 1 世紀には特に当てはまります)。教師になろうとする人たちや彼らの教条や組織が本当に「キリストのもの」であるかどうかをテストする過程や努力以上に難しいのは、そのような人たちがテストに落ちたときに、別れるという難しい決断を下すことです。明らかに間違っていて、聖句に危険なほど反している人、人物、教えを、(個人的であれ集団的なものであれ)関わりを断固として拒み続ける決意がなければ、世界中のどんなテストも無意味なものとなるでしょう。一方では、多くの偽教師、その教義、その組織が魅力的であり、他方では、そのような場合に妥協しようとする世間からの極端な圧力があることを考えると、私たちは、主が賞賛しておられるエペソ人のこの面での功績を、軽くあしらう

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

べきではありません。というのも、この 1 世紀の使徒後の信徒たちは、「偽りの者たち」を非常に効果的に締め出していたので、エペソの時代には、「目に見える教会」と「実際の教会」の間に、どこから見てもほとんど違いがなかったからです。全体がぬるま湯のようになっていて、偽と真が混ざり合い、区別のつかない塊になっている、ラオディキアの時代にいる私たちについては、主張できない事です。

偽りの教師、偽りの教え、偽りのグループを排除することに成功したエペソの信徒たちは、正しい教え(彼らの「はじめの愛」)を追求することに失敗したと批判される欠点を弁解することはできませんが、偽りの教師、教え、個人を拒絶することは、イエス・キリストの真の教会の信仰と実践にとって今でも重要な安全策です。

4. 「あなたは忍耐をし続け、わたしの名のために忍びとおして、弱り果てることがなかった」(黙示録 2章3節): エペソ時代の信徒たちは、キリストへの信仰とキリストへの忠誠を堅く守っていたのです。基本的な考え方が三回繰り返されること(「三連節」)は、その事実を補強し、強調する役割を果たしています。しかし、この三つのよく似た表現には、ちょっとしたニュアンスの違いがあります:

1) **「忍耐**(耐え忍ぶこと-英語で Perseverance)」: ギリシャ語のヒューポモネー-hypomone (ὕπωμα) という単語は、聖書の中で「忍耐(口語訳では「耐え忍ぶ」と訳されている場合があ

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

ります)」という重要な意味を持っています。(ルカ 8 章 15 節, 21 章 19 節; ローマ 2 章 7 節, 5 章 3-4 節, 8 章 25 節, 15 章 4-5 節などを参照)。これはもちろん、キリストを信じる者が、救われた後、まだこの世にいる間、信仰を積極的に継続することを指しています。ここでエペソの信徒たちが賞賛されている三つの資質のうち、特に「忍耐」と明示されているのは、エペソ時代の信徒たちが、当時のあらゆる困難、気を逸らさせるもの、問題(問題の最たるものには、この過渡期に使徒の指導がなかったことがあります)にもかかわらず、イエス・キリストへの個人的な信仰を維持し、イエス・キリストに忠実であったからです。

2) 「忍びとおす(新改訳は「耐え忍ぶ」、新共同訳は「我慢」-英語で Endurance)」: これは 2 節の「忍耐」と同じ言葉です。ギリシャ語の動詞バスタゾ(βαστάζω)は直訳すると「荷物を運ぶ」という意味であり、聖書では霊的な重荷を負うという比喩的な意味で頻繁に使われています(マタイ 20 章 12 節; ルカ 14 章 27 節; 使徒行伝 9 章 15 節, ローマ 15 章 1 節; ガラテヤ 6 章 2 節, 6 章 5 節参照)。従って、この第二の表現は、個人的な信仰の維持(人生の試練に「持ちこたえる」と共に、他の人々への宣教を継続すること(すなわち、信仰が死んでしまうことなく「良い行い」を「続ける」こと: ヤコブ 2 章 17 節)を意味します。

3) 「辛抱(弱り果てることがなかった)」: 「懸命な労働」は、ここでのギリシャ語動詞コピアゾーkopiazō(κοπιάζω)の核心的な意味です。一般的には純粹に肯定的な意味合いを持ちますが

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

(マタイ 11 章 28 節; ガラテヤ 4 章 11 節; ピリピ 2 章 16 節; 第一テモテ 4 章 10 節 参照)、完了形では、ここでのように「働き尽くした」、あるいは「疲れ果てた」という意味を持つこともあります。エペソ時代の信者が「勤勉に働いて」(クリスチャンの働きに)疲れ果てていないという主のことばは、文脈上、三つの表現の中で最も明確に、彼らの信仰の継続と、そこから湧き出る働きに関連しています。

5. 「あなたは初めの愛から離れてしまった」(黙示録 2 章 4 節): エペソ時代の信徒たちが、人生の試練に対して信仰を維持し、その信仰から主のために実を結び、この信仰生活と忠実な働きを妥協しようとする者(偽りの友)から安全な距離を保ってきたという良い実績があることを考えると、この次の批判が主から彼らに向けられるのは、最初は不思議に思えるかもしれません。しかし、エペソ時代の信徒たちは、一般的には模範的な行動様式をとっていたにもかかわらず、クリスチャン生活の中心的な問題であり、真の焦点である、神への愛と御言葉に対する愛(この二つは、実のところ分けて考えられるものではありません)への焦点を失っていたようです。神を愛することと、神が語られることを愛することに違いはありません(詩篇 138 篇 2 節参照)。イエス・キリストは神の生ける言葉であり(ヨハネ 1 章 1-2 節; ヘブル 1 章 3 節; 第一ヨハネ 1 章 1 節; マタイ 7 章 21-23 節参照)、神の言葉を離れては、私たちは神を知ることはできません(エレミヤ 9 章 23-24 節)。だから、聖書が「心をつくし、精神をつくし、思いをつくし、力をつくして、主なるあなたの神を愛せ

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

よ」(マルコ12章30節--イエスは聖書の申命記6章5節を引用しています)と命じておられるとき、それは、聖書の真理を生涯にわたって飲み続けることによってのみ可能であり、それなしには主を知り、主を愛することは不可能であることを理解しなければなりません。これは、救い主が初降臨された時代に、私たちと同じように霊的な進歩に挑戦された、救い主ご自身のアプローチであったことは間違いありません:「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」(マタイ4章4節:申命記8章3節も参照のこと)。私たちの主御自身、生ける神の御言葉であられる方が、ここで神の言葉を引用し、その言葉を私たちに勧めていることを、誰も見逃すことがありませんように！

エペソ時代の信徒たちは、それ以前も以後も、他の多くの信徒たちと同じように、すべてのクリスチャン生活における神のことばの優位性という、この最も重要な原則を見失っていました。その代わりに、使徒たちが去った後、聖句とそこに含まれる真理に対して無関心な態度をとっていたのです。これは理解できると同時に、残念なことです。人生は忙しく、生活に気を取られていたのです。そして、結局のところ、彼らは良い生き方を続けていました。さらに、使徒たちに続く世代の教えは、それに比べれば劣っていたに違いありません。ペテロ、パウロ、ヨハネに続く者たちは、この偉大で才能豊かな使徒たちの足元にも及ばなかったことでしょう。そしてまた、使徒教会を特徴づけていた(異言やその解釈、預言、癒しなどの)劇的な霊的賜物が衰え始め

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

ると、聖書を学ぶことはそのような奇跡的な出来事よりも刺激的ではないと考え、使徒たちの後継者たちの聖書の教えは、それに比べるといささか精彩を欠くと感じる誘惑が、非常に現実的であったことは間違いありません。

ここには、すべての信者のクリスチャンとしての経験に通じるものがあります。必然的に、キリストに改宗した後の興奮の時は過ぎ去り、輝きは薄れていくものです。神の御言葉は、客観的には常に刺激的で興味深いものです(言うまでもなく、私たちの成長と霊的な幸福にとって極めて重要です)が、当初の興味が薄れてしまい、勤勉さが必要になるとき、その観点から見ると決心しなければなりません。私たちの人生において、他の何よりも神の御言葉を優先させるという決意を固め、それを守らなければなりません(神の御言葉が私たちの心の中に第一にある場合にのみ、神は私たちの心の中に本当に第一におられるのですから)。なぜなら、クリスチャン生活において前進していないなら、人は成長していないのであり、実際、勢いがなくなってくると、結局は後退してしまうのです。このように、エペソ時代の信者たちが当面の間維持していた良い生き方でさえ、やがて危険にさらされるようになります。彼らが成し遂げてきた良い行いは、結局のところ、それまでの成長の上に成り立っていたのであり、霊的な萎縮はやがて、そして必然的に、どんなに高い水準にあるものさえも蝕んでしまうからです。エペソ時代の信者たちは、使徒時代の「楽しみ」を満喫していました。今日の言葉で言えば、彼らは音楽や社交、特別行事やゲストスピーカーを

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

好みますが、個人的な聖書研究の実践や、しっかりした聖書の教えの追求を熱心に忍耐強く続けることにはあまり関心がないということです。私たちの父であるイエスが私たちの第一の愛の対象であるなら、これらのことは私たちの「第一の愛」でなければなりません。なぜなら、私たちがイエスを知り、御心を知り、この世でイエスに仕える準備ができるようになるのは、ただイエスの御言葉を通してだからです。

6. 「あなたはどこから落ちたかを思い起し、悔い改めて初めのわざを行いなさい」(黙示録2章5節): 霊的成長において失われた勢いを回復することについて、主によって三つのステップが説明されています:

1) 思い起こす: エペソ時代の信徒たちは、かつての状況を思い起こし、現在の状況を考え、自分が霊的に後退した(「墮落した」)ことに気づくよう命じられています。クリスチャンの経験では、前進するか後退するかのどちらかです。この1世紀の信徒たちは、主によって目を覚まさせられ、過去の時代には神の御言葉に従って歩んでいたために、確かに神に近づいて歩んでいたことを思い起こさせられます。自分の置かれている現実を認識することは、霊的回復の第一歩です。個人的な罪に陥ったとき、回復の前にまず事実を認識し、認めなければならないのと同じように、自分の霊的な生活全体のコースに関しても同様です。船を方向転換させ、コースに戻すためには、つまり、私たちがますます神に近づけるようなコースに戻すためには、まず、現在

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

のコースが間違っており(すなわち、神の御言葉を優先させなかったこと)、主から遠ざかる結果にしかなっていないことを認めなければなりません:

こういうわけだから、わたしたちは聞かされてい
ること[教え]を、いっそう強く心に留めねばならな
い。そうでないと、**おし流されて**[道から外れて]しま
う。(へブル2章1節)

2) 悔い改める: 現実を直視し、自分の霊的な状態が悲しいものであることを認めたら、主が示された次のステップは「悔い改め」です。悔い改めという概念は、英語の言葉が多く of 誤解を生んでいるため、その説明には慎重さを要します。「悔い改めよ!」という命令には、間違っ て感情的な反応をさせたり、極端な行動に走らせる可能性があります、それは原語のギリシャ語が意味しているものではありません。一方、(ギリシャ語の動詞 *metanoëo*-μετανοέω の語源を考えると、「心」*nous* と「変化」*meta* の二つの要素を含んでいることから、これも理解できる解釈ではあるものの)この命令を感情の入らない単なる「心の変化」としても説明できません。ギリシャ語の語彙(と、それに対応するへブル語の表現、特にニチャム-נחםとシュブ-שוב)を調べると、一方では感情的な反応の度合いで悔い改めの妥当性を判断し、他方では悔い改めを冷徹で感情の入らない算定に限定するもので、そのどこか間に真実があることがわかります: 悔い改めとはむしろ、深く決心した「心の変化」、つまり人の態度の

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

真の「方向転換」であり、それは必ずしも最初の外から見れる感情の露出で判断されるものではありません。聖書的な真の悔い改めとは、単に見せかけのもの(つまり、長期的な変化を伴わない、目に見える一時的な感情的苦痛)ではなく、また単に原理的なもの(つまり、変化への決意を伴わない事実の受け入れだけにとどまるもの)でもなく、当然その行動の決定的な変化を伴う、過去の行動についての根底からの態度の変化です:

しかし、悪人がもしその行ったもろもろの罪を離れ、わたしのすべての定めを守り、公道と正義とを行うならば、彼は必ず生きる。死ぬことはない。その犯したもろもろのところが、彼に対して覚えられない。彼はそのなした正しい事のために生きる。主なる神は言われる、わたしは悪人の死を好むであろうか。むしろ彼がそのおこないを離れて生きることを好んでいるではないか。(エゼキエル18章21-23節)

3) 行いなさい: 上記の引用と悔い改めに関する考察が示唆するように、真の心の変化には、行動の真の変化が続くものです。過ちを直視し、新たな決意を固めたら、次の明白なステップは、この新たな決意を実行に移すこと、つまり、過去に実行できなかったことを実際に実行することです。エペソ時代の信徒たちは、明らかに(そして残念ながら)しくじってしまったものですが、こうした場合においては、神の言葉の追求を新たにすることであり、そしてそれを実践すべきなのです:

彼らは民が来るようにあなたの所に来、わたしの民のようにあなたの前に座して、あなたの言葉を聞く。しかし**彼らはそれを行わない**。彼等は口先では多くの愛を現すが、その心は利におもむいている。見よ、あなたは彼らには、美しい声で愛の歌をうたう者のように、また楽器をよく奏する者のように思われる。彼らはあなたの言葉は聞くが、**それを行おうとはしない**。(エゼキエル33章31-32節)

7. 「もしそうしないなら」: 霊的成長のプロセスを再活性化することに失敗した場合の結果は、主によってはっきりと明示されています。その罰として、エペソ時代の信者は、彼らの(教会時代の象徴である)「燭台」が即座に取り去られることを経験することになります。御言葉の中で日々成長することに挑戦することに消極的であり続けることは、「おとずれの日」をいっそう速めることになるでしょう(またそうでした)。というのも、初期の教会の戦闘員であるはずの教会員にとって、本来なら「最重要の愛」であるはずの、書かれた御言葉と生きている御言葉、切り離すことのできないイエス・キリストの御姿と御教えについて、生ぬるい態度をとり続けるということほど悲惨なことはないからです。この問題に対する信者たちの強情さのために、エペソ時代は(わずか 12 年後に)突然停止し、神は次の時代であるスミルナの時代を試練と特徴づけることになる一連の迫害によって、1 世紀の信仰者たちを霊的無気力から目覚めさせることになります。

わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞき、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさるのである。(ヨハネ15章1-2節)

この箇所は、主ご自身の言葉ですが、状況を完全に明らかにしています。キリストにある信者が進む道は一つです。すなわち、霊的生活の継続的な成長と、それから生み出されるものの中を歩んでいくことです。父なる神は、このような姿勢とアプローチで「働かれ」、私たちを刈り込み、剪定し、私たちが日々よりよく行えるように助けてくださいます。しかし、エペソのケースに見られるような霊的な後退の必然的な結果である実の欠如は、(この教会時代の最初の時代に実際にそうであったように) 取りのぞかれるという結末を迎えることになるのです。

8. 「あなたはニコライ宗の人々のわざを憎んでおり、わたしもそれを憎んでいる」: 上で説明したように、「ニコライ宗の人々」とは、キリスト教のふりをしながら、実際には私たちの主イエス・キリストの真の信者ではなかった偽教師とその信者のグループのことです。彼らの名前「征服者」(「征服」は動詞のニカオ *nikao*-νικάω からきており、「者(人々)」は単語ラオス *laos*-λαός から)の語源は重要です。というのも、聖書の教えよりも「多数決」を優先させるという、偽の使徒や偽信者たちの信条

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

(ラテン語の「vox populi, vox dei」、すなわち「民衆の言うことは神の権威である」)は、聖書の教えに無頓着になっていた人々には反論しにくいようにうまく仕組まれていたからです。しかし、エペソ時代の信徒たちは、その短い在任期間中に、このアプローチに抵抗し、拒絶しました。聖書に対する彼らの無頓着な態度によって、ニコライ派とその偽の使徒指導者たちに教理的に反論することは困難なことでしたが、そのような倒錯した教理から流れ出る**行い**を正しく評価し、拒絶することによって、彼らの偽りの教え(「あなたがたは(彼らの)行いを憎んでいる」)に迎合することを防いでいたからです。

主が喜んでおられるのは、エペソ時代の信者たちがニコライ人そのものを憎むことではなく、ニコライ人の行いを憎むことであることに注意しなければなりません。結局のところ、私たちはキリストにある兄弟だけでなく、例外なく全人類を愛するように命じられています(マタイ 5 章 43-47 節, 22 章 37-40 節; 第一コリント 13 章 1-13 節; 第一ヨハネ 2 章 7-12 節)、すなわち、イエス・キリストにある救いによって、すべての人が神と和解することを切に願うこと(そして可能な限り、それを促進すること)です(エゼキエル 18 章 23 節; マタイ 18 章 14 節; ヨハネ 12 章 47 節; 第一テモテ 2 章 4 節; 第二テモテ 2 章 24-26 節; 第二ペテロ 3 章 9 節)。しかし、ここで注意しなければならないのは、逆もまた真であるということです。私たちは、主の模範に倣って、悪を行う者たちの悪の行いや悪行を憎むべきなのは確かです。この二つの態度(神が造られたすべての人に対する愛と、神の完

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

全な意志に反するすべての行為に対する憎しみ)はまったく矛盾するものではないので、混同してはいけません。クリスチャンが悪人を憎むことは明らかに間違っていますが、「クリスチャンは常に愛するべきである」という口実で間違った行動や悪行を**正当化することも**、明らかに間違っているからです。結局のところ、私たちは自分の子供たちを愛しながら、同時に子供たちの危険な行動を(罰するまでもなく)憎むことができます。では、不道德な行為、違法行為、不法行為、あるいはその他の忌まわしい行為に関与している未信者の場合は、なおさらそうではないでしょうか。反神的な行為に嫌悪感を抱くあまり、私たちが全人類に向けるよう命じられている普遍的な愛が損なわれてしまわないように注意しなければならないのと同様に、私たちもまた、この純粹で義務的なクリスチャンの愛の態度が、あらゆる悪、憎むべき行為、罪深い行為に対する私たちの断固とした態度を鈍らせ、和らげることのないように苦心しなければならないのです。エペソ時代の信徒たちは、前者に基づいて非難されることなく、後者の配慮に基づいて賞賛されていますが、私たちは皆、どちらにおいても非難されることのないよう目指すべきです。

キリストがエペソに約束された報い：

1. 「…勝利を得る者には、神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べること[の権利]をゆるそう」。(黙示録 2章7節)

報酬が与えられるのは「勝利を勝ち取る」者にと限定は、

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

主から教会の七つの時代それぞれに向けられた七つのメッセージすべてに共通する特徴です。「勝利を勝ち取る者」という言葉は、実はギリシャ語の属性分詞(動詞ニカオ *nikao-vikáō* 私たちの「ナイキ Nike」の語源)で、文字通り、「勝利する者／勝利を得た」を意味します。この七つの例はすべて、信仰を保ってこの世の垣塙(るつぼ)から出てきたすべての信仰者を指しています:

なぜなら、すべて神から生れた者は、世に勝つ (*nikao-vikáō*)からである。そして、わたしたちの [キリストにおける]信仰こそ、世に勝たしめた勝利 (*nike-víkη*)の力である。(第一ヨハネ5章4節)

キリストへの信仰を維持し、キリストに忠実に仕え、キリストを信じながら忠実に生涯を終える者だけが、ここで言われている勝利者なのです¹⁵。世と肉と悪魔は、真の信仰を溺れさせ、キリストへの真の信仰を消し去り、イエスに従って回心したすべての人々の「信仰の芽」を焼き尽くし、窒息死させようと、力のかぎり本気になって常に挑んでいます(マタイ13章1-9節, 13章18-23節; マルコ4章1-9節, 4章13-20節; ルカ8章4-8節, 8章11-15節参照)、しかし、「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」(マタ

¹⁵ 特に、「ペテロの手紙#27: 信仰を脅かす三つの偽りの教理」にある、いわゆる「永遠の保障」に関する議論を参照のこと。

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

イ10章22節)、これは真にイエスに属するすべての人の本質的な勝利です。また、七つの教会すべてに対してこの資格が繰り返されていることは、各時代の下で論じられている救いの様々な報いが、七つの時代の最後まで信仰のうちに耐え忍ぶすべての信者に等しく与えられ、等しく適用されることを明らかにしています。¹⁶

ここで述べられている、信仰を保って人生を耐え忍んだエペソの人々に対する特別な報いについては、まず、エペソへのメッセージの冒頭で、私たちの主が、「これは、右の手に七つの星(すなわち教会)を支配しておられる方が言われることであり、七つの金のランプ台の真中を歩む方が言われることである」と述べて、ご自分の権威を強調することにされたことを思い出すべきです。キリストの完全かつ全く正当な権威を認めて応じるということは、(これまで見てきたように)エペソへのメッセージの内容においても最も重要なことであり、その時代の信者たちは、キリストによって霊的歩みを再活性化するよう求められていたのです。最後に、信仰を耐え忍ぶ者への報酬の約束の中で、キリストは「神の楽園にある命の木から食べる権利」を保証しています。こうして、究極のエデン、新エルサレムの第七の、そして最後の楽園において、信じる人類は再び、その崇高な体験が伴う

¹⁶ ジェームズ・ロスカップ (Dr. James Rosscup) 博士の「黙示録の克服者 (The Overcomer of the Apocalypse)」『グレース神学ジャーナル (Grace Theological Journal)』3:2 (1982 年秋号) 261-86 参照。

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

すべての祝福とともに、「いのちの木」にあずかる権利を所有することになるのです¹⁷。

この特別な約束は、現世でイエス・キリストに従うこと、すなわち信仰と誠実さのうちに(1 世紀の信徒たちが再召命されていた霊的成長を含む)忍耐することは、人生の喜びや楽しみを失うことを意味しないということを、エペソ時代の信徒たちに(私たちにも)思い出させる重要なものでした。というのも、永遠において、私たちが「神の楽園で」主とともに経験し、「いのちの木」そのものから食べる喜びは、この一時的な人生のすべての一過性の喜びを決定的にかすませてしまうものだからです。復活した主の型にならって約束された完全な永遠の体をもって永遠に生きることは、間違いなく幸福を奪われたものではありません。むしろ、祝福され、正当で、聖別された、今では想像もできないような驚異を楽しむものとなるのです。キリストが私たち一人一人に課された十字架を背負うために、現世では自分を否定しなければならぬかもしれませんが、来たるその驚くべき時には、新しいエルサレムの栄光に比べるなら、このはかない地上で経験できるどんなものも、取るに足らないものになってしまうこ

¹⁷ 新エルサレムに存在する「いのちの木」については、本シリーズの第 6 部で取り上げている。エデンの園における最初の「いのちの木」については、サタンの反乱シリーズ第 3 部「人間の目的、創造と墮落」の第 IV 節以降を参照。「七つのエデン」については、『悪魔の反逆』シリーズ第 1 部「サタンの反逆と墮落」の II.6 節を参照。

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

とを覚え、信じていくのです。その栄光の最も素晴らしいものは、私たちが愛するイエス・キリストと顔と顔を合わせるという体験です。

わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。(ローマ 8章18節)

エペソ時代の教会を考察した結果、最後に導き出された結論があります：(聖書に書かれていることに頼るのではなく)信仰と実践の権威を初代教会<の形態に>に求める者は、ヨハネの時代とその直後の、いわゆる「使徒時代の教父」と呼ばれる世代においてさえ、聖書とその教えに本来払うべきほど注意を払っていなかったことを私たちの主がここで直接語っていることを考慮すべきです。パウロ、ペテロ、ヨハネのような人たちが去った後、彼らの前進は止まり、御言葉(彼らの「はじめの愛」)において成長し続けることができませんでした。その結果として(わずか12年後には)彼らの「燭台」は、時期尚早に取り去られてしまいました。良い形態にはしがみつくが、最初にそしても教会を活気づかせたもの(すなわち、書かれた御言葉を通して生ける御言葉に注目すること)を第一の焦点とするのを棄ててしまった超-伝統主義を通して、このような使徒後の決まったやり方を模倣することは、ラオデキア時代である私たちに起こっていることの典型でもあります。聖書は、私たちの信仰と実践の唯一の源でなければならず、私たちの主ご自身がこの点で

エペソ:移行期(黙示録 2 章 1-7 節)

の欠陥を指摘されているように、使徒行伝後の世代(あるいは、他のどの世代のもの)の伝統でもあってはなりません。私たちが成長し続け、効果的に主に仕えることができるのは、主の御言葉にひたすら忠実であることによつてのみです。それによつていのちの木への道が豊かに供給されるからです。

悪しき者のはかりごとに歩まず、罪びとの道に立たず、あざける者の座にすわらぬ人はさいわいである。このような人は主のおきてをよろこび、昼も夜もそのおきてを思う。このような人は流れのほとりに植えられた木の時が来ると実を結び、その葉もしぼまないように、そのなすところは皆栄える。(詩篇 1 篇 1-3 節)

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

2. スミルナ：迫害の時代 (82 年～442 年＝360 年)：

黙示録 2 章 8-11 節

(8)スミルナにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『初めであり、終りである者、死んだことはあるが生き返った者が、次のように言われる。(9)わたしは、あなたの苦難や、貧しさを知っている(しかし実際は、あなたは富んでいるのだ)。また、ユダヤ人と自称しているが、その実ユダヤ人でなくてサタンの会堂に属する者たちにそしられていることも、わたしは知っている。(10)あなたの受けようとする苦しみを恐れてはならない。見よ、悪魔が、あなたがたのうちのある者をためすために、獄に入れようとしている。あなたがたは十日の間、苦難にあうであろう。死に至るまで忠実であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう。(11)耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。勝利を得る者は、第二の死によって滅ぼされることはない』。(黙示録2章8-11節)

スミルナとは、ギリシア語で「没薬」を意味します。つまり、香を焚いたり、防腐処理に使われる樹脂状の芳香物質(南アラビアのあ

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

る樹木のガムから得られる)のことで¹⁸。没薬は高価な物質であり(イエスの誕生の際にマギから贈られたもののひとつ:マタイ2章11節)、ここでは、教会の第二の時代に多くの信者を襲った迫害と殉教を語っています。私たちの主のために究極的な犠牲を払うよう求められ、主のために死んだ人々は、没薬の香り(香の例え)によって特徴づけられる死を遂げました。彼らの殉教が(迫害者たちがどう思おうと)神に受け入れられ、適切な埋葬(遺体の実際の地上での処分がどうであれ、象徴的に天の言葉で甘い香り)によって特徴づけられたことは、スミルナという名前が「没薬」であることにも示されています。あらゆる時代の信徒にとって、もし私たちが主のために迫害や命を失うことに耐えるよう主から求められることがあれば、そのような犠牲も主の目には等しく尊いものであり、キリストの苦しみを共有するよう召されたすべての人に与えられる報いのしるしとして、神の御座の前で最も高価な香水の甘い香りを漂わせるものであると確信できます(第一ペテロ4章12-19節; 詩篇116篇15節; マタイ16章24-25節; ローマ8章17節; 第二コリント1章5節; ピリピ3章10節; コロサイ1章24節参照)。

名前だけでなく、死に打ち勝つ永遠のいのちというテーマは、スミルナへのメッセージのあらゆる部分に表れています。キリストは御自身を「**死んで生き返った方**」と表現し、スミルナの信徒たちは**死に至るまで忠実**であるようにと言われ、耐え続けた報いは約束

¹⁸ A.C. Gaebelien, The Revelation, p.35f; et vid. lexica.

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

された**命の冠**です。最後に、勝利した者は**第二の死**によって傷つくことはありません。スミルナの時代はローマ国家による教会への激しい迫害の時代でした。殉教という究極の方法で自分たちの信仰を示すよう求められたスミルナの信者たちは見事に応え、教会のこの時代は多くの意味で最も素晴らしい時代の一つでした。「好天候」のとき、クリスチャンになるのは簡単です(というより、むしろ「より簡単」です)。しかし、教会第二の時代の信者たちは、中傷、排斥、個人的な苦難と貧困、投獄、そして殉教にさえ耐えました。しかし、彼らは信仰を持ち続け、持ち続けただけでなく、霊的な前進を続け、私たちの主のために大きな成果を生み出しました(後述する「いのちの冠」の意味)。間違いなく、この世で信仰を持ち続けることは簡単なことではありませんし、ましてや積極的な霊的な前進を続けることも、私たちがそれぞれ召されているミニストリーの完全な機能を発揮することもできません。しかし、スミルナ世代の信者たちが直面した悪条件、すなわち、資源の不足、激しい反対、敵意、投獄、さらには、自分たちが信じていることを実践したために死の危険さえあった状況下で、これらすべてのことを成し遂げることは、(正直に認めるなら)ほとんどの私たちがおそらく通過することができない試練です。

実際、スミルナの信徒たちは、この試練に立ち向かい、一連の試練に合格しました。主が言われた「十日間」とは、スミルナの360年の時代に起こった10の明確な迫害の期間のことです(下記参照)。そして、これらの迫害は時間的に見ると、スミルナに割り当てられていた期間であり、信徒たちが(いわゆるエペソ時代の失敗で

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

ある)自己満足に陥るような余裕はありませんでした。そうではなく、スミルナの信者たちには、警戒を怠らないか、次の迫害の波が襲ってきたときに信仰が難破する危険を冒すか、二つの選択肢しかなかったのです。ヒラデルヒヤと並んで、主からのメッセージの中で叱責や裁きの警告を受けなかった唯一の教会時代がスミルナであるという事実は、この高貴な信者たちが正しい選択をし、彼らに委ねられた期間を通してその選択をし続けたことの明らかな証拠です。

スミルナの経験から得られる一つの原則は、イエス・キリストの福音におけるすべての良い進展は、悪とその地上の手先からの反対を生み出すということです。私たちの多くにとって(私たち全員ではありませんが)、国家が主催する迫害の可能性は遠いことのように思えますが、これは今日でも同じことです。悪魔は、イエス・キリストに真に近づき、彼らに託された賜物を用いてイエス・キリストに正しく仕えようと努力しているすべての人に反対する他の方法をたくさん持っています。というのも、(スミルナの時代に、私たちの主を棄てることなく死に向かった、試練に満ちた真のクリスチャンたちのように)最も熱心な信者ほど、個人的に最も激しい苦難を経験することが多いからです(このメッセージの中で、キリストが「苦難」という言葉を二度使っていることに注目してください)。こうした見方は、旧約聖書と新約聖書の傑出した人物を概観するだけでも容易に裏付けられます。したがって、いわゆる「繁栄の福音」には嘘があります。アブラハムやダビデのような例外的な信仰者が神から特筆すべき物質的な富を受けた場合でさえ、彼らの人生

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

は、私たちの誰もが望まないような激しい試練によっても特徴づけられていたことに、私たちはすぐに気づくはずです。

最後に、この節そのものの考察に移る前に、スミルナ世代の初期人口は、大雑把に言って、エペソ世代、あるいは使徒世代の子供や孫であることを指摘しておきます。(皮肉なことに、自分の子供たちへの配慮からと言うことになってはいますが) 荒野の試練に失敗した出エジプト世代の信者と、ヨシュアの指導の下、約束の地に入る信仰を持った彼らに続く世代との比較が描かれています(民数記14章27-35節参照)。エペソは御言葉に従わなかったのですが、スミルナは聖句と霊的成長を何よりも優先させるということに取り組み、その並外れた忠実さが引き起こした厳しい迫害にもかかわらず、持ちこたえたのです。

スミルナに対するキリストの自己描写:

1. 「初めであり、終りである者、死んだことはあるが生き返った者」(黙示録2章8節):

前述のように、主の死に対する勝利、十字架上の勝利に続く彼の人としての復活は、主に従うすべての人の模範的な運命を示しています(詩篇16篇10節)。主は私たちのために迫害され、処刑されましたが、父なる神は、主が永遠に治められるように、聖霊を通して、その人間の体を死者の中から朽ちることのない形によみがえらせました。この自己紹介的記述は、殉教を通して主に栄光を

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

帰すために選ばれたスミルナの時代の信者たち(それ以来、そのような特別な運命を与えられたすべての人たちと共に)に、たとえ世が私たちが死に至らしめたとしても、世は私たちがその状態に捉えておくことはできないということを思い起こさせます。「この方が死につながれていることなど、ありえなかった」(使徒行伝2章24節 新改訳IV)ように、私たちもまた、来たるべき復活と、死に対する永遠の勝利を確信しているからです。実際、第二教会時代の多くの信者がそうであったように、真の殉教者として死ぬことは、人が神から与えられた道を全うし、本当に天国の報酬へと向かっているというこの世で可能な限りの最も力強い確証なのです(ステパノが殉教する直前にキリストを見た例: 使徒行伝7章55-60節)。殉教に至るまで拒絶されることは、悪魔の世界がイエス・キリストの信者に与える最高の賛辞です。そして、わたしたちの真のいのちである永遠のいのちを損なうどころか、殉教はそれを確かなものにするだけなのです。御霊によってイエス・キリストの中に入るバプテスマを受けた者(ローマ6章3-4節)は皆、イエス・キリストの運命を共にし、この人生においては世に死に、次の人生では死ぬべき体の蘇りにより永遠の命を得るのです。このことは、スミルナの時代の多くの人々のように、殉教に至るまで主に従うよう求められている人々(参照:ヨハネ21章18-19節にあるペテロ)にとって、どんなに真実なことでしょうか。

また、からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたを恐れなさい。(マタイ10章28節)

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

キリストの特別なメッセージ:

1. 「わたしは、あなたの苦難や、貧しさを知っている(しかし実際は、あなたは富んでいるのだ)。」(黙示録2章9節): スミルナの信徒たちは、ほとんどすべてのこの世的な見地からは困難な時を過ごしていました。キリスト教は、もともとローマの官僚には理解されにくかったのですが、やがてユダヤ教(ユダヤ教は*religio licita* レリジオ・リクタ、つまり国家が認める礼拝形式という優遇された地位にあった)と区別されるようになり、むしろカルト教団、それも潜在的に危険な教団とみなされるようになったのです。これは皮肉に見えるかもしれませんが、神への唯一で真の道が、異教徒の国家によって危険で、間違いで、余計なものと思なされることは、悪魔の世界が実際にどのように機能しているかを示すものとなります。世間にとって、困難と窮乏をもたらす信仰に身を捧げることは全くの狂気です。しかし、永遠の視点から見れば、現世の悩みは一瞬に過ぎず、現世の貧しさは、イエス・キリストを信じるすべての人にとって、計り知れない永遠の富に変わることが約束されているのです。反対に、神に従わないで、この世の短い時を豊かな物に囲まれ、安らかに過ごしても、この世が終わると共に滅び、大切にしていたものすべてを失う苦しみを味わうこととなります(ヘブル11章26-27節参照)。スミルナ時代の信徒たちは貧しく(社会から追放されていたのですから当然です。)そして、何度も本格的な迫害や虐殺を受けるほど、悩み、困難、苦難を知っていました。主はこ

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

これらのことを事実として述べておられます。それは、神の御言葉、イエス・キリストとの交わりと結びつきのうちに私たちが持っている富であり、私たちのクリスチャンとしての労苦に対する報いであり、それは世がまだ想像しうるどんなものにもまさるものであり、永遠にそうであり、この世の消えていくはかない報いなど比較に値しないほどはるかに凌(しの)ぐものである、ということです:

わたしは思う。今のこの時の苦しみは、やがてわたしたちに現されようとする栄光に比べると、言うに足りない。(ローマ8章18節)

2.「ユダヤ人と自称してはいるが、その実ユダヤ人でなくてサタンの会堂に属する者たちにそしられている <「(新改訳:)ののしられている」>「(新共同訳:)非難されている」>」(黙示録 2章9節):

ここで「そしる」と訳されている言葉は、実はギリシャ語のブラスフェミア *blasphemia* で、英語の「ブラスファミー *blasphemy* (「神に対する冒瀆/冒瀆的な言動」の意)」の語源です。この「冒瀆的な言動」が神ご自身に対してではなく、スミルナの信者に向けられたものである以上、「中傷されている」と訳するのが望ましいでしょう(英語の「ブラスファミー (*blasphemy*)」は一般的に、神ご自身に向けられた突飛な暴言にのみ使われます)。とはいえ、「ブラスフェミア *blasphemia*」は普通、誹謗中傷に使われる言葉ではないので、主がここでこの言葉を使われているのは、スミルナ時代の信者を敵対視する者たちの単なる誹謗中傷以上の意味があることに私た

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

ちは気づかなければなりません。神にとって聖なる者を中傷することは、間接的に神をも冒瀆することであり、イエス・キリストに従う私たちに對する攻撃は、神御自身が受けておられることだからです(参照:イザヤ54章15-17節; ゼカリヤ2章8節)。

主の聖徒の死はそのみ前において尊い。(詩篇116篇15節)

スミルナ時代の信徒に対するこのような敵意に満ちた言葉の攻撃の出どころが、「サタンの会衆(または「会堂」、ギリシャ語のシナゴゲ: συναγωγήから)」であるとあります。エペソの「偽の使徒」や「ニコライ派」、ペルガモの「バラムとバラク」や「ニコライ派」の教えを信奉する者たち、テアテラの「イゼベル」、ヒラデルヒヤに出てくる同じ名称の「サタンの会堂」とともに、この名称は(先のエペソに出てくる他の名称も含めて)、真の教会との関係において、その当時の時代の偽りの、あるいは反-教会の要素を示しています。ですから、「ユダヤ人と自称してはいるが、その実ユダヤ人でなくてサタンの会堂に属する者たち」とは、「神のもの」だと主張する組織化された不信仰者ですが、本当は悪魔の意志を実行する悪魔の会衆なのです。ここで非常に重要なことは、ヨハネにとって、黙示録にとって、イエス・キリストにとって、御父にとって、聖書を理解するすべての真のクリスチャンにとって、真実にユダヤ人であることは、事実、決定的に良いことであり、祝福されたことであるということです。ここで言われている<自称ユダヤ人という>人々は、靈的に特権的な地位を主張しているだけで、そう偽っているの

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

す。

この「ユダヤ人と自称してはいるが、その実ユダヤ人でなくてサタンの会堂に属する者たち」をヨハネの黙示録が書かれた時代から解釈するなら、使徒パウロに律法主義的な教え(特にガラテヤ書を参照)をもって激しく反対したユダヤ主義者たちということになるでしょう。しかし、教会の第二の歴史的時代という観点から見ると、明らかにこれは、真の信仰者たちと、イエス・キリストの教会に現実に対峙する者たちのとの間にある対立です。聖霊の靈感を受けたヨハネは、イスラエル(真のイスラエル)を用いて、神の家族である人々と、神の名によって行動していると主張しても、実際には神の家族ではなく、神の敵対者である人々とを区別して表現しています。イスラエルが教会の土台であり、人類史上のすべての信者の集まりである教会全体が最終的に統合される究極的な組織であることを考えれば、ヨハネのこの表現は決して不自然なものではありません(新エルサレムの十二の門:黙示録21章12節参照)¹⁹。

ですから、教会がローマ帝国から迫害を受けていた時代、すなわちスミルナの時代に存在していた「偽ユダヤ人」と「サタンの会堂」の正体は、一般に宗教として認められている、組織化された宗

¹⁹ これらの原則は、サタンの反乱シリーズ第5部「裁き、回復、置き替え」のII.8.b.i項の「イスラエルの独自性」で論じられています。

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

教制度です。この時代、異教の支配下にあった人々(帝国の人口の大多数)の心境は、まさにヨハネが述べたとおりでした。彼らは「真の宗教」(すなわち、ユダヤ人<神の民>であると主張しているに等しい)であると思っていましたが、実際には、悪魔が人間を自分の意のままに陥れ、真の神から遠ざけるためにつくり上げた偽りの宗教体系に仕えていたのです。例えば、トラヤヌス帝と若きプリニウスとの間で交わされた書簡の中で、キリスト教徒は「精神異常者」であるとされ、「悔い改め」を強要し、「真の宗教」に立ち戻らせる方法を探る手段が模索されているのを読むと、ゾッとさせるものですが、興味深い内容です。この点で、ローマ帝国の異教は、サタンとその手先である反キリストが暗黒の艱難期に甦らせる宗教制度によく似ています。この宗教もまた、自分たちだけが真の宗教であるという熱心な主張を特徴とし、他のすべての宗教に不寛容で、「改宗」に応じなかったクリスチャンを迫害するでしょう。そして、古代の異教がやがて中世(つまりサルデスの時代、これについては後述)までに真の教会の組織に浸透し、乗っ取ったように、その墮落した組織のかたまりが、艱難期において世界的な悪魔の宗教の基礎を形成するのです。

さまざまな名前がつけられ、識別されていますが、これらの七つのメッセージで言及されている偽のグループには、ある共通の特徴があります。優越的権威の主張(彼らは「使徒」であるとか、「真のユダヤ人」であるとか、「奥義」を持っているとか)に加えて、真の信者を霊的な不信仰に陥れることによって、真の教会を攻撃し、弱体化させるという目的も共通しています。神の御言葉に反するこ

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

の世の信仰や習慣に妥協させようとする圧力は、悪魔が支配するこの世では常に厳しいものであり、主の再臨までそうあり続けることでしょう。歴史的に言えば、混ぜ物をし、真理のまがいものを広めるこのような者たちは、エペソの人々によって見破られました、彼らに同調することを拒んだスミルナを攻撃し、迫害し、ペルガモにおいて足場を築き上げ、テアテラにおいては容認され、浸透し、サルデスでは完全に優位に立つことになりましたが、ヒラデルヒヤでは彼らから離反した真の信者を支配できませんでしたが、再び戻って来てラオデキアの体に悪性の病気のように入り込んだのです。悲しいことに、私たちはその墮落的な影響が日に日に強まっていくのを目にさせられているのが現状です。七つのメッセージの原文の中で、教会に反対する悪の勢力に与えられている様々な名前と関係は、キリストの体に対する彼らの攻撃的性質と状態について私たちに重要な情報を与えてくれるので、ここでは、すべての時代を通して真の教会に抵抗し、反対し、破壊し、腐敗させようとする悪魔の「反-教会」の致命的な敵対関係について、主が私たちに語っておられることを図表の形で要約することが役に立つでしょう:

エペソ:「移行期」(紀元70年9月～82年=12年間)における反-教会の実態

＜エペソ教会に敵対する勢力の＞実体: 真の教会に侵入しようとする未信者による初期の試み[失敗]。

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

＜エペソ教会の敵対勢力の＞立場: 真の教会から除外。

＜エペソ教会に敵対する勢力の＞権威の主張: 「自分たちは使徒だと言う」; 「ニコライ宗」[彼らは、聖書ではなく、多数派が権威だと言う]。

標的＜としてのエペソ教会＞の弱点: 御言葉の研究に対する無頓着なエペソ人の態度。

＜エペソ教会に対する＞具体的な攻撃: 自由主義の正当化、[エペソの人達が弱かった]聖書の真理に対する攻撃。

スミルナ: 「迫害の時代」(紀元82年から442年=360年)における反-教会の実態

＜スミルナ教会に敵対する勢力の＞実体: 真の教会を抑圧し破壊しようとする[が、失敗に終わる]異教。

＜スミルナ教会の敵対勢力の＞立場: 真の教会とは別に、帝国の宗教として確立。

＜スミルナ教会に敵対する勢力の＞権威の主張: 彼らは真の正当な宗教であると主張[「偽って」自分たちはユダヤ人であると言う]。

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

標的 <としてのスミルナ教会>の弱点: なし-殉教に至るまで耐えることによって、スミルナの信者は疑問の余地のない信仰を証明。

<スミルナ教会に対する>具体的な攻撃: (金銭も、影響力も、権力もないという)この世的なものの欠如-しかし、これらの「弱点」は、ただこの世の目から見てのことで、もし神が私たちの味方であるなら、誰が私たちを負かすことができるでしょうか？

ペルガモ: 収容の時代 (442 年～802 年=360 年) における反-教会の実態

<ペルガモ教会に敵対する勢力の>実体: バラムとバラクの陰謀のように、誘惑と容認を通して教会に影響を与え始めた世俗主義と異教の悪の形態。

<ペルガモ教会の敵対勢力の>立場: 真の教会への潜入。

<ペルガモ教会に敵対する勢力の>権威の主張: 「ニコライ宗の教え」を固く守る人々が教会内に存在すること。

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

標的 <としてのペルガモ教会>の弱点: 世俗世界において力を増し、地上の教会は「<多様性の>包括」という迷妄(めいもう)と中央集権の必要性の両方に対して脆弱になり、その結果、悪による浸透への道を開いた

<ペルガモ教会に対する>具体的な攻撃: 世俗的な権力を獲得するために悪と融和することが平気で許されるという誤った思い込みにつながる、世俗的な安全への願望に対して。

テアテラ: 「妥協の時代」(紀元 802 年～1162 年=360 年)における反=教会の実態

<テアテラ教会に敵対する勢力の>実体: <教会の全>体に定着してしまった悪は、形骸化した教会の[ますます世俗的で不信仰に走る淫婦「イゼベル」である]指導部を支配するようになる。

<テアテラ教会の敵対勢力の>立場: 世俗的で異教的な要素が、形骸化した教会の指導部の中で支配的な地位を占め始める[「イゼベル」は、彼女の「姦淫者」とその「子どもたち」に支えられている]。

<テアテラ教会に敵対する勢力の>権威の主張: これら

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

の<上記の>要素は、実際には欺瞞的な嘘(すなわち「サタンのもの」)である「深いこと」を「教える」より優れた知識に基づくより優れた権威であると偽って主張する。

標的<としてのテアテラ教会>の弱点:「イゼベル」とその信奉者たちは、目に見える教会の中で、秘密の教義、精巧な儀式、偽りの権威の偽りのアピールに脆い人々を餌食にする。

<テアテラ教会に対する>具体的な攻撃:これらのカルト的な活動を通して、まだ真の信仰と実践を守っている人々に[「偶像のいけにえの食物を食べ、性的不道徳にふける」(=霊的不誠実)ようにと]影響を及ぼす。

サルデス:「墮落の時代」(1162年～1522年=360年)における反-教会の実態

<サルデス教会に敵対する勢力の>実体:言及されたグループはない=<教会は>全体として瀕死状態で、個々のメンバーの中にある生命の輝きが残されているだけとなる。

<サルデス教会の敵対勢力の>立場:悪の癌は、元は健康であった身体に徹底的に浸透し、支配する。

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

＜サルデス教会に敵対する勢力の＞権威の主張:悪と偽りが、「教会」という目に見える組織の役職と権威を乗っ取る。

標的＜としてのサルデス教会＞の弱点: 真の信者が死骸の中で生き続けることは、真の信仰の最終的な消滅を意味する。

＜サルデス教会に対する＞具体的な攻撃: 真の信仰と実践の最後の燃え残りに向けられたもの。

ヒラデルヒヤ:「リバイバルの時代」(1522 年から 1882 年まで＝360 年間)における反-教会の実態

＜ヒラデルヒヤ教会に敵対する勢力の＞実体: かつて教会を象徴していたこの死んだ体から自らを切り離れた真の信者と対立する、完全に墮落した、完全に不敬虔な「サタンの会堂」。

＜ヒラデルヒヤ教会の敵対勢力の＞立場: 地上の教会の本来の組織体を乗っ取った偽りの「会堂」は、改革された真の教会に敵対するも、自分たちがその外側にいることに気づく。

＜ヒラデルヒヤ教会に敵対する勢力の＞権威の主張:権

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

威の主張: 反対派は、「[自分たちはユダヤ人である]と言って]真の正当な宗教、「唯一の真の教会」であると主張するが、実際は「サタンの会堂」[邪悪な組織]。

標的としてのヒラデルヒヤ教会 > の弱点: なし-真の信者たちは神の御言葉の真理を第一とし、神はこれらの[伝道、知識、霊的成長の]「働き」を尊ばれ、豊かな収穫、「開かれた扉」を与えられた。

<ヒラデルヒヤ教会に対する> 具体的な攻撃: 攻撃的な迫害にもかかわらず、偽り者たちは平静を失い、ヒラデルヒヤの人々と共に神がおられることを認め、悔い改め、彼らの足元で「礼拝」する者たちも出てくる。

ラオデキヤ: 「退廃の時代」 (1882 年～2026 年 = 144 年間)

における反教会の実態

<ラオデキヤ教会に敵対する勢力の> 実体: 言及されているグループはなし = 偽のものは現在、改革派教会組織に浸透し、それと区別がつかないほど混ざり合っている。

<ラオデキヤ教会の敵対勢力の> 立場: 悪の「眠れる病」は、真の「教会」を致命的に損なうまでに徹底的に浸透し

2. スミルナ: 迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

ている。

<ラオデキヤ教会に敵対する勢力の> 権威の主張: 「教会」の中で確立され、不信心者は、「すべてが「善」なのだから、間違っていることは何もない(正しいことも何もない)」という相対主義の無気力を広めている。

標的<としてのラオデキヤ教会> の弱点: ペルガモ/テアテラ/サルデスのような(特定可能な)癌ではなく、鋭い反応を避けるために狡猾に、そして徐々に全体を内部から攻撃し、「宿主」に霊的麻痺をもたらした変性疾患。

<ラオデキヤ教会に対する> 具体的な攻撃: 私たちの時代の反-教会は、明確な挑戦状を突きつける代わりに、相対主義、誤った、あるいはゆるい基準、神の言葉に対する無関心などを徐々に導入し、私たちの時代の教会をほとんど無気力(生ぬるい)、非効果的なものになっている。

3. 「あなたの受けようとする苦しみを恐れてはならない」(黙示録2章10節): スミルナへのメッセージの考察に戻りますが、私たちの時代の悲惨な状況とは全く対照的に、教会の第二の時代の信者たちは、主が彼らの前に置かれた試練に対して良く備えができていました。同じような任務を与えられたとしても、私たちの時代の教会が(忠実な個人が何人かいるとしても)全体としてその試練

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

に耐えられるかどうかは疑わしいものです。実際、終末論的に言えば、私たちは教会の最大の破局の門口に立っているのです。艱難期の前半に、前例のない信仰離れが起きます(「大背教」)。ですから、今日私たちが享受しているような大きく有利な点のほとんどを持っていなかった信者たちに与えられた、主の言葉を私たちは畏敬と謙遜の念をもって、読むべきなのです。彼らは全体として非常に貧しく、異教社会から見下され、偶像崇拜的な異教の習慣を取り入れないために、多くの生命に関わる重要なことさえも阻害されていました。彼らはほとんど学問もない人達で、聖書を学び教えるための資料も不足していました。しかし、彼らは持っているものを最大限に活用しました。大きな犠牲を払うことになっても、イエス・キリストを第一に考えたのです。できることを学び、学んだことを信じ、それを忠実に力強く実践したのです。彼らには御霊と主による恵み深い監督があつたからです。それが力強い信仰と相まって、これは今日私たちが持っている(しかし、ほとんど活用できていない)利点をはるかに超越する、靈的に最高のうまくやれるレシピとなったのです。ですから、主がスミルナの信徒たちに、彼らに襲いかかる恐ろしい苦しみ、試練、迫害を恐れるなど言われるのは、彼らが信仰と忍耐をもってこれらのことに耐えることができることを主が認めておられたからです(1コリント 10章13節参照)。それはまた、神との緊密で生き生きとした関係なしには、物質的な財産はどんなに素晴らしいものであっても、試練の時が来たときはあまり意味をなさないということを私たちに思い起こさせるものでもあるのです:

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

それでは、これらの事について、なんと言おうか。もし、神がわたしたちの味方であるなら、だれがわたしたちに敵し得ようか。ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために死に渡されたかたが、どうして、御子のみならず万物をも賜わらないことがあるのか。だれが、神の選ばれた者たちを訴えるのか。神は彼らを義とされるのである。だれが、わたしたちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、わたしたちのためにとりなして下さるのである。だれが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか。患難か、苦悩か、迫害か、飢えか、裸か、危難か、剣か。「わたしたちはあなたのために終日、死に定められており、ほふられる羊のように見られている」と書いてあるとおりである。しかし、わたしたちを愛して下さったかたによって、わたしたちは、これらすべての事において勝ち得て余りがある。わたしは確信する。死も生も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、(選民の)高いものも(墮落した)深いものも、その他(この地上の)どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスにおける神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのである。(ローマ8章31-39節)

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

4. 「悪魔が、あなたがたのうちのある者をためすために、獄に入れようとしている」: スミルナの信者を待ち受けている迫害は、

あらゆる問題を含んでいました。彼らは、その時代のほとんどを通して、孤立、仲間はずれ、危険を知ることになります。そして、時には(実のところ、10回の「時」)、このすでに高いレベルの敵対は、さらに激しい迫害へとつながり、多くの人が投獄され、少なからぬ数の人が殉教する運命にありました。(私たちの多くが、いわば「台風の目<の欺きの平穩>」の中にいるにもかかわらず、)私たちの世代が、世界史上最も激しい迫害の門口に立っていることを考えると肉体的な投獄(さらには死)に至るほど激しい迫害について、幾つかの点を指摘しておく必要があります。特に、私たちは次のことを心に留めておくべきです。

1) 自業自得の罰と自業自得でない罰の違い。主は十字架につけられる前、当時の法制度によってひどい虐待を受けましたが、完全な人生を歩まれました。主の使徒たち(ペテロ、パウロ、ヨハネなど:使徒行伝12章1-19節; 使徒行伝21-26節; 黙示録1章9節)や、主を信じ従ったという単純な事実のために投獄されたことのある、あるいは投獄されるであろうすべての主の弟子たちも同様です。ですから、不当な行いのために投獄されることは確かに恥ずべきことですが、キリストのためにこの特別な試練に耐えることが私たちに課せられた使命であるならば、キリストのための真の苦しみと罪のための罰とを心の中で区別

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

し、キリストのために耐え忍ぶことを恥じないように注意しなければなりません(第一ペテロ2章20節):

キリストの名のために**そしられる**なら、あなたがたはさいわいである。その時には、栄光の霊、神の霊が、あなたがたに宿るからである。あなたがたのうち、だれも、人殺し、盗人、悪を行う者、あるいは、他人に干渉する者として苦しみに会うことのないようにしなさい。しかし、クリスチャンとして苦しみを受けるのであれば、**恥じることはない**。かえって、この名によって神をあがめなさい。(第一ペテロ4章14-16節)

信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、キリストのゆえに**受けるそしりを**、エジプトの宝にまさる**富と考えた**。それは、彼が報いを望み見ていたからである。(ヘブル 11 章 24-26)

こういうわけで、わたしたちは(11 章の信者のように)、このような多くの証人に(人と天使たちに)雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく**罪**(特に、私たちに習慣的に影響を与えている罪は何でも)とをかなぐり捨てて、わたした

2. スミルナ: 迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

ちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、**恥をもいとわな****いで十字架を忍び**、神の御座の右に座するに至ったのである。あなたがたは、弱り果てて意気そそうしないために、罪人らのこのような反抗を耐え忍んだかたのことを、思いみるべきである。(ヘブル 12 章 1-3 節)

2) 神のご意志と予見なしに、私たちの人生に苦しみや試練が訪れることはありません：私たちの神が私たちに起こることを許されるのは、すべて理由があつてのことであり、その理由は常に神の栄光と私たちの最善のためです(ローマ 8 章 28 節)。もし、私たちが自分の失敗のためではなく、私たちの忠実さのゆえに、世から迫害される苦しみを経験するとしても、私たちの愛する天の父がそのすべてを知っておられ(そして、遠い昔からそのすべてを知っておられた：使徒行伝 9 章 16 節参照)、神の完全な計画の下にないものが私たちに降りかかることはないという事実を見逃してはいけません：

そこでピラトは言った、「何も答えないのか。わたしには、あなたを許す権威があり、また十字架につける権威があることを、知らないのか」。イエスは答え

2. スミルナ: 迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

られた、「あなたは、上から賜わるのでなければ、わたしに対してなんの権威もない。(ヨハネ 19 章 10-11 節前半)

ですから、もしそのようなことが起こったら、私たちは、ダニエルの友人のように、主が最も熱い火の炉からできえ私たちが救い出すことができることを知って、信仰と信頼をもって主とともに歩むよう、これまで以上に注意しなければなりません。

もしそんなことになれば、わたしたちの仕えている神は、その火の燃える炉から、わたしたちを救い出すことができます。また王よ、あなたの手から、わたしたちを救い出されます。たといそうでなくても、王よ、ご承知ください。わたしたちはあなたの神々に仕えず、またあなたの立てた金の像を拝みません」。(ダニエル 3 章 17-18 節)

そこで王は大いに喜び、ダニエルを[ライオンの]穴の中から出せと命じたので、ダニエルは穴の中から出されたが、その身になんの害をも受けていなかった。これは彼が自分の神を頼みとしていたからである。(ダニエル 6 章 23 節)

3) 「キリストの苦しみを共にする」ことは、通常のクリスチャ

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

ン体験の一部です(使徒行伝5章41節; 第二コリント1章5節; ヒリピ3章10節; コロサイ1章24節; 第一ペテロ4章12-13節): イエス・キリストに信仰を置く者は、悪魔の世界からの反感を避けることはできません。この世(cosmos)の支配者は、すべての信仰の行為、すべての良い決断に対して戦いを挑んでくるからです(ヨハネ15章18-21節)。

愛する者たちよ。あなたがたを試みるために降りかかって来る火のような試練を、何か思いがけないことが起ったかのように驚きあやしむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど、喜ぶがよい。それは、キリストの栄光が現れる際に、よろこびにあふれるためである。(第一ペテロ 4 章 12-13 節)

さらに、このような試練は、信仰を築く上で必要な要素であり、鋼鉄を鍛えて強くし、本物を証明するようなものです(第一ペテロ1章7節)。実際、私たちが主とともに栄光を受けるには、信仰を保ったままこの人生を「**苦しみ抜く**」ことが条件となります:

もし子であれば、相続人でもある。神の相続人であって、キリストと栄光を共にするために**苦難をも共にしている**以上、キリストと共同の相続人なのである。(ローマ 8 章 17 節)

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

すべての人が迫害や投獄や殉教に耐えるように求められているわけではないことは事実です。実際、すべてのクリスチャンがそのような極度のストレスや緊張に耐え、その過程で良い証しをし、信仰を堅持できるわけではありません。私たちの神はこのことをすべて知っておられ、多くのクリスチャンがこのような試練を免れてきたのは間違いありません。一見すると、スミルナの信徒たちが耐えなければならなかったような試練に備えるために必要な信仰を育むことは、何か間違っていることのように見えるかもしれませんが、しかし、主が信者に与える褒め言葉としては、世と現在の悪魔の支配者に対し、主の者である一人が本当に他のすべてのものより主を優先していることを示すこと以上に高いものはないのです(参照:ヨブ記1-2章、ダニエル9章23節)。

4) そして、究極的には、私たちが主のために受けるすべての苦しみは、祝福と報いをもたらすだけなのです: 特別な苦しみがなければ、特別な報いもありません(後述の「いのちの冠」を参照)。それに加えて、私たちクリスチャンにとって大切なことは、私たちは主のものであり、主の御用のために、主が自由に使われるためにここにいるのだということを心に留めておくことです。

私たちは皆、自分自身と愛する人たちのために、健康と生活の安定を保とうとします。しかし、私たちが主のため

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

に犠牲を払うよう求められる時が来るかもしれません。その日が来るか来ないかにかかわらず、私たちはその日に備えておく必要があります。有能なプロの兵士は、戦いの日に災害の可能性を最小限に抑えるために、できる限りのことをしますが、状況がそれを要求するとき、命の危険や実際の損失があっても、危険から逃れることはしません。イエス・キリストの兵士として、私たちもまた、神の意志がそれを必要とするのであれば、自分の財産、自由、そして命さえも捧げるよう求められる日が来るかもしれないことを認識しなければなりません。そして、私たちにはこの大きな慰め、つまり、この世だけで報いを受ける人々にはない励ましがあります。それは、自分の命とこの世で持っているすべてのものを失うことによって、キリストと、過ぎ去ることのない来るべき世において、今想像する以上の祝福を得ることができるということです。

また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない。自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう。(マタイ 10 章 38-39 節)

5. 「あなたがたは十日の間、苦難にあうであろう。」: 聖書では、特定の時間の単位(特に「日」)が長い期間を象徴するのに使われることはよくあることで、私たちも他の箇所ですくなく取り上げて

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

います²⁰。ですから、ここで言及されている「十日間」は、主がスミルナの時代に予言された十回の迫害(または「苦難」)の期間です。キリスト教時代の最初の4世紀の教会に関する出来事の歴史的記録は完全とは言い難いので、これらの艱難時代は様々に特定されてきました。しかし、大まかに言って、次のローマ皇帝の治世の間に起こった10の重要な迫害の時期を特定するのに十分な証拠が存在します²¹。

ドミティアヌス 紀元81-96年c

トラヤヌス 98-117

マルクス・アウレリウス 161-180

セプティムス・セウェルス 193-211

マクシミアヌス 235-238

デキウス 249-251

ヴァレリアヌス 253-260

ディオクレティアヌス 284-305

リキニウス 311-323

ユリアヌス 360-363

²⁰ 特に、悪魔の反乱シリーズ第5部「裁き、回復、置き替え」のII.8節『「七日間」解釈の証拠』をご覧ください。

²¹セプティミウス・セウェルスの迫害は後継者カラカラの治世下でも北アフリカで続き、マルクス・アウレリウスの迫害はコモドゥスの治世まで続きました(最終的には沈静化しました)。

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

この図から明らかなように、最後の世代(すなわち、「背教者」ユリアヌスの死から442年の時代の終わりまで)を除いて、これら10の試練の時代は、スミルナの時代内にうまく分散しており、これらの困難な時代の信者は、常に警戒し、鋭敏な信仰を保つ必要がありました。これらの迫害の正確な範囲については、私たちはあまり知りません。例えば、トラヤヌス帝の時代に東方の信者がどのような悩みを抱えていたかは、現存するプリニウスの書簡がなければほとんどわかりません。一方、マルクス・アウレリウス時代のガリアにおける信者の迫害は、かなりよく証明されています(エウセビオスの『教会史』第5巻を参照)。しかし、十の期間の迫害の一般的な特徴を列挙すると、その<特徴の>うちのいくつか、あるいはすべてがそれぞれの期間に当てはまると考えられます::

- ・ キリスト教信仰、学習、礼拝、布教の一般的禁止。
- ・ キリストを棄教しなかったり、異教の神々に犠牲を捧げなかったりしたクリスチャンへの罰則。
- ・ 疫病や自然災害などをクリスチャンのせいにする事。
- ・ クリスチャンであることを罪として、法制度でクリスチャンを告発すること。
- ・ キリストへの信仰から「悔い改める」ことを拒否する人々の投獄。
- ・ 信仰に最も忠実な者の処刑(殉教)。

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

キリストが約束した報い:

1. 「死に至るまで忠実であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう」: この「いのちの冠」の約束も、「第二の死」からの保護の約束(すぐ下を参照)も、スミルナの時代の信者が直面した困難と苦難を主が直接的に反映したものです。「いのちの冠」は、現世で忍耐している(つまり、靈的成熟の重要な特徴である、現世よりも来世が重要であることを示す)クリスチャンに与えられる三大階級の報酬の一つです²²。「義」の冠(信仰の徳に相当)は、この世で靈的に成熟したすべての信者に与えられます(第二テモテ4章8節)。「栄光」の冠は、神が割り当てられた務めを果たすすべての人に与えられる最高の賞です(愛の徳に相当:第一ペテロ5章4節)。希望の徳に相当する「いのち」の冠は、悪の試練にさらされ、敵対され、時には(スミルナの時代の信者のように)激しい迫害の火の中にあっても、靈的な成長を遂げ、維持する信者に与えられます(ヤコブ1章12節)。それゆえ、「希望」の徳と結びついた「いのちの冠」を主が約束されたことは、何ら驚くべきことではありません。なぜなら、来る栄光への希望を抱いてこそ、信仰者はこの世の事柄よりも神との歩みを優先することができるからです。なぜなら、キリストのために勇気をもって死に立ち向かうことは、成熟し成長した信仰なしには不可能で、それは一貫した靈的成長の結果だからです。殉

²² 王冠の教理は、ペテロの手紙シリーズ#18と、「来たる艱難期」第6部、I.7 節「教会の審判と報い」で詳しく取り上げられています。

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

教はこの賞を得るための条件ではありませんが、それを保証します。死をキリストのために勇敢に直面するのは成熟した信仰を持っていなければならないことで、その信仰は着実な霊的成長の結果だからです。

2. 「勝利を得る者は、第二の死によって滅ぼされることはない」: この約束は、いろいろな意味で、上のコインの「裏」の面と「表」の面を表しています。真の殉教における勇氣ある肉体の死が命の栄冠を保証するように、永遠の命に目を向け、信仰を保って最後まで耐え忍ぶ者は皆、二度と死を体験することがないことが保証されるからです。この世でイエス・キリストに忠実であり続ける私たちにとって、肉体の死は本当に永遠のいのちの始まりに過ぎず、この世を去れば二度と何ものも触れることのできない、想像を絶するほど祝福された終わりのない現実なのです。一方、決断のために与えられた恵みの期間中(つまり、この地上での短い人生)、不信仰に固執する人々にとっては、彼らの最終的な運命は生ではなく死であり、またもう一つの死である「第二の死」となります。神と新しいエルサレムのすべての祝福から永遠に引き離され、代わりに火の池の苦しみに永遠に委ねられるという恐ろしい見通しは、「死」という言葉以上にうまく伝えることのできる言葉はありません。(イザヤ66章22-24節; マタイ3章11-12節, 25章31-46節; マルコ9章42-49節; 黙示録20章11-15節)。この地上で「命を失う」ことによって、つまり、イエスを第一に考え、それに伴うすべての困難な選択、世には無意味に見えるイエスのための信仰と犠牲

2.スミルナ:迫害の時代(黙示録 2 章 8-11 節)

の選択をすることによって、私たちは命、すなわち、永遠にイエスとともにある豊かな永遠の命を得るのです(マタイ16章24-28節)。しかし、この世の生活とその対価を第一に考え、すべての人のために死に、唯一の真の生き方へと私たちを招いてくださった主から背を向けることで、不信仰者は、イエス・キリストとの永遠という理解しがたい富と引き換えに、束の間の塵やゴミを交換するという、想像しうる限り最もお粗末な駆け引きをし、代わりに火の池に永住することを選んでいのです。よく言われるように、不信仰者とは対比して、「二度生まれ、一度死ぬ」これは、霊的成長のレベルにかかわらず、すべての信者の実情です。そういうわけで、スミルナの時代の多くの人々のように、イエス・キリストのために究極的な犠牲を払った信者にとっては、なおさらそうでないはずがありません。

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

3. ペルガモ:迎合の時代(紀元 442 年～802 年=360 年)

<迎合(げいごう):自分の考え-信念-をまげることさえして、他人の意に従って気に入られるようにすること>

黙示録 2 章 12-17 節

(12) **ペルガモ**にある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『鋭いもろ刃のつるぎを持っているかたが、次のように言われる。(13) わたしはあなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの座がある。あなたは、わたしの名を堅く持ちつづけ、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住んでいるあなたがたの所で殺された時でさえ、わたしに対する信仰を捨てなかった。(14) しかし、あなたに対して責むべきことが、少しばかりある。あなたがたの中には、現にバラムの教を奉じている者がある。バラムは、バラクに教え込み、イスラエルの子らの前に、つまずきになるものを置かせて、偶像にささげたものを食べさせ、また不品行をさせたのである。(15) 同じように、あなたがたの中には、ニコライ宗の教を奉じている者もいる。(16) だから、悔い改めなさい。そうしないと、わたしはすぐあなたのところに行き、わたしの口のつるぎをもって彼らと戦おう。(17) 耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くが

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

よい。勝利を得る者には、隠されているマナを与えよう。また、白い石を与えよう。この石の上には、これを受ける者のほかだれも知らない新しい名が書いてある』。

ペルガモという名は、古代では非常に有名なものでした。アジア領のミュシアとリディアの国境にある山腹に位置するこの町を指すだけでなく、ペルガモは伝説の都市トロイの城塞(またはアクロポリス)の名前でもありました。教会の第三の時代である「迎合の時代」を象徴する都市としてペルガモが選ばれたのは、偶然ではありません。ペルガモは、教会がその組織構造と指導力を霊的に損なわれ、キリスト教の本質的なものを奪い取られ、さらに、教会の第六の時代であるヒラデルヒヤの時代には、真の教会が生き残るために「見える教会」から完全に分離しなければならなくなる(すなわち、宗教改革)状態に三つの時代にわたって進んでいく時代の最初の時代を表しています。

ペルガモという名前から想起されるトロイのイメージに戻ると、その有名な都市は、(伝説の「トロイの木馬」によって)欺かれて侵入された後、「内側から」崩壊しました。主がここでペルガモについて言われたことを注意深く観察すると、この「門の中の敵」というイメージが、確かに浮かび上がってきます。エペソの時代には、悪魔の反-教会が真の教会から完全に排除され、スミルナの時代には、悪魔の反-教会が(国家が後押しする異教徒迫害という形で)真の教会を外側から強力に攻撃していたのですが、ペルガモの時代には、初めて、敵が真の教会の「門の中に」実際に存在するのを

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

見るのです:「あなたがたには、バラムの教えを实践する者が**いる**」、「ニコライ派の教えを实践する者**もいる**」。これらの非キリスト教的な要素が、ペルガモ時代の信者たちの中に紛れ込んでいるのが容認されていたという記述は、目に見える教会の中で、悪魔の反-教会の悪の力との迎合が行われてきたことを明らかにしています。

もちろん、この記述は、ペルガモの時代がどのように発展していくかの全体像を示しています。そして、(次の時代であるテアテラの状況が悪化していることから)、ここで描写されていることは、この 360 年の間にその勢いを増すことになるのが正しいでしょう。

しかし、なぜこのような危険な事態が起こったのでしょうか。その前の時代、すなわちスミルナの時代には、迫害の炎に耐えた勇敢な信者たちに対して、主は否定的な発言や非難を一つもされませんでした。2 世紀末、セプティモス・セウェルス帝 **Septimus Severus** の迫害の最中、テルトゥリアヌス **Tertullian** はその<迫害による>苦境の中で、異教の迫害者たちを次の言葉で叱責しました:「あなたがたがわれわれを刈り取れば、その都度、われわれの信者は倍加するのである。キリスト教徒の血は、種子なのだ。それ以来、殉教者の血は教会の種である」というのが、この

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

時代の教会の成長への貢献に対する一般的な歴史的判断となっています²³。

しかし、抑圧が節制、検証、真の成長をもたらした一方で、スミルナの時代の終わりに目に見える教会の究極的な「成功」は、悲しいことに、かつて真の教会の代名詞であった組織が(サルデイスの時代までに)最終的に完全に霊的に死んでしまう腐敗のプロセスを始めました。したがって、ペルガモ、テアテラ、サルデスの三つの時代は、真の教会の内部から悪魔の反教会の影響が拡大し、最後には真の教会が守られるためには(ヒラデルヒヤに代表される宗教改革という形で)残党がそこから脱出するしかないという事態にまで心痛い経過を辿ることになります。一般的に悪が浸透する過程をうまく描写しているタルムードの有名なゴーレムの物語のように、悪魔の偽キリスト教的分子は、ペルガモ教会の信者に(寛容と包容を乞う)「御主人様」と話しかけ、テアテラ教会の信者には(一旦仲間に入れると平等を要求し)「わが兄弟」と呼びかけ、サルデス教会の信者に対しては(仲間に入れると支配権を得て服従を要求して)「私の奴隷たちよ」というふうに、自分たちの権力と影響力が増し加わるのに応じて態度が変わります。

その前のスミルナの時代には、ローマ政府と異教社会全体から

²³ 彼の『弁証論』第 50 段より: "plures efficitur quotiens metimur a vobis; semen est sanguis Christianorum."

3. パルガモ：迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

の抑圧は、信者が、地理的、文化的な違いを越えて(特に、地理的、文化的展望、言語的な違いという点で、帝国の半分であるギリシヤともう一つの半分のローマの違いを越えて)ある程度、団結するように仕向けてくれました。

このような連帯は、例えば、教会が当時の異端に対して示した統一戦線に、特に教会の最初の三つの「エキュメニカル公会議」に見ることができます。これらの公会議はそれぞれ、325 年にニケアで(アリウス主義に対抗して)、381 年にコンスタンチノーブルで(アポリナリズムに対抗して)、431 年にエペソで(ネストリウス主義に対抗して)開催されました。これらの公会議では、(個人、グループ、特定の教会が優先されることなく)キリスト教全土からの代表者が出席したという事実そのものが、その前のスミルナの時代の教会の一致が、**下から**(すなわち、個々の信者と個々の教会で選ばれた指導者たちから)湧き上がってきたことを物語っています。教会が「勝利」し、国教会となる過程にあった時代であったと言えることは事実ですが、しかしその時はまだ、帝國的な教皇庁も、誤った伝統に染まった(そして重大な誤りを「制度化」した)世界的な一枚岩の超組織も存在していませんでした。スミルナの時代の信者が完璧であったというわけではありませんが、大概の場合、その時代のキリスト教徒は正しい方向に向かって団結しており、この素晴らしい現象は、少なくとも部分的には、彼ら<スミルナのキリスト教徒>がまだ基本的に、自分たちがあらゆる方面からの反対を受ける危険な海を航海している少数の忠実な信者であると見なしていた(むしろ、彼らが発展する過程で、支配的で、国家が後援する

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

多数派になっていた)ことに起因していると言えます²⁴。(彼らは当時まだ発展する過程の段階で、後になって支配的で、国家が後援する多数派となります)

しかし、ペルガモの時代になると、状況は激変し、普遍的な教会への目に見える影響も同様に地を震わせるようなものとなります。なぜなら、ペルガモは、キリスト教が(当時のローマ帝国という市民的権威に関する限り)未知の存在から、(これまで述べてきたように、ほぼ 3 世紀にわたる迫害によって)既成の国教へと移行し、信仰者に対する迫害から、キリストへの深く変わらぬ信仰からというよりも、むしろ政治的・社会的<圧力という>理由から多くの人々がキリスト者の仲間入りを望むような状況へと移行する終着点を示しているからです(そのため、教会にはニセ信者の存在が不可避となります)。というのも、コンスタンティヌスの下で始まった教会と国家の政治的同盟は、ウォーカーWalker が雄弁に語るように、実に「運命的な結合」であり、多くの点で悪魔との取引だったのです。

なぜなら、政治と国家の関心事が、少なくとも教会の運営、組織、さらには信仰と実践に影響を与える(時には支配するようにさえなる)ことは確実だったからです(例えば、ニケアでの第一回エキュメニカル公会議における国家の干渉に注目してください)²⁵。

²⁴ 帝国の東半分と西半分の両方が 4 世紀から 5 世紀にかけて苦しんだ問題、特に蛮族の侵略が、このような見方を助長したのは間違いありません。

²⁵ Williston Walker, A History of the Christian Church (3rd rev. ed.: New

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

5 世紀の<ヨーロッパの民族大移動として知られる>蛮族の侵攻の圧力の下での<ローマ>帝国の権力の衰退は、この脅威をかなり減少させ、ペルガモの時代の教会に、世俗の関与によって致命的に損なわれることなく、霊的に繁栄する機会を与えました。というのも、コンスタンティヌスがキリスト教を採用したことで、教会行政の中央集権化、政治化、官僚化が進み、この要素は容易に排除されることはなく、この傾向は容易に覆されることはなかったからです。西ローマ帝国の没落による権力的空白は、ローマの教会によって埋められ、政治的エセ・キリスト教は、一方では凶暴で抵抗力のある流れをくみ、他方では魅惑的で一見必要な発展であることが証明されました。

世俗主義への流れが最もはっきりと現れたのはローマ教会でしたが、それは決してローマに限ったことではありませんでした(重要な諸教会は程度の差はあっても、どこも屈服しました)。しかし、この時代とそれに続く二つの時代の教会の過程で、大きな地方教会が次第に世界的な組織へと転化し、前例のない政治的権力を持つようになったのはローマでした。この点で重要なのは、歴史的に見れば、ローマの政治的権力が増大するにつれて、その霊的純度が比例して低下していったということです(私たちはイエス・キリストに仕えるためにここにいるのであって、悪魔の世界体制に手を染めるためにここにいるのではないということを、イエス・キリスト

York 1970) 102.

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

の真の弟子たちに思い起こさせてくれます)。

ローマ教会の政治的台頭と霊的衰退を図式化したものは、何冊でも書ける(そしてこれまでも書かれてきた)でしょう。ここでもっと重要なことは、上に述べたような歴史的展開がペルガモの時代に及ぼした影響を簡単に考察することです。ペルガモの時代とは、権力の官僚的中央集権化へと向かうこの危険な傾向の始まりであり、最終的には真の信者に疑似信仰を押し付けることになった時代です(ヒラデルヒヤの時代に、この死んだ教会からの離脱につながります)。一般論として、上に述べた要因の組み合わせ(すなわち、信仰共同体の全体的な統一、国家後援の下での急進的な展開、5 世紀以降の権力の空白、目に見える教会内の生温い、さらには疑似的な要素の包含)はすべて、目に見える教会の世俗化に寄与しました。この世俗化は、多くの歴史家によって、その政治的成功の重要な要素であるとみなされていますが、最終的にはその霊的衰退の主な要因でもあったのです。

権力の集中化と官僚制の一体性は、表面的には確かに利点があります。一致団結した努力とそれを統率指揮するという「二刀流」は、あらゆる効果的な組織の特徴です--世俗、政治的な意味において、ですが。特に西方におけるローマの「超教会」の誕生は、やはり世俗的な観点から見れば、キリスト教信仰に世俗的な安全保障を提供する上で大きな飛躍であり、特にペルガモ時代の最後の二世紀にわたるイスラム教の脅威の増大と征服を考えれば、霊的には嘆かわしいものでしたが、理解できるものでした。ローマ教

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

皇庁の台頭(レオ大帝(440-461 年)、グレゴリウス大帝(590-640 年)、司祭職の統制、教義上および行政上の権威のローマ教皇庁への集中によって、ローマは(そして世俗的にはそれほど成功しませんでした)、東方の諸教会も)真の「ペルガモ」となり、政治的・軍事的願望を持つ個人や集団が無視することのできない城塞となりました。そして、広範な迫害を受けた前時代の経験に照らせば、将来の攻撃に対してこのような「要塞」を提供したいという願望は理解できます。しかし、そのような考え方の問題点は、逆に、私たちの力強い砦は神であり(詩編 46 篇 1 節)、私たちの岩は主イエス・キリストであるということです(第一コリント 10 章 4 節、詩編 127 篇 1 節参照)。現在、この世は邪悪な者の「膝の上にある」(第一ヨハネ 5 章 19 節)ので、クリスチャンが悪魔の駆け引きをしようとした際は、いつでもどこにおいても、必然的に転覆されてきました。この世における真の安全は、私たち自身の手で与えられるものではなく、私たちの下に主の永遠の腕があることを思い起こし(申命 33 章 27 節)、主が私たちを守ってくださることを信頼することにあるからです(第一ヨハネ 5 章 18 節)²⁶。

中央集権的な教会の発展は、これまで述べてきたように、いくつかの真の利点と、見かけだけの利点(特にこの「安全」という誤った感覚)をもたらしました: それは、異端に対する一丸とした体勢、聖職者を養成する制度、聖典を作成し広めるための機構、そして

²⁶悪魔の反乱シリーズ第 4 部「サタンの世界システム」をご覧ください。

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

伝道のための基盤を提供しました。しかし、このような「利点」の中にも、トラブルの種は潜んでいます。ひとたび誤った教義が「保護された組織」に入り込むと、長所は簡単に短所と化してしまいます。受け入れられている誤った原則に反して真理を教える者は、「異端者」として攻撃されることとなります(宗教改革に対する厳しい拒絶が立証されています)。ひとたび政治的利害関係が最優先されると、選ばれた一握りの聖職者たちという者は、神がご自身の群れを指導するために選ばれた者ではない可能性が高いです(むしろ、靈的聖職者と政治家が入れ替わる)。ひとたび政治的権力争いが他のすべての側面を支配するようになると、聖典そのものさえも改ざんされたり、削除されたりするようになります(聖典に対して「口伝」が時に誤った形で強調されたり、外典が「正典化」されたりしているのです) <外典(がいてん)またはアポクリファ(Apocrypha)とは、ユダヤ教・キリスト教関係の文書の中で、聖書の正典とされる『旧約聖書』39 巻、『新約聖書』27 巻以外の文書のことで、旧約外典、新約外典がある—ウィキピディア「外典」から>。そして、ひとたび伝道されるものがイエス・キリストの福音ではなく、行いによる救い(例えば、超代償行為<聖徒の義務を越えた良い行いが他の人の罪の代償を補うという教え>、免罪符、懺悔など)のニセ宗教であるならば、この超巨大教会の場合に対しても、私たちの主の御言葉が適用されません:

偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、
わざわざである。あなたがたはひとりの改宗者をつくるために、海と陸とを巡り歩く。そして、つくったなら、

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

彼を自分より倍もひどい地獄の子にする。(マタイ23章15節)

そこで、イエスは彼ら[弟子たち]を呼び寄せて言われた、「あなたがたの知っているとおりに、異邦人の支配者と見られている人々は、その民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、すべての人の僕とならねばならない。人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人をあがないとして、自分の命を与えるためである」。(マルコ10章42-45節)

もちろん、これらの悪用はすべてペルガモの時代に結実したわけではありませんが(これが完全に起こるには、さらに二つの時代<テアテラの時代とサルデスの時代>を要しますが)、問題の根源は明らかにここにあります。つまり、この中央集権化、官僚化の傾向は、過去の迫害や当時の危険な世界<前述した蛮族などの攻撃を受けていた状態>という背景を考えると多少正当化できるとしても、(その結果として後に起こったことを考えると)まずい取引だったことがわかります。(パウロ書簡、ペテロ書簡、ヨハネ書簡を見れば明らかであるように)使徒たちが自分の群れの信者らに与えた自由を見れば、このような政治的権力の集中は、教会のため

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

に意図されたものでは決してないことがわかります！使徒たちは個人の見解やローマ教皇庁がすぐに振りかざすようになる勝手な権力行使ではなく、道徳的な権威に基づいた、より慎重な監督を行っていました。²⁷そしてその人たちは、まさに小羊<主イエス・キリスト>の使徒たちでした！他方で、権威を少数の中央教会だけに集中させ、最終的にはその大部分を一つの教会だけに集中させるという方針はまた、悪い結果を招く運命にありました。ペルガモが、難攻不落に見える城塞の町であったにもかかわらず、トロイの木馬に潜入され--内部から陥落して--最終的に攻略されたように、この一枚岩の教会構造の強大化は、外部の脅威から身を守るには効果的かもしれませんが、皮肉なことに、あからさまな敵対勢力を排除するために、トロイの木馬のように侵入させたニセ・キリスト教的要素によって、すぐに潜入され(ペルガモン)、危険にさらされ(テアテラ)、支配される(サルデス)ことになりました。イエスは、そのような「パン種」の危険性について私たちに警告してお

²⁷ 組織という点では、エペソの長老たちに対するパウロの指示(使徒行伝 20 章 13-35 節)、クレタ島の状況に関するテトスへの指示(テトス 1 章 5-9 節参照)、ガイオに対するヨハネの指示(ヨハネ第三 1 章 3-10 節)、一般的な長老たちに対するペテロの指示(1Pet.5:1-4)はすべて、使徒職という最高の権威を持つ管理的賜物がまだ機能していたためであるとはいえ、個々の地域教会にかなりの自治権を与えていたことを示しています。これらの箇所や他の箇所は、地域教会の組織構造には聖書的に定められ制度は存在しないが、(管理し教える才能のある人が実際に立ち会えない)他の広大地域に及ぶ巨大組織は聖書の意図するものではないことを強く示唆しています。このテーマについては、『聖書の基礎知識』の第 6 部 B「教会論」で詳しく扱います

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

られました:

そのとき、イエスは彼らを戒めて、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種(すなわち、サドカイ派の教え:マタイ16章6節参照)とを、よくよく警戒せよ」と言われた。
(マルコ8章15節)

もちろん、「パン種」とは文字通りの意味ではなく(弟子たちが当初解釈したように:マタイ 16 章 7-12 節、マルコ 8 章 16-21 節)、むしろ偽りの教義(マタイ 16 章 12 節)、パリサイ派の場合は偽善(ルカ 12 章 1 節)を指しています。単純に言えば、主の時代、パリサイ人は律法主義的で伝統的な宗教の党派であり、「人の戒めを(あたかも神の)教義のように教えていた」(マタイ 15 章 9 節)。一方、サドカイ派は本質的に世俗主義者であり、神との関係は完全に「口先だけ」から成っていました(イザヤ 29 章 13 節参照)。彼らは宗教よりも政治権力に関心があったのです(これはヘロデへの言及を説明するものです;マタイ 22 章 23-34 節参照)。ペルガモの未成熟な「<外部からの脅威に対して現世的強さによって対抗しようとする>要塞教会」の場合、これらの特徴の両方が発展段階で見られます: 一方では、異教的な装いを採用し、印象的な(聖書にはないけれども)儀式や道具の体系を作り上げることは、パリサイ人によるモーセの律法に関する誤った高圧的な解釈と一体のものであり、他方では、高度に中央集権的で支配的な指導者を擁する一つの世界的な教会を建設することは、サドカイ人の悲願を達成することになります。しかし、パリサイ派とサドカイ派の対立と

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

ローマを中心とする巨大教会の形成との主な違いは、一目瞭然です。パリサイ派とサドカイ派は仇敵でしたが(使徒 23 章 6-10 節参照)、ペルガモの時代に始まる目に見える教会の発展(あるいは腐敗)には、両者の傾向は連携していました。実際、この二つの傾向は互いに補強し合う役割を果たしました。迎合と保護のために「口当たりの良い」、「魅力的な」パリサイ派の礼拝体系を作り上げるには、反対派をブルドーザーで粉砕し、画一化を強制する強力で中央集権的なサドカイ派の権威が必要だったからです。

必然的に、偽のサドカイ派の政治権力と影響力の追求と目に見える教会内の偽りの否定的要素(ペルガモの場合、バラムとバラクの教えの実践者、「ニコライ派」と呼ばれる者達)は、このようなパリサイ派の「迎合」(前述したペルガモ時代の特徴)という全体的な政策を生み出しました(ホセア 4 章 7 節参照)。そして、この政策がもたらした恐ろしい結果は、今日の私たちにとっても極めて重要な意味を持ちます。というのも、教会を最大限に拡大するためには、教会は可能な限り何でも受け入れるようであればならなかったからです。今や数がゲームの名目となり、量(すなわち、少なくとも教会に名目上の服従を捧げる者をできるだけ多くその隊列の中に集めること)は質(すなわち、本物の熱心なクリスチャンの霊的成長に奉仕する代わりに)よりもはるかに差し迫った関心事となったのです。もはや「聖書に書かれていること」が第一の関心事ではなく、「何が拡大に寄与するのか」が第一の関心事となったのです。

その結果、中世教会を特徴づけるようになった異教的で迷信的

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

な慣習のすべてとは言わないまでも、そのほとんどがこの時代に始まったと言えます。幼児洗礼の実践、入念に定義された位階制度、幻想的な装いをまとったエリート司祭職の進化、告解の儀式、彫像の使用、巨大で精巧な教会の建設、聖人を装った他者崇拜、奉献者の使用、複合的な祭りの創設、懺悔と勤行の制度、正当な多様性を圧殺するためのエキュメニカル公会議の利用(451年のカルケドン公会議から始まる)などなど、それはまさに、唯一の真の神やその御子イエス・キリストによる救いとはまったく関係のない、異教的な宗教的カルト活動のシステム(パリサイ人のような教条主義<教義に凝り固まって頑迷なこと>で飾られたもの)を確立するのに助けることになりました。

一方、異教徒にとっては、このような習慣や手段が強調されることは、信じられないほど心地よいことでした。キリスト教の司祭が異教の司祭のように見えたり振る舞ったり、キリスト教の聖人が異教の神々や女神に似ていたり、キリスト教の彫像が異教の神殿にあるものと同じになったり、キリスト教の儀式や習慣や祭りが異教のものと同ほとんど見分けがつかなくなったりすると、表面的な改宗や忠誠は簡単なことになりました。「教会」は、後で問題となってしまう大勢の人々を取り込むために「迎合的<信条をまげてでも他からの厚意を得ようとする>」キリスト教にしたことで得たものは、結局本来の本質を希薄にしてしまったため、なにも残らず、ついには、こうした政策で自らを守ろうと考えていたまさにその勢力によって転覆させられてしまったのです。ペルガモの時代には、これらの問題はまだ初期段階に過ぎませんでしたが、教会がこれらの邪悪な

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

非キリスト教的影響に対して過度に寛容であったことが、やがて目に見える形で教会を粉々にし、変容させることになる方向に進んで行ったのです。

完全に統合され、統一された教会／教会の問題点は、不完全な人間によって運営されるそのような組織は、良い使い方を広め、異端を禁止する効果を持つかもしれませんが、(やはり、運営する人間は不完全であり、不完全さは時間とともにさらに不完全さを生む傾向があるため)最終的には逆の効果、つまり、異端を広め、良い使い方を禁止する効果も持つ可能性があり、必然的に持たざるを得ないということになります。中央集権化と迎合という二重の傾向は、中世後期には、古代にバベルの塔が意図したのと同じ効果をもたらすことになります。腐敗が進み、(すべてではないにせよ、そのほとんどの)真の信者が(信仰の永続のために)＜腐敗した巨大教会から＞離脱しなければならない点に至るまでに何世紀も経過したのは、増し加わる問題にもかかわらず、唯一＜主からの自分のための召しとして＞知っているぶどう園で働き続けた多くのクリスチャンの信仰と献身の証しです。

＜ペルガモに対する＞**キリストの自己描写:**

1.『鋭いもろ刃のつるぎを持っているかたが、次のように言われる(黙示録2章12節) :ここで剣のたとえは、善悪の区別、真の信者とニセモノの区別を鋭くする必要性を強調しています:

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和ではなく、[分断の]つるぎを投げ込むためにきたのである。わたしがきたのは、人をその父と、娘をその母と、嫁をそのしゅうとめと仲たがいさせるためである。そして家の者が、その人の敵となるであろう。(ミカ7章6節参照) わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりもむすこや娘を愛する者は、わたしにふさわしくない。また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない。自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう。(マタイ10章34-39節)

黙示録2章12節の「鋭いもろ刃の剣」も同様の意味で理解されるべきです。教会に入り込んだ悪の手先たちを容認し、迎合することは、これまで述べてきたように、災いのもとでした。このように、教会の支配者であられる方は、悪を容認せず、真理に妥協する者を容認しないという御自身の方針を思い起こさせるような言葉で、御自身のことをここに述べているのです。私たちは、ためらうことなく主を選ぶべきであり、そうでなければ私たちは主にふさわしくないのです(上記のマタイの聖句で明らかです)。ペルガモへのメッセージの後半では、この印象はさらに強くなり、(悪を容認し、真理を妥協する態度と実践について)違反した信者たちは、主から悔い改めるように言われ、また、もし彼らが自分たちの中にある癌のような要素を強制的に排除するという、確かに困難なくことでは

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

あるけれども、そうした>決断をしないなら、主ご自身をご自分の手で問題を対処されるとも言われています。同じように、パウロは、コリント教会が恐れと誤った寛容の態度から、重大な罪の意識に直面しても行動を起こさなかったとき、コリント教会に厳しく対処しなければなりません(第一コリント5章1-13節):「(教会の)外の者は神が裁かれる。[あなたがたは]あなたがたの中から悪者を追い出さなさい! <英文から直訳>(申命記17章7節より引用)」。信者が悪や悪人から離れる必要性は、経験的聖化<訳者コメント:人はイエス・キリストを信じて、身分(地位)としてはすでに神の子で聖なる者となりますが、主が地上で御自身を聖別され歩まれたたように、地上において聖い歩みをする<ヨハネ17章18,19節参照>すなわち、私たちすべてがそうするようにと召されている義の歩みの中核にあるものです(第一コリント5章8節; 5章11節; 第2コリント7章1節; ヘブル12章14節)。悪い行いをする人たちから離れることを怠れば、その人たちの誤りに私たちも引き込まれる危険性があります:

まちがってはいけない。「悪い交わりは、良いならわしをそこなう」。(第一コリント15章33節)

キリストの特別<ペルガモに宛てた>メッセージ:

1. わたしは、あなたが住んでいるところを知っている。そこにはサタンの王座がある。(黙示録 2 章 17 節 新改訳): 悪魔の「王座」とは、「サタンの反乱」シリーズで詳しく見てきたように、創

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

世記 3 章の誘惑と墮落の時にアダムから奪い取った王国、つまり地球のことです。そう、ペルガモの信者たち、そして墮落以来キリストの千年王国が建設されるまでのすべての信者たちは、少なくとも物理的には、暗闇の王国の敵の領域に住んでいるのです。しかし霊的には、私たちは「神に愛された御子の王国」(コロサイ 1 章 13 節)に移されたのです。したがって、勝利の王に従うことを選んだ私たちにとって、「地下壕メンタリティ<实际的・社会的(権力的に)身を固めていけば大丈夫とする考え方>」を採用することはまったく間違った視点です。国家的に組織された激しい迫害の時代は、ペルガモの時代には、一旦過去のものになっていたことを考慮すれば、なおさらです(ヒラデルヒヤ時代のように、時折、一時的に復活するとしても、教会に対する次の全般に及ぶ迫害は、艱難期の後半期まで起こらないでしょう)²⁸。敵は、基本的にはすでに敗北しています(ルカ 10 章 18 節, ヨハネ 16 章 33 節, ヘブル 2 章 14-15 節)、そして徹底的な勝利の日が迫っているのです(黙示録 19 章 11-21 節)。それゆえ教会は、ペルガモの名が示すように、その時代の信者が持っていたような「地下壕」を作るためにここにいるのではなく、むしろ、小羊が前進するところならどこへでも小羊と共に行進し(黙示録 14 章 4 節)、小羊に従うために十字架を負う(マタイ 10 章 38 節, 16 章 24 節)という攻撃的な心構えを持つべきなのです。世俗的な観点からだけ見るなら、ペルガモの置かれ

²⁸ この「来たる艱難期」シリーズの第四部<現在英語のみ>を参照してください。

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

ていた状況を見るなら、＜敵対勢力に対抗できるように＞政治的権力と勢力の追求に関して、ある程度は理解できます。ペルガモの時代には、西ローマ帝国が崩壊し、ローマ帝国の領土であったところが、＜ゴート族など＞蛮族の侵略と支配の波に次々とさらされていたからです。しかし、霊的な観点から見れば、教会の存続と成功は、ローマ帝国の＜庇護＞とは、まったく何の関係もありません。ローマ帝国は後に目に見える教会を「後援」することになったものの、元々＜教会に対して＞敵対視していたのですから。私たちの戦いは地上のものではありません--私たちは血肉と戦っているではありません(エペソ 6 章 12 節)。しかし、私たちの主に仕え、主の力において、神が私たちの避け所である限り、私たちには地上の城塞は必要ありませんし(詩篇 46 篇 1 節)、主の教会に立ち向かうことのできる悪者の要塞もないのです:

そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩(ペトラ, すなわちキリストご自身; 第一コリント3章11節参照)の上にわたしの教会を建てよう(ダニエル2章44-45節参照)。黄泉(すなわち、悪魔の王国)の力<門-新改訳>(すなわち、要害)もそれに打ち勝つことはない<対抗できない-新共同訳>。(マタイ16章18節)

2. 「あなたは、わたしの名を堅く持ちつづけ、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住んでいるあなたがたの所で殺された

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

時でさえ、わたしに対する信仰を捨てなかった」(黙示録2章13節)：(黙示録2章13節)：ペルガモの信者たちは、悪を自分たちの中に容認するという愚かな道を歩んだにもかかわらず、彼ら自身はまだ信仰にしがみついていた。目に見える教会内の信仰がほとんど消え去り、「死んでいる」状態(サルデス：黙示録3章1節)になるまでには、さらに二つの時代を経過します。ペルガモの信徒たちは、当時の信仰だけでなく、(アンティパスについて言及している)過去の迫害においても信仰を保っていたことが称賛されています。この一節以外には、このアンティパスについて歴史的に知られていることは何もありませんが、だからといって、この「アンティパス」という言葉が、ヨハネの時代にそのような殉教者が存在したこと、ペルガモの時代あるいは、それ以前にさかのぼるスミルナの時代に散発的な迫害があったことを否定するものではありません。(アンティパスという名前は、「すべての人の代わりに」、あるいは「すべての人に反対して」という意味があり、最初の<「すべての人の代わりに」>なら、全ての人達のための身代わりの代表として特別選ばれてという意味になり、二番目の<「すべての人に反して」>なら、あらゆる妥協や悪魔的攻撃に対して<すべての人に対してでも>不動の抵抗の態度を持つという意味としてとらえられます)。ここでのキーワードは「過去」です。アンティパスの殉教をもたらした迫害は終わり、ペルガモの時代の教会は、この世の世俗的な観点から見れば、不安定な立場にはありませんでした。しかし、状況の変化があり、霊的前進と霊的攻勢に移る時代になったペルガモについて言えることは、1) 過去に効果的な防衛をしたこと、2) 悪魔の世界(「サタンに住むところ」)のただ中で今も「踏ん張

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

っている」ということぐらいです。この善い功績は過小評価されるべきものではありませんし、ここでの主の称賛には曖昧さや皮肉はありません。しかし、積極的な行動の欠如(すなわち「行い」: エペソ: 黙示録2章2節、テアテラ: 黙示録2章19節、ヒラデルヒヤ: 黙示録3章8節の<三つの>時代の教会とは対照的)からして、ペルガモが「地下壕<堅牢な場所に隠れて持ちこたえる>方針」を特徴とする時代であったという解釈が妥当でしょう²⁹。アンティパスはもはや「過去のこと」になっていたのです。この節が言っていることは、要するに、「確かに、あなたがたは良い遺産を持っており、そのことは称賛されるべきだが、だからといって、あなたがたの今していること(していないこと)の弁解にはならない」ということです。

3. しかし、あなたに対して責むべきことが、少しばかりある。あなたがたの中には、現にバラムの教を奉じている者がある。バラムは、バラクに教え込み、イスラエルの子らの前に、つまずきになるものを置かせて、偶像にささげたものを食べさせ、また不品行をさせたのである。同じように、あなたがたの中には、

²⁹ ²⁹確かに、「行い」(ギリシャ語: erga)についての言及は、スミルナの場合にも見当たりません(他の教会で唯一、肯定的な報告が多い)。しかし、スミルナは、迫害と殉教が支配的であった時代であり、それが彼女の働きであったので、主は、「わたしはあなたがたの行いを知っている」のではなく、「わたしはあなたの苦難(ギリシャ語では「スリップシス thlipsis」。「艱難期」の語源)や、貧しさを知っている(しかし実際は、あなたは富んでいるのだ)。」(黙示録 2 章 9 節)。

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

ニコライ宗の教を奉じている者もいる (黙示録2章14節15節):

主がペルガモ時代の教会を非難されたことで、まず注目すべきことは、「バラムの教を奉じている(実践している)者たち」と「ニコライ派の教を實踐する者たち」とは同じ者達のことであるということです。この教会にはその両方が「いる」のであり、ニコライ宗の人達への言及は説明のために付け加えられたものです(すなわち、[例えて言うなら]「**同じように**、……ニコライ宗を奉じている者もいる」ということです)。エペソの偽教師たちについての考察や、(スミルナのところで述べた)七つの時代を通しての悪魔の攻撃についての全体的な評価で見たように、歴史的なニコライ宗の者たちの正体は推測に包まれているにもかかわらず、これらの用語はすべて、本質的に悪魔の「反-教会」(と真の教会との関係)を指しているのです。前述したように、ペルガモ教会の中にこの二つのグループ<バラムの教を實踐している者たちとニコライ宗の教を實踐している者たち>(同じ人達のことを言っている)が「いる」という事実は、前の二つの時代とは異なり、悪の力がペルガモ教会内に足場を築いたことを知らせています。

とはいえ、この二重の記述から、キリストの地上の集会で大きくなりつつある不信仰な者たちの動きについて、何かを読み取ることもできます。この「ニコライ宗の者」たちは、「バラクがバラムの助言によって行ったこと」を行っているのです。「ニコライの者」という言葉は、前述にあるように、「人々」(*laos* ラオス)と「征服する」(*nikao* ニカオ)を意味するギリシャ語から構成されており、(エペソ

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

の場合と同じように)偽教師たちが、聖書の真理よりも民衆の意見の優先を宣言していることを表しています³⁰。つまり、主がこの名前を使われたことによって、ペルガモの時代の主要な特徴として指摘した(偽の習慣、偽の人物を受け入れるという)迎合の事実が、もう一度強調されているのです、一方では安全保障のため、他方では政治的権力のために、偽りの習慣、偽りの人物、偽りの信仰を受け入れようとする(こと)。ここでのニコライ派とエペソ時代のニコライ派との主な違いは、ペルガモの時代には、彼らは目に見える教会の内部にいて、組織化されたキリスト教の枠組みの中で指導的立場や権威ある立場から反-教会の方針を推進していることです。

これらの偽教師とその支持者たちがその結末(サルデスの時代には最終的に教会組織を完全に支配するようになる)に達しようとしていることは、ここでバラムとバラクについて言われていることで説明されます。バラクとはモアブ人の王で、イスラエルの民を滅ぼそうとしていました。そのために、イスラエルを呪うために彼は有名な呪術師バラムを雇いました。バラムは、主の支配的な意志のために、イスラエルを外側から滅ぼすことはできませんでしたが、その代わりに、イスラエルを内から滅ぼす戦略をバラクに提供しまし

³⁰ 興味深いことに、バラムの名前も同じような語源を持っています。バラムの名前を構成する2つの要素に、ヘブル語の「主」(バアル)と「民」(アム)を見ることができ、「民が主(あるいは神)である」という潜在的な意味があります。

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

た。その戦略とは、要するに、この破滅への道を辿らせるためにモアブの女性たちの魅力を使って、個々のイスラエル人をそそのかして、モアブの偶像崇拜に関わらせることでした。そうすれば、肉欲的な誘惑は霊的な不貞にもつながり、その不敬神な行為によってイスラエルを神から引き離すことになり、イスラエルはモアブにとって(あるいはどんな敵にとっても)格好の餌食となるというものでした。

ペルガモ教会との類似を見るのは難しくありません。真の教会の代わりに潜り込んだニコライ派は、バラムが考えたのと同じような戦略を取っています。欺瞞に満ちた誘惑的な偽りの教えによって、彼らは教会に異教の慣習を持ち込みました。その結果、(キリスト教以前の)古代世界の異教カルトに関連するものを取り入れることで、(特に、貧しい異教徒かもしれませんが、キリスト教ではない人々にとって)教会をより友好的で「迎合的なく入り込みやすい」場所にするので、かつての異教徒を見える教会に迎え入れるのを励まし奨励するという現世的な利点がありました。そして他方では、異教の祭りや形式、信仰に寛容で、最終的には受け入れることで、信者になる可能性のある者や実際の改宗者<信者>の反対を抑え、無力化することで、安全の要素も提供しました。しかし、霊的な観点から見ると、異教の祭りを祝い、彫像や鬼神を崇拜し、聖書の真理を人の創った原則に置き換えるこの傾向は、事実上、新しい種類の「律法主義」だったので(マタイ 15 章 9 節; 第一コリント 10 章 19-21 節, 12 章 2 節; ガラテヤ 3 章 3 節, 4 章 9-10 節; コロサイ 2 章 17 節; ヘブル 8 章 5 節, 10 章 1 節参照)。という

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

のも、これらの異教的な要素にユダヤ教の神殿儀式の色合いを添えることで、教会内の真のクリスチャンにとってより受け入れやすいものとなったからです(例えば、「神殿」、「祭司」、「祝祭」などは、ユダヤ教と異教の典礼の両方に存在する)。このような「売り込み」方策が原理的に間違っていることは明らかです(たとえそれがどんなに成功したとしても):

神を知らなかった当時(あなた方が未信者であった時)、あなたがたは、本来神ならぬ神々の奴隷になっていた。しかし、今では神を知っているのに、否、むしろ神に知られているのに、どうして、あの無力で貧弱な、**<偽りの:英訳>**もろもろの**[異教の]靈力**に逆もどりして、またもや、新たにその奴隷になろうとするのか。あなたがたは、日々月や季節や年などを守っている。わたしは、あなたがたのために努力してきたことが、あるいは、むだになったのではないかと、あなたがたのことが心配でならない。(ガラテヤ4章8-11節)

だから、あなたがたは、食物と飲み物とにつき、あるいは祭や新月や安息日などについて、だれにも批評されてはならない。これらは、きたるべきものの影であって、その本体はキリストにある。あなたがたは、わざとらしい謙そんと天使礼拝とにおぼれている人々から、いろいろと悪評されてはならない。彼らは幻を見た(とされる)ことを重んじ、肉の思いによっていたずらに

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

誇るだけで、キリストなるかしらに、しっかりと着くことをしない。このかしらから出て、からだ全体[教会]は、[すべての]節と節、筋と筋とによって強められ結び合わされ、神に育てられて成長していくのである。もしあなたがたが、キリストと共に死んで世の<偽りの:英訳>もろもろの[異教の]霊力から離れたのなら、なぜ、なおこの世に生きているもののように、「さわるな、味わうな、触れるな」という規定に縛られているのか。これらは皆、使えば尽きてしまうもの、人間の規定や教によっているものである。(コロサイ2章16-22節)

不信者と、つり合わないくびきを共にするな。義と不義となんの係わりがあるか。光とやみとなんの交わりがあるか。キリストとベリアル(=悪魔)となんの調和があるか。信仰と不信となんの関係があるか。神の宮と偶像となんの一一致があるか。わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、「わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう」。(第二コリント6章14-16節)

「組織」を拡大し、維持するために真理を妥協するというこの悲惨な道は、やがて見える教会の本来の組織の多くに霊的な死をもたらすことになります。なぜなら、一時的な利益のために神の真理

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

を妥協することは、「霊的な偶像礼拝」と「霊的な不忠誠」の本質であり、イスラエルの長い歴史を通して一貫した失敗であり、常に悲惨な結果をもたらすものとなったからです(ホセア 4 章 12 節, 5 章 4 節)。

スミルナの時代には、教会を墮落させようとする敵の企てに、強烈な外圧は効果がありませんでしたが、ペルガモの時代には、内的な誘惑(具体的には、神から離れて安心したいという願望)が非常に効果的であることが証明されました。神の真理とは正反対のことに手を出しても「まだ善良なクリスチャンでいられる」という考えは、当時も今日と同じように(そして同じように危険な)誤りでした。イスラエルがモアブ人と交わり、彼らの異教の偶像崇拜を取り入れたのと同じように、ペルガモの時代の教会にとって、不信仰な人々を容認し、不信仰なやり方を取り入れることは、容認できることでも、有益なことでもありませんでした。なぜなら、どちらの場合も経過は同じだからです。不義な交際の後には霊的な不誠実さが続くことになるのです(第一コリント 15 章 33 節; 参照:箴言 13 章 20 節, 22 章 24-25 節; 第二コリント 6 章 14 節): **バラムは、バラクに教え込み、イスラエルの子らの前に、つまずきになるものを置かせて、すなわち、1)偶像にささげたものを食べさせ、2) (すなわち、「それから」)また不品行をさせたのです。**このように、主がここで用いられたモアブ人とバアル-ペオルの歴史的な例における偶像礼拝への関与に先立つ異教徒との婚姻は、ペルガモの代の信徒たちが置かれた状況とまったく類似しています。彼らは、誘惑され、圧力をかけられて、異教徒と恐ろしい習慣を取り入れること

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

に提携し、それによって、次の二つの教会時代にわたって壊滅的な被害をもたらすことになる霊的不忠実のプロセスを始めることになるのです。

4. だから、悔い改めなさい。そうしないと、わたしはすぐにあなたのところに行き、わたしの口のつるぎをもって彼らと戦おう (黙示録 2 章 16 節): この言葉は、ペルガモ教会全体に向けられています(「わたしはあなたがたのところに行く」)。従って、ここで述べられている真理の妥協や異教徒との迎合<自分の信条を捨て、気に入られようとする>ことや交際は、教会内のすべての人にとっての問題であり、真の心の変化とそこから生じる行い(すなわち、真の悔い改め)を必要とするものです。この剣(神罰の)は教会の中の悪を行う者にのみ下るものであっても、(参照:「私は...彼らと戦おう」)教会全員が心に留めるべきことです。ここで言及されている剣は、ヨハネには見えた剣であり、ヨハネにこのメッセージを伝えているときに主の口から放たれたものであって(黙示録 1 章 16 節)、主の再臨のときに敵を滅ぼす剣でもあります(黙示録 19 章 15 節; 19 章 21 節。参照:イザヤ 49 章 2 節; 第二テサロニケ 2 章 8 節)。しかし、従わなかった場合の神罰という明確な脅威に加えて、剣にはもう一つ重要な意味があります。剣は破壊の道具であるだけでなく、(善と悪の間の)分裂と分離の道具でもあるからです。(ペルガモ時代の教会が実践できなかつたことであり、主がここで求めておられることです(ヘブル 4 章 12 節参照)。

神は聖なるお方であり、真実に神に従おうとする者は皆、神に

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

向かって自らを聖別し、不純なものから離れ、代わりに善いもの、正しいもの、尊いものに固執しなければいけません(ピリピ 4 章 8 節; 第一ペテロ 1 章 15-16 節; 申命記 32 章 51 節参照)。だからといって、信者がこの世に背を向けるという意味ではありません。この世以外の場所に住むことは不可能なのですから(第一コリント 5 章 9-11 節)。しかし、<この世の人との>親しい交わりや交際を選ぶとき、特に神を礼拝するために集うときには、注意深く慎重にならなければならないということです。私たちは、神の真理の原則に忠実でなければならず、これが正しい行動方針だと神に信頼して、真実に神を愛していない人たちによって、誘惑されたり、圧力をかけられて、正しいと知っていることを妥協してはならないのです。

キリストが約束された報酬：

1. 「勝利を得る者には、隠されているマナを与えよう。また、白い石を与えよう。この石の上には、これを受ける者のほかだれも知らない新しい名が書いてある」(黙示録2章17節)：妥協や便宜を図ろうとするこの世の圧力にもかかわらず、ためらうことなく、心から神を選び、神に従うことの義には、キリストがペルガモ教会に約束された具体的な報酬が続きます。

隠されているマナ：「隠されているマナ」は、来るべき祝福の日に、イエス・キリストと対面する私たちの完全で開かれた交わりを表しています。聖書を読むクリスチャンなら誰でも知っているように、

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

マナは、不毛の荒野の中でイスラエルの民を 40 年間支えた神から与えられた「パン」です(出エジプト記 16 章)。そして、神がマナというパンを与えられたのは、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによって生きる」(出エジプト 8 章 3 節; マタイ 4 章 4 節, 6 章 11 節; ルカ 11 章 3 節も参照)ことをイスラエルの民に教えるためであったことも私たちは知っています。ここに出てくる「マナ」は、主によって「隠されている」と表現されています。なぜなら、私たちは、約束された命のパンであるイエス・キリストとの個人的で目に見える交わりを現在はまだ体験していないからです(ヨハネ 6 章 25-58 節, マタイ 26 章 26 節参照)。私達はこの時空の次元で彼を愛しているけれど、この肉において彼をまだ見ていないのです。(第一ペテロ 1 章 8 節, 第一コリント 13 章 12 節, ヘブル 11 章 27 節, ヨハネ 20 章 29 節)しかし、やがて来たる祝福の日には、キリストへの信仰によって打ち勝つ私たちは、私たちを贖ってくださった主との甘い交わりという計り知れない喜びを永遠に経験することになるのです:

まことに、まことに、あなたがたに言います。信じる者は永遠のいのちを持っています。わたしはいのちのパンです。あなたがたの先祖たちは荒野でマナを食べたが、死にました。しかし、これは天(すなわち、キリスト御自身;「この岩」マタイ 16 章 18 節参照;「この神殿」ヨハネ 2 章 19 節参照)から下って来たパンで、それを食べると死ぬことはありません。わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

に生きます。そして、わたしが与えるパンは、[捧げられようとしている]世のいのちのための、わたしの肉です。」
(ヨハネ6章47～51節 新改訳IV)

この文の流れでは、私たちが永遠に満足させてくれるこの真のマナを「食べる」と、「ニコライ派」が奨励した「性的に不道徳な行為」につながる「偶像へのいけにえ」を「食べる」ことが対照的に表現されています。というのも、ここでのいのちのパンを真に「食べる」と、すなわち神の御言葉を取り入れることに象徴されるイエス・キリストとの健全な交わりは、ペルガモ時代の教会が主から非難されるような偽りの交わりや偽りの放縦とは完全に対立するものだからです。私たちは、(彼らがそうであったように) 世俗的な妥協や未信者との迎合の中に安全や供給やリフレッシュを求めるのではなく、代わりに、今ここで真理により(真理は主であるから)、永遠に約束された隠されているマナによって私たちが満足させてくださる、私たちのために死んでくださった方との永遠の個人的な交わりで満たしてくださる方に目を向けるべきなのです。

わたしたちが祝福する祝福の杯、それはキリストの血にあずかることではないか。わたしたちがさくパン、それはキリストのからだにあずかることではないか。パンが一つであるから、わたしたちは多くいても、一つのからだなのである。みんなの者が一つのパンを共にいただくからである。肉によるイスラエルを見るがよい。供え物を食べる人たちは、祭壇にあずかるのでは

3. パルガモ：迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

ないか。すると、なんと言ったらよいか。偶像にささげる供え物は、[本当に]何か意味があるのか。また、偶像は何かほんとうにあるものか。[もちろん]そうではない。人々が供える物は、悪霊ども、すなわち、神ならぬ者に供えるのである。わたしは、あなたがたが悪霊の仲間になることを望まない。主の杯と悪霊どもの杯とを、同時に飲むことはできない。主の食卓と悪霊どもの食卓とに、同時にあずかることはできない。(第一コリント 10章16-21節)

もし私たちが、主が今も来るべき世においても、永遠に私たちの分け前であることを本当に受け入れるなら(詩篇 73 篇 26 節)、もし私たちが、偽りの交わりやこの世の誘惑を避けて、この隠されたマナの約束を本当に待ち望むなら、「人はパンのみにて生きるにあらず」という教えの真理を常に心に留め、実践すべきです。そして、今はこの世に隠されていますが、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストが来られるときに明らかにされる未来のマナの分け前に与えるようになるために、御子を通して私たちの神の口から出る御言葉のマナを「真に食べる」ことを決して怠らないことを決意すべきです。

白い石： 私たちの主が、悪魔の世界の中で信仰と忠実の生涯を全うし、打ち勝った私たち一人一人に与えてくださる「白い石」が

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

象徴する、考慮すべきいくつかの重要な側面があります³¹。第一に、私たちが教会の七つの時代に対するこれらのメッセージの中でこれまで見てきたキリストの他の約束と同様に、この約束もまた、以前に与えられたペルガモ時代の教会の記述を反映しています。隠されているマナが、将来与えられる真の交わりと、(ペルガモ時代の教会が犯していた)異教的要素との偽りの交わりとを対比していたように、白い石の一つの働きは、イエス・キリストを信じる一人一人の真の永遠の安全と、当時の偽りの安全の追及(ペルガモの失敗は、第三の時代のこの教会の名前である「要塞」に反映されている)を対比するものです。悪質な世俗的影響を受け入れて築かれた人工の地上の城塞、皮肉にもここではすでに内部に侵入し、攻撃されているように描かれている要塞(最初のペルガモに対する「トロイの木馬」の成功を比較してください)とは対照的に、信者は、私たちが決して倒れることのない永遠の建物、すなわち、唯一無二の真の岩、私たちの礎石であるイエス・キリストの上に築かれた真の霊的な教会に建て上げられているという事実³²に焦点を合わせるべきです(第一ペテロ 2 章 4-8 節;第一コリント 3 章 9-15 節;エペソ 2 章 20-22 節参照)。このように、ペルガモで、真に守るべ

³¹ ゼカリヤ 3 章 9 節の大祭司ヨシュアの前に置かれた石は、イエス・キリストにおける私たちの贖いの基礎である罪が取り除かれたことの象徴です。この文脈では、罪が清められたことを示す色としての白はよく知られており(イザヤ 1 章 18 節参照)、この時代の世俗の世界でも、白が無罪を意味する色であったことは興味深いことです。オヴィッド変身記 15.41 では、陪審員が無罪判決を下す際に白い「小石」を使用(有罪判決を記録する際には黒い小石を使用)。

3. パルガモ：迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

き真理の原則そのものを損ない、決して安全であるはずのない世俗的な安全のために、世俗的な勢力との有害な結びつきが行われたのとは対照的に、白い石は、神との真の結びつきと、神における真の安全を表しています。

このような特別な石は、天使の場合(すなわち、エゼキエル 28 章 13-14 節の「火の石」)においても、イスラエルの 12 部族の場合(すなわち、大祭司の胸板にある貴石：出エジプト 28 章 17-21 節、39 章 10-14 節；ホセア 3 章 4 節)³²においても、集団として、神の者への神からの記念として知られています。しかし、人生という霊的な戦場の真ん中にいる私たちにとって、私たちが個々に神に知られており、イエス・キリストの教会という神の壮大な設計の建築物の「石」としてそれぞれが特別な「石」で認められるだけでなく、私たちの主ご自身から、この記念の石に刻まれる「新しい名」を受けると告げられることは、最も励まされることです(参照：イザヤ 56 章 5 節、62 章 2 節、65 章 15 節)。聖書の他の箇所(例えば、アブラムからアブラハムへ、ヤコブからイスラエルへなど、この二つ以外にも挙げればきりがありません)で神の改名について私たちが知っていることから、この「新しい名前」は、私たちがキリストの教会への

³² 悪魔の叛乱シリーズ第 1 部「サタン」の叛乱と墮落」の III.f 節参照。ここでの「名前」の一部がイスラエル内の私たちの新しい部族所属を含んでいるという事実については、悪魔の反逆シリーズ第 5 部「審判、回復、取り替え」の II.9.b 項「究極の組織であるイスラエル」を参照し、特に本シリーズ第 6 部 VII.7 項「新エルサレムの宝石の土台と部族の門」を参照してください。

3.ペルガモ:迎合の時代(黙示録 2 章 12-17 節)

奉仕においてこの地上で神の計画の中で果たした役割を神が反映したものであることは明らかです。

[わたしを見捨てた]あなたがたの残す名はわが選んだ者には、のろいの文句となり、主なる神はあなたがたを殺される。しかし、おのれのしもべたちを、ほかの(すなわち「新しい」)名をもって呼ばれる。(イザヤ65章15節)

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

4. テアテラ：「妥協の時代」 (802 年～1162 年＝360 年)

黙示録 2 章 18-29 節

(18) テアテラにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『燃える炎のような目と光り輝くしんちゅうのような足とを持った神の子が、次のように言われる。(19) わたしは、あなたのわざと、あなたの愛と信仰と奉仕と忍耐とを知っている。また、あなたの後のわざが、初めのよりもまさっていることを知っている。(20)しかし、あなたに対して責むべきことがある。あなたは、あのイゼベルという女を、そのなすがままにさせている。この女は女預言者と自称し、わたしの僕たちを教え、惑わして、不品行をさせ、偶像にささげたものを食べさせている。(21)わたしは、この女に悔い改めるおりとを与えたが、悔い改めてその不品行をやめようとはしない。(22) 見よ、わたしはこの女を病の床に投げ入れる。この女と姦淫する者をも、悔い改めて彼女のわざから離れなければ、大きな患難の中に投げ入れる。(23) また、この女の子供たちをも打ち殺そう。こうしてすべての教会は、わたしが人の心の奥底までも探り知る者であることを悟るであろう。そしてわたしは、あなたがたひとりびとりのわざに応じて報いよう。(24)また、テアテラにいるほかの人たちで、まだあの女の教を受けておら

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

ず、サタンの、いわゆる「深み」を知らないあなたがたに言う。わたしは別にほかの重荷を、あなたがたに負わせることはしない。(25)ただ、わたしが来る時まで、自分の持っているものを堅く保っていなさい。(26)勝利を得る者、わたしのわざを最後まで持ち続ける者には、諸国民を支配する権威を授ける。(27)彼は鉄のつえをもって、ちょうど土の器を砕くように、彼らを治めるであろう。それは、わたし自身が父から権威を受けて治めるのと同様である。(28)わたしはまた、彼に明けの明星を与える。(29)耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい』。

テアテラの時代は、両義的、あるいは二分的と表現するのが最も適切かもしれません。一方では、その 360 年の間に、主イエス・キリストの真の信者が主イエス・キリストとその教会のために多くの素晴らしいことを成し遂げましたが、他方では、不信仰で悪魔的な「反-教会」の要素が、目に見える組織の指導権を争うほどに拡大した時代でもあったのです。この二つの分離を「テアテラ」という名前に見ることができます。「犠牲を惜しまない」というその語源は、二重の意味があります³³。この名前は、キリストの福音を、蛮族として(この時代に知られていた)多くの国々に伝えるために(特に宣

³³ この名前は二つのギリシャ語の単語を組み合わせたもので、一つ目は「いけにえを捧げる」という意味の動詞 *thuo* (θύω) から、二つ目は「疲れのない/たゆまない」という意味の形容詞 *ateires* (ἄτρεϊς) からきています。

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

教師によって)払われた多大な犠牲を表すと同時に、主がここで言及された偶像礼拝の偽りのいけにえに関わっていたことも意味しています(ペルガモでもそうでした)。霊的な犠牲という点では、テアテラには、その献身的なわざによって主に対する強い愛を示した多くの人々がいました。しかし、テアテラには、キリストのためではなく、自分たちの世俗的で肉欲的な目的のために献身する、つまり、偶像礼拝や異教的なお祭り騒ぎをして罪を犯す、悪性で癌のような「反-教会」、つまり、(その働きが称賛される忠実な者とは対照的に)キリストに霊的に不誠実で、本質的に、悪魔に献身する人々も増えていました。ペルガモでは、敵は単に門の内側に入り込んだに過ぎませんでした。テアテラでは、地上の教会組織の構造の中で、敵が真の信者と覇権を争っていたのです。

＜テアテラに対する＞キリストの自己描写:

1. 「燃える炎のような目と光り輝くしんちゅうのような足とを持った神の子が、次のように言われる」(黙示録 2 章 18 節): この描写は、すべて裁きについてであり、主はテアテラの真の信者について良い評価を述べてはおられますが、テアテラを苦しめている問題の緊急さが、主の心の中で最も重要なこととなっていることが明らかです。その青銅(燔祭の青銅の祭壇と比較: 出エジプト 27 章 1-6 節; 民数記 21 章 9 節; 申命記 28 章 23 節; ゼカリヤ 6 章 1 節参照)、さらに特に火(例えば、イザヤ 66 章 15 節; マタイ 3 章 10-12 節; 黙示録 20 章 10-15 節)が来たるべき裁きを告げていることは、聖典の読者には周知の事実です。この場合、神の燃

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

える火のような矯正を必要とするすべての罪過を含む、すべての物事に対する主の完全かつ完璧な知識に注意を喚起する炎のような目(歴代誌下 16 章 9 節;ゼカリヤ 3 章 9 節、及び、ゼカリヤ 4 章 10 節と黙示録 5 章 6 節)と、一方、悔い改めがない場合、主がこの裁きを直ちに実行する用意があることを表している白熱した青銅の足という二重の表現は、(悔い改めを拒む者たちに対する)迫り来る裁きの強烈な印象を与えます(エペソ 6 章 15 節; イザヤ 52 章 7 節参照)。私たちの神は「ねたむ」神です(申命記 4 章 23-24 節; ヘブル 12 章 29 節)。すなわち、神に誓いを立てた者の不貞に対して寛容ではない神であられ、ここで述べられているご自分についての描写をとおして、テアテラのかかなりの部分が霊的な売春に関わっていたことに対する主の憤りを表しています。

キリストの特別なメッセージ：

1. 「わたしは、あなたのわざと、あなたの愛と信仰と奉仕と忍耐とを知っている。また、あなたの後のわざが、初めのよりもまさっていることを知っている」(黙示録2章19節)：これは、テアテラの真の信者たちにとって、実に輝かしい良い報告であり、彼らが携わってきた働きの重要性を反映していると同時に、彼らの活動の傾向が良いものであることを認めているものです。テアテラの時代の歴史の中で、最も顕著で、また霊的に重要な良い傾向は、前述したように、本来のローマ帝国の辺境を越えて宣教活動が広範囲に拡大したことです。テアテラの時代(802年から1162年まで)の間に、福音伝道は(最も劇的で、最もよく記録されている拡張地

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

域として)北ヨーロッパ、東ヨーロッパ、ロシア、イギリス諸島に及び、その結果、イエス・キリストの教会に真の信者が大量に流れ込みました。この改宗の波は、ペルガモの時代に起こった「社会的キリスト教化」の過程とは異なっていたものです。当時(ペルガモの時代)は、異教徒が教会に加わるのを容易にするために、多くの妥協がなされたことが思い出されます。しかも新しい改宗者たちというのは、多くの場合、霊的なことよりも実際的なことの配慮に動機づけられていました。しかし、テアテラ時代の新しいキリスト教徒にとって、事情は異なっていました。一方では、(前の時代から引きずっている)欠点はあったにせよ、聖書に基づいてイエス・キリストを通して神を礼拝することを核心とする、ほとんど「堅実な」キリスト教がありました。他方、以前は「異教徒」であった土地の人々は、(政治的な現実が変化した結果ではなく)純粹で個人的な動機からクリスチャンになりました。この結果として明らかに、神は真の伝道者とその熱心な聞き手の努力を称え、テアテラの教会時代を、キリスト教信仰の最も劇的で急速な拡大時期の教会時代の一つとして祝福されたのです。主がここで大いに称賛されているのは、主に(テアテラ全体の霊的、物質的な支援とともに)この働き<福音伝道による教会の拡張>です。

しかしながら、その後続く節で主が批判を述べておられることを考えると、私たちは皆、過剰なほどの善も過剰な悪を打ち消すには不十分であることを冷静に反省すべきです(エゼキエル 33 章 12-16 節参照)。私たちの誰も完全ではないし、教会のどの時代も完全なクリスチャンはいませんでした。しかし、主が寛容で恵み深

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

い方であることは間違いのないことですが、主の忍耐にも限度があります。(出エジプト 34 章 5-7 節; イザヤ 48 章 9 節; 第一テモテ 2 章 4 節; 第二ペテロ 3 章 9 節, 3 章 15 節)。どのような文明、どのような組織、どのような教会の時代、どのような集団であっても、例外的に善良である信者や例外的に神に忠実な信者が存在しても、広範な反逆と背教に対する神の裁きを退けるには不十分な時がやって来ます(出エジプト 32 章 11-14 節, 32 章 32-33 節; エゼキエル 22 章 30 節):

「人の子よ、もし国がわたしに、もとりそむいて罪を犯し、わたしがその上に手を伸べて、そのつえとたのむパンを砕き、これにききんを送り、人と獣とをそのうちから断つ時、たといそこにノア、ダニエル、ヨブの三人がいても、彼らはその義によって、ただ自分の命を救いうるのみであると、主なる神は言われる。(エゼキエル 14 章 13, 14 節)

この点で、テアテラは、(危険なほど中央集権的な官僚主義を発展させるほどに)優れた防衛が珍重される一方で、神の言葉を学び広めることが軽視された、ペルガモの初期の時代とは正反対であることを示しています。テアテラとペルガモの教訓を私たち個人の生活に当てはめれば、霊的成長や、個々に与えられた賜物に従った奉仕の準備、そして、神が昔から私たちのために定めておられた務めと善行を実行するという「良い攻勢的なわざ」に加えて(エペソ 2 章 10 節)、すなわち、私たちの内にある罪の性質を

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

「死に追いやる」(コロサイ 3 章 5 節; ローマ 8 章 12-13 節; エペソ 4 章 22 節; コロサイ 3 章 9 節参照)こと、そして、キリストのために生きながらこの世に死ぬ(ローマ 6 章 2-14 節; ガラテヤ 2 章 20 節, 5 章 24 節, 6 章 14 節; ピリピ 1 章 21 節; コロサイ 2 章 12 節, 2 章 20 節, 3 章 1-4 節)ことへの固い決意を必要としています。悪魔の世界の真ただ中での生活は実に困難な命題であり、聖霊によって知らされた私たちの良心がそうするように、「間違ったことを拒み、正しいことを選ぶ」(イザヤ 7 章 16 節参照)ようにというその行動のために日々自分の十字架を手に取り、自らを律することにおいて完全であることは、確かに挑戦的な仕事です。私たちが主の御手に身を委ねさえすれば、主の御霊は私たちの内におられて、「意志や、行動」の両方に(ピリピ 2 章 13 節; マタイ 26 章 41 節; ローマ 8 章 5-13 節; ガラテヤ 5 章 16-18 節参照)働きかけるために常に存在していただけますが、人間である以上、人生の荒波にぶつかる可能性が高いことは事実です：ヨブ記 1-2 章; 第二テモテ 3 章 12 節; 第一ペテロ 4 章 13 節, 5 章 9 節) この二つの面において前進することは、苦しく、耐え難いほど時間のかかるものとなるかもしれません。そのようなときには、私たちはたゆまぬ忍耐と辛抱強さを示すことが最も重要です(ローマ 5 章 3-5 節参照)。このように、個人的な聖化(私たちの「防御」:ヘブル 12 章 14 節)と霊的な成長と宣教(私たちの「攻勢」:ガラテヤ 6 章 9-10 節)における前進が、たとえ大きな抵抗(個人的な疲労や外的な圧力など)に遭ったとしても、前進し続ける限り、私たちは決して獲得した領域を失うことはないのです：

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

だから、わたしたちの中で[靈的に]全き人たちは、そのように(靈的な前進と報酬に集中し、背後にあるものにこだわらないように:13-14節)考えるべきである(つまり、あなたが成熟し、あるべきように前進していると仮定して)。しかし、あなたがたが違った考えを持っているなら、神はそのことも示して下さるであろう。ただ、わたしたちは、達し得たところに従って進むべきである。
(ピリピ 3章15-16節)

もし私たちが攻撃を受けても耐え忍ぶことができるなら(繰り返しますが、私たちが受ける靈的な攻撃について、私たちの何らかの責められるべきことがあるのか、それとも、私たちが前進しているために敵の注目を引いてしまったための本質的には賛辞であるのかは別として)、その圧力がやがて取り除かれるときには、私たちは、信仰が強くなっているだけでなく、靈的な意味では何一つ損なわれていない自分に気づくことでしょう。

2. 「しかし、あなたに対して責むべきことがある。あなたは、あのイゼベルという女を、そのなすがままにさせている。この女は女預言者と自称し、わたしの僕たちを教え、惑わして、不品行をさせ、偶像にささげたものを食べさせている。わたしは、この女に悔い改めるおりとを与えたが、悔い改めてその不品行をやめようとはしない」(黙示録2章20-21節): 主のこの言葉から明らかのように、テアテラには(イゼベルに代表される)偽キリスト教的な要素があり、それが真のクリスチャンを迷わせています(「わたしの

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

しもべたちに性的に不道德な行為をさせ、偶像のいけにえの食物を食べるように教え、欺いている」。つまり、まだペルガモの門に潜入したばかりであった反-教会の要素が(その前の時代と同様の何でも良かれ主義のおかげで)、今や、イエス・キリストの真の礼拝から信者を誘惑し、そそのかすことに積極的に従事しており、しかも目に見える教会の中の権威の立場からそのようなことをしていると述べられているのです。従って、ペルガモでは単に初期段階の問題であったものが、今や、キリストに仕えていると公言しながらも、実際には(イゼベルに代表される)サタンに仕えている要素によって、目に見える教会を支配しようと本格的に戦いを挑んでいるのです(この点は、私たちの主が諫(いさ)め、猶予期間を与えたにもかかわらず、彼女が自分のやり方を変えようとしないことから明らかです)。

ここでの「性的に不道德な行為」(欽定訳では fornication, NKJV では sexual immorality。新改訳では「みだらなこと」いずれも「性的な不品行」にかかわるという意味を持ちます)とは、文字どおりの姦淫のことではなく、むしろ、イゼベルの働きによってテアテラの信者の何人かが墮落させられ、誘惑され、それによってイエス・キリストへの忠誠を捨てて、この偽りの権威が提供する代用品を好むようになる霊的な不貞のことを指しています。³⁴ このようにキリス

³⁴ さらに、偶像礼拝に参加する前に、霊的な不忠実が最初に挙げられていることは、ペルガモの時代から状況が悪化していることを明確に示しています。(今はより重い犯罪が先なので)。

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

ト教の名のもとに冒流的な行為への誘惑的な呼びかけが、教会の目に見える組織構造の内部から発せられるという事実は、これを二重に危険で不吉な状態に進展させます。教会組織の外から発信される嘘を防ぐことでさえ、悪魔の天才的な欺く能力を考えれば、私たちにとって十分に困難なことで、教会組織の外から発信される嘘から身を守ることはできたとしても、自分たちが属しているグループの内側からそのような脅威が発信された場合、その脅威から身を守るためには、私たちの識別力と聖書の真理に関する知識のすべてが必要になることでしょう。

「イゼベル」の問題は、私たちの時代にも存在しています。今日、疑いなく、神を代表していると偽っている(すなわち、「預言者であると言いながら預言者ではない」)多くの「教会」組織が存在するからです。私たちには少なくとも、神から離れ、代わりにイゼベルのように世俗的な権力と忌まわしい実践を、完全または部分的に追求するような団体から離れるという選択肢があります。しかし、9 世紀から 12 世紀にかけては、そのような選択肢はほとんどありませんでした。時代、技術、教育制度、大部分が封建的な社会であったことや、特殊な経済、政治情勢は、数百年後に必要とされる(そして可能となる)ような分離主義的な改革を、支持していませんでした。主がここで述べておられる批判(すなわち、「あなたがたは、<あのイゼベルという女を>そのなすがままにさせている」)は、テアテラの教会時代全体に向けられたものであり、問題に関与していない真の信者も悪いと解釈すべきではないことを認識することが重要です。組織を内部から変えることは、常に最も困難なタイプの

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

闘いであり、通常は成功しないものです。このような状況下では是正をもたらすには、一般的に、「～から」離れるか、「～の外から」極端な外圧をかけるしか効果的な方法はありません。それゆえ、主は、「イゼベル」と、彼女と靈的姦淫をすることを選ぶすべての人々を「悔い改めないなら」罰する責任を、ご自身に負われるのです。

目に見える教会の指導者たちが、ますます非キリスト教的な性格を強めていることを象徴するために、主が「イゼベル」を選ばれたことは、示唆に富んでいます<深い暗示があります>。イゼベルは異教の外国人で、結婚してイスラエルの女王となりました(列王記上 16 章 31 節)。彼女は死ぬまで、偽りの、そして非常に卑猥な宗教であるバアル崇拝を強力に、力づくで推進し続けました。そのカルトの実際の儀式とそれに伴う主への靈的な不貞という意味で、それらの描写に「売春」、「淫行」、「姦淫」などの言葉が適切です。王妃となったイゼベルは、すぐに夫のアハブ王に、唯一の真の神への礼拝の代わりにこのカルトを採用し、推進するよう説得しました(列王記上 16 章 32-33 節)。イゼベルは、決して正当な支配者ではなかったにもかかわらず、彼女の影響力と権力はやがて、北王国の共同統治者として実質的に機能するようになり、ありとあらゆる方法で自分が選んだ偶像崇拝を助長し、主の預言者たちを排除して主への礼拝に取って代えようと躍起になっていました(列王記上 18 章 4 節, 18 章 13 節)。

この状況は、9 世紀から 12 世紀にかけて、中央集権的で官僚

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

主義的な教会の指導層がますます退廃し、世俗化していったことに当てはまります。この時代の動向は、増大する資源、数、機会を利用して、地方教会の独立を促進し、聖書的キリスト教の純粋性を育むという二つの重要な分野においては<後退する>正反対のものでした。テアテラでは、世俗的な中央当局がさまざまな世俗的手段によって権力を強化・拡大し、それによって地方信徒の独立性と権威を低下させ、他方では人の造り出した儀式や教義という迷信的な体制をますます強化した時代です。新しい改宗者の目覚ましい波を聖典で教育することがより可能になりつつあったまさにその時、誤った伝統、以前の誤った意見、本質的に異教的である迷信が、すべての間違っただ理由のために、実際にますます権威を持つようになったのです。そのようなことがこの時代のキリスト教全体に蔓延していましたが、こうした傾向が最も顕著に見られるのが「帝国」ローマ教会とローマ教皇庁の場合であるということから目をそらすべきではありません³⁵。

³⁵ この時代、「帝政ローマ教会」と「帝政ローマ教皇庁」は真に本領を發揮しました。確かに、このような振る舞いのルーツは前教会時代にあります。例えば、レオ 1 世(同時代の人々は「秘密の西方皇帝」と呼んだ)やグレゴリウス大帝(約 590-640 年)などです。しかし、シャルルマーニュの治世と「神聖ローマ帝国」の樹立に始まり、ローマ教皇庁とローマ教皇庁が、教会と国家の結びつきをますます強める中で、キリスト教全域にその権力を効果的に主張し始めたのは、テアテラの時代でした。偽イジド教令、第 9 代ベネディクト(わずか 12 歳で教皇となり、後に教皇職を銀貨数千ポンドで売却)の特に悪徳な教皇職、教皇ヒルデブランドが神聖ローマ皇帝ヘンリー 4 世を屈辱的に支配するために破門を行ったこと(1076 年)などは、この「イゼベル・トレンド」の顕著な徴候にすぎません。

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

『ヨハネの黙示録』17 章に娼婦のイメージが再び登場することに照らせば、私たちは、今や大部分が悪の道具に転移してしまった教会の指導者と組織を表現するために、主がここでイゼベルを選ばれたことの意味をよく考えるべきでしょう。売春婦は、効果的に商売をするために、魅力的な嘘で厚化粧をして本当の姿を隠す必要があります。たとえば、ヨハネの黙示録 17 章に登場する娼婦は、金、宝石、真珠がきらめく紫と緋色の服を着ています。彼女は黄金の盃を手にしていますが、その中には(彼女が見せようとする魅惑的なイメージに反して)忌まわしい姦淫と汚れがあります。そして、それは常にそうなのです。悪魔の嘘はいつも、可能な限り魅力的な包みで「飾り立てられ」ています。様々なカルト(その終末は死である)の高尚な儀式の中に、最も表面的に美しい儀式、精巧な道具や礼拝の場所、人間学的に興味深い慣習に驚くべきではありません(その背後には、主が言及された白塗りの墓の場合のように、死者の骨だけが横たわっているのです: マタイ 23 章 27 節)。疑うことを知らない犠牲者たちに差し出す杯の内側を覗き込まなければ、欺瞞に満ちた装いの下にある彼らの真の姿の恐ろしく冒瀆的な現実を見ることはできません。

テアテラの時代、特にローマは、それまでの真の信仰者たちの装いを身にまとい、何世紀にもわたって多くの人々が自分に注ぎ込んだ富で身を飾り、自らを特別な、選ばれた「預言者」として描き、元のイゼベルがそうであったように、自分に反対するどんな者に対しても暴力的に扱いました。さらに、この時代には、聖書よりも

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

迷信、被造物(天使や「聖人」)、偶像(「聖遺物」、「彫像」、「祠堂」、「イコン」など)への崇敬と崇拜が著しく高まりました。改革前のすべての教会(そして悲しいことに、改革後の教会の多くも同様です)を特徴づける、手の込んだ儀式や派手な装飾は、イエス・キリストへの純粹で真実な献身を世俗的な、実のところ異教的な形式に置き換えた明らかな兆候です(このような動きは、結果的に、この無意味な儀式や道具を管理する人々の権力と影響力を強固にするのに役立ちました)。このようにイゼベルは、偽りの勝利を収め、偽りの権威を象徴し、キリストの真の信者と対立し、強要の圧力と迷信の誘惑によって、信仰に弱い部分があるようなあらゆる人々をおびき寄せます。イゼベルは、世俗的な権力を意図する非キリスト教的指導者による教会組織と教会の目的の世俗化を象徴しています。つまり、伝道と靈的成長から世俗的な権力と地位の追求へと焦点を完全に移すことであり、古代イスラエル(アハブとイゼベルの時代)でも起こった似非くえせ:まやかしの>教会と国家の強引なまやかしの「結婚」です。これは前時代から始まっていた心変わりであり、以降の教会史全体を(悪い方向に)左右するほど根本的に有害なものです。

さらに、これは純粹に歴史的な扱いから得ることが非常に難しいものでもあります。靈的な意味での方向性の違いは昼と夜の違いほどありますが、世俗的な歴史の弱点は、変わらず人の心を見抜くことができないことにあります。歴史は、「橋の上に二人の男」がいれば、彼らが大体同じ場所にいると物語ることができますが、その人たちが完全に真逆の方向に動いている事は聖書がなけれ

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

ば伝えることはできないでしょう。この弱点は教会史の場合にも当てはまります。例えば、ヒルデブランディア派(Hildebrandia faction)はしばしば教会内の「改革運動」として描かれます。しかし、独身制の施行、聖職者の政治的任命や地位の買収(「シモニー」)に対する闘いは、結局のところ、中央集権的な教会権威を堅固にするという(意図された)全体的な効果をもたらしました。権力は、ある種の虐待を根絶することもあれば、はるかに悪い虐待を永続させるために使われることもあります(社会改革を掲げていたナチスを参照してください)。このセクションの冒頭で取り上げた伝道活動の多くが中央当局の支持を得ていたことは事実かもしれませんが、だからといって、支持者の動機が宣教師の動機と同じくらい純粹であったとは限らないのです。しかし、聖句から明らかなように、この世が偽りの権威に基づいて提供する偽りの代用品でキリストの姿を妨げることは偶像礼拝の本質であり、事実上、創造主ではなく被造物を崇拜しています(エペソ 5 章 5 節; コロサイ 3 章 5 節)。このプロセスを精力的に追求することは、霊的な不誠実の最悪の形態であり、イゼベルのトレードマークそのものです:

わが民は木[偶像]に向かって事を尋ねる。またその[占いの]つえは彼らに事を示す。これは淫行の霊が彼らを迷わしたからである。彼らはその神を捨てて淫行をなした。(ホセア4章12節)

中央集権的で組織化された集団教会が何世紀にもわたって行ってきた善が何であるにせよ、地元の信徒のレベルを超えた権威

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

の拡大(そして必然的な誤った教えの伝播)は、不釣り合いなほど多くの害をもたらしました。というのも、権力を集めること(そしてその背後にある動機)は、一般的に、イエス・キリストとは何の関係もないことですが、悪魔のこの世の土俵で悪魔のゲームをするには、その行動や方針においてそのすべてが関わってきます。したがって、必然的に、(神の言葉や御霊の生活に集中する代わりに)そのような世俗的な追求に従事する、いわゆる「クリスチャン」の個人、派閥、組織は、サタンの世界システムの戦術や方法論に頼るようになるのです。言い換えれば、そのような実践者たちは、自らを「光のしもべ」であるかのように装っているかもしれませんが、実際には、悪魔的な手段によって悪魔的な目的に奉仕しているのです(第二コリント 11 章 13-15 節)。

3. 見よ、わたしはこの女を病の床に投げ入れる。この女と姦淫する者をも、悔い改めて彼女のわざから離れなければ、大きな患難の中に投げ入れる。また、この女の子供たちをも打ち殺そう。こうしてすべての教会は、わたしが人の心の奥底までも探り知る者であることを悟るであろう。そしてわたしは、あなたがたひとりびとりのわざに応じて報いよう。(黙示録2章22-23

節): ここに見られる七つの教会時代へのメッセージにおける艱難期の出来事の予言は、他に例を見ないものです。たとえば、ヒラデルヒヤの人々へのメッセージにも、主は解放を約束しておられますが、恐ろしい時のことが述べられています(黙示録3章10節)。ヒラデルヒヤの人々の忠実な奉仕に対する報いとは正反対に、主はここで、テアテラにいるイゼベルとその従者たちを「大患難」の中に

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

投げ入れると脅しておられます。実際、定冠詞がないことを除けば、ここで用いられているギリシャ語の表現は「大艱難[期]」(*megale thlipsis*: μεγάλη θλίψις, と *he megale thlipsis*: ἡ μεγάλη θλίψις を比較)と同じです。

イゼベルは、指導者とその支持者の側に見える教会内の淫乱の精神を表しています。これらの節から明らかなように、イエス・キリストに対するこのような霊的な不忠実(指導者であれ信者であれ)、私たちの主にとって受け入れられないだけでなく、主から厳しい裁きを受けることとなります。このような行動の源は、表向きはクリスチャンですが、実際にはクリスチャンではない未信者たちによる、目に見える<当時の>教会の内部からの誘惑です³⁶。

21-23節では、主の不快感を招く三者が登場します: 1)「イゼベル」:テアテラの時代の目に見える教会の<当時の>指導者の中で有力な地位にあったサタンのしもべたち、2)「彼女と姦淫する者たち」:この偽りの権威の支持者、幫助者、とりまき、3)「女の子供たち」:この偽りの権威と偽りの教えの極悪な結合の滅びゆく子孫、すなわち、キリストの真の信者ではない「改宗者」たち。「なすがままにさせている者たち」(黙示録2章20節)とは、上で指摘し

³⁶ 獣の世界大の宗教における同様の出来事については、このシリーズの第4部「大艱難」と第5部「再臨とハルマゲドン」をご覧ください。

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

たように、教会時代全体を総称した言葉です。悪を容認することは、どのようなレベルであれ、常に危険です(申命記13章16節)。しかし、悪に積極的に加担することは、常に悲惨なことです。なぜなら、そのような行為は、他人の罪に加担しながら、自分自身の信仰を破壊するからです: イゼベルの「姦淫者」たちは、彼女とともに同じ「[食卓と寝台< κ λ ί ν η クリーネ: 食事の時、寄りかかれる椅子として用いられている。新約聖書では主に病気の時に使われる床>]の長椅子」に投げ入れられています。これは、このサタンの手先との祝祭的でわいせつな交わりに参加することを意味し、そのために彼らは重い代価を払うことになるというものです(イザヤ59章2節)。

私たちは、主がテアテラの時代のあらゆる集団の「欲望と心」をよくご存じであったという事実には大きな慰めを得ることができます(黙示録 2 章 23 節)。そして、今もそうです。主は常に人の行いに応じて報われるので、墮落した指導者たちは、その邪悪な計画を助長したすべての者たちとともに挫折し、最終的には排除され、その「子供たち」、つまり、この偽りの家族に入れられた者たちは「死に滅ぼされます< 英直訳 >」(23 節)。³⁷ そして、真に主を信じ、

³⁷ 次の時代の「黒死病」(14 世紀半ば)の間に、多くの名目上の「クリスチャン」が広く排除されたことは、この預言の部分的な成就であり、多くの枯れ木が取り除かれ、霊的な再生の機会(この機会とは、結局のところ、ヒラデルヒヤの時代にまで待たされることになるのですが)が与えられたとも捉えることができると思います。

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

主に忠実であり続ける私たちは、救いだけでなく、そのような悪魔的な反対勢力の結果として今私たちが置かれているかもしれない圧力と「比べものにならない」究極的な報酬を期待することができます(ローマ 8 章 18 節; 第二コリント 4 章 17 節)。

4. 「また、テアテラにいるほかの人たちで、まだあの女の教を受けておらず、サタンの、いわゆる「深み」を知らないあなたがたに言う。わたしは別にほかの重荷を、あなたがたに負わせることはしない。ただ、わたしが来る時まで、自分の持っているものを堅く保っていなさい。(黙示録2章24-25節): ここでまず注目すべきことは、「教理」、すなわち前述したイゼベルの「教え」と「奥義」は同じものであるということです。後者の要素に関する「深み」とは、偽預言者たちが自分たちの教義につける名前です。彼らは自分たちの教えを「サタンの奥義」とは呼びません。「サタンの」という修飾語は、彼らが宣伝している偽りの「秘儀」の本性を露呈してしまうために、主によって付け加えられたものです³⁸。目に

³⁸ 神の「奥義」は、神のみが知っているか、神と神の真理を本当に知りたく願うすべての人のために、神によって明るみに出されるものであることを覚えておくことが重要です(マタイ 13 章 11 節; 第一コリント 2 章 7 節; 第一コリント 15 章 51 節参照)。キリストの「奥義」、そして異邦人信者が神の民イスラエルと一つになることは、本質的に福音と同義です(『悪魔の反乱』参照: この奥義は、まさに「屋根の上から叫ばれ」(ルカ 12 章 3 節)、終わりが来る前に、多くの壮大な方法で世界中に宣べ伝えられるでしょう(マタイ 24 章 14 節; 黙示録 14 章 6 節)。

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

見える<当時の>教会のますます世俗的な(したがって悪魔的な)「イゼベル」指導部の教義は、テアテラの信者たちに「性的に不道徳な行為をし、偶像のいけにえの食物を食べるように」「教えている」と先に主が説明されました。つまり、これまで見てきたように、キリストに従うのではなく、この世の偽りの偶像(偽預言者たちとその真の主人である悪魔が差し出した代用品)に従うという、霊的に不誠実な道を選ぶことです。これらの「教え」、「教理」、「奥義」はすべて、テアテラの時代に見られた教会の権力欲の強い指導者たちに、彼らの偽りの権威を正当化するために作られた嘘、偽りの儀式、でっち上げられた人間の教義が複雑に絡み合っていることを表しています。

これは理解すべき非常に重要な概念であり、クリスチャンは誰も理解しないでいるべきではありません。なぜなら、ある組織、グループ、または個人が、自分たちの権威と教えの根拠を聖書にあると主張するなら、それを検証したり、反論するのは容易なことだからです。聖書が認めていない、あるいは聖書が非難している教え、実践、儀式、行動が存在すれば、その主張は、否が応でも取り除けられてしまいます。このテストによって十分理にかなった根拠のもとに疑わしいと感じさえするなら、それは個々の信者が遠ざかり、教えられていることや行われていることが、神の御言葉に沿ったものであるとより確信できる場所を見つけるのに十分な理由となります(この点に関して下す決断は、私たち全員に責任があるからです:「聖書を読む: カルトからの保護」参照)。組織、グループ、個人が秘密や神秘的な権威を主張するとき、検証不可能な伝統、

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

聖書に勝る個人的解釈、「靈感」や感情を権威の根拠とするとき、信者は直ちに注意しなければなりません。というのも、たとえ教えられていることや行われていることが完全に反神的なものでなかったとしても、このような誤ったルールに従っている場合、信者にとって、提示されている個々の教義の正誤を確かめる方法はまったくないからです。それはまさに、そのような偽預言者の権威を確立するために教えられ、利用されているものにどっぷりはまった者だけが知ることでできる「謎」であり、(彼らの欺瞞的な言い方をすれば)「深みく深いこと」だからです。このような秘密情報、根拠のない伝統、指導者個人の「間違ふことはないという」絶対性や靈感への依存は、太古の昔からカルトの特徴でした。それは、1世紀にテアテラの地域の教会の悩みとなっていたグノーシス主義カルトにも当てはまり、歴史的に目に見える教会のテアテラ時代の虚飾的で中央集権的な組織が増えていったことにも当てはまり、そして今日の多くの「宗教」組織やカルトにも当てはまります。聖書の権威が取り除かれたなら、この地上にはそのような個人や集団に責任を負わせることのできる権威は存在しません。現世でも来世でも、神の御名を用いて欺くすべての者の責任を問うことができるのは、神のおかげです！上記の 21-23 節で、イゼベルとその姦淫者たち、そしてその子供たちを裁く責任を主ご自身が負われると言っておられるのは、まさにこのためです。

とにかく、イゼベルを「なすがままにさせている」ことが、テアテラの教会時代に対する指摘であったにもかかわらず、主はここで(その教会の中にいる真の信者たちに向かって)、主に仕えることは

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

個々のクリスチャンに与えられた責任であり、私たちの第一の責任は十字架を負って毎日主に従うことであると強調しておられます(ルカ 9 章 23 節)。各個人の敬虔さと各個人の成長がなければ、神のみこころの範囲内で活動していない組織や個人を改革しようとしても、無駄なことです(マタイ 7 章 3-5 節)。私たちが本当に神に従い、知識、聖化、実を結ぶことにおいて成長しているのなら、神は私たちに「別に他の重荷を負わせることはない」のです(黙示録 2 章 24 節)。これが「堅く守る」ことの本質であり、一方では継続的な成長と奉仕の忍耐であり、他方ではすべての悪から離れることなのです(第二ヨハネ 1 章 8 節; 第二ペテロ 1 章 10 節参照)。

あらゆる面で主であり救い主であられる方を喜ばせようとしているクリスチャンにとって、「イゼベル」が売り込んでいるような偽りの宗教は、最も危険なタイプの悪の一つです。というのも、偽のシステムが魅力的で、興味深く、善良で、「深みのある」ものであるように(外から)見せるためには、常に多くの巧妙さと努力が費やされているからです。しかし、その複雑さはクモの巣、その外見の美しさは白塗りの墓、その魅力的な特徴は売春婦の魅力のようなものです。どんなに美しい建物、儀式、道具、彫像、法衣などがあろうとも、私たちがここにいるのは、質素な服装で、戸外で、言葉だけでシンプルに教えてくださったキリストを礼拝するためなのです。聖人や使徒や牧師や教皇やマリアや天使がどんなに魅力的であっても、私たちは神とその御子だけを礼拝するためにここにいるのです。奇跡的な賜物、神秘的な教え、超自然的な出来事や顕現がどんなに楽しいものであっても、私たちは神の御言葉の真理を

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

信じ、御言葉を通して霊とまことをもって神を礼拝するためにここにいます。イエス・キリストに従うために、この原則、すなわち神の聖なる聖書の法則や「正典」を実践する者にとっては、まさに「他の重荷はない」のです。

キリストの約束された報酬：

1. 「勝利を得る者、わたしのわざを最後まで持ち続ける者には、諸国民を支配する権威を授ける。彼は鉄のつえをもって、ちょうど土の器を砕くように、彼らを治めるであろう。それは、わたし自身が父から権威を受けて治めるのと同様である。」(黙示録2章26-27節)：詩篇2篇を引用することで、私たちの主は、イゼベルの偽りの権威と、十字架での勝利によって勝ち取られた主に属する真の権威とを意図的に対比させています(ルカ10章18節; ヨハネ16章33節,19章30節; コロサイ2章15節; 黙示録5章5節)。見せかけ権威から発せられる見せかけのミステリーの呪縛に抵抗し、その代わりにイエス・キリストの真の権威と神の御言葉の真の権威を堅持する人々には、私たちの主イエス・キリストは、真理に逆らう者がすべて即座に打ち砕かれることになる千年王国において、真の権威をもって共に治める機会を約束しておられます。悪魔の世界の中で、どこからでも私たちの耳と目に飛び込んでくる嘘八百に耐えなければならないのは、苦痛なことかもしれません。しかし、もし私たちが真理である主に忠実であり続けるなら、将来、正しく真実なものが、欺瞞的で偽りのものすべてに打ち勝つ勝利を、喜びをもって待ち望むことができるだけでなく、その勝

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

利の実現を共にすることさえできるのです。

2.「わたしはまた、彼に明けの明星を与える」(黙示録2章28節): 「明けの明星」とは、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの御姿を指しています(第二ペテロ1章19節; 黙示録22章16節; 民数記24章17節; イザヤ9章1-2節, 42章6節, 49章6節; マタイ2章2節, 2章9節, 4章16節; ルカ2章30-32節; ヨハネ1章4-5節, 8章12節, 9章5節参照)。この称号には二つの象徴があります。一つは、主の再臨の時、「光も闇もない」超自然的な日の中で(ゼカリヤ14章6-7節; イザヤ13章9-13節, 34章4節, 60章1-2節; エゼキエル32章7-10節; ヨエル2章2節, 2章10節, 2章31節; 3章15節; ゼパニア1章15-18節; マタイ24章29節; マルコ13章24-25節; 使徒行伝2章17-21節; 黙示録6章12-13節)、再臨の時には最も明るい星の光のように輝き出し(イザヤ60章1-3節; マタイ24章29-30節; 第二ペテロ1章19節; 黙示録1章7節)、患難の長い暗夜の後に来る祝福の朝の真の先駆けになるということです(参照:へブル1章3節)³⁹。もう一つは、イエスはその人間性において< 訳者註: 人間としての完全な業を終えられたゆえにルシファーの非難の口を封じられ、人間の長子となられたイエスが世界を治める権利を持たれた >、被造世界の以前の長であった「ルシファー」(「光を運ぶ者」の意:イザヤ14章12節)に取って代わるということです。ルシファーは神の

³⁹ 光対闇、昼対夜という善対悪を表すこのテーマは、聖書の中にしばしば見られます(1 テサ 5:2-8 参照)。このテーマの詳細については、悪魔の反乱シリーズの第2部「創世記のギャップ」のII.2節を参照してください。

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

光を反映するように創造されていましたが、その代わりに闇を選びました。

(エペソ 6 章 12 節; コロサイ 1 章 13 節; ユダ 1 章 6 節, 1 章 13 節)

40

信仰の戦いに勝利し、その信仰を保ったまま来世に入る者は皆、イエスの花嫁である教会の一員として、イエスと永遠に共に生き、その結果、私たちが愛する方、私たちのために死んでくださった方との永遠の親密な関係を永遠に楽しみながら、明けの星であるイエスを「持つ」こととなります。共に治めるという約束が、私たちの来たるべき一時的な報酬(千年王国時代に成就)を語っているように、この「明けの星」の約束は、私たちの永遠の報酬、具体的には、私たちを買い取ってくださった方、私たちの主であり救い主であるイエス・キリストと、永遠に親密な交わりを持つという計り知れない喜びを語っているのです。「イゼベル」は、魅力的ですが、欺瞞に満ちた約束をして、弱い立場のクリスチャンに訴える偽りの権威として主によって選ばれた人物であり、俗欲な権力との妥協、有名になることや世俗に身売りすることを象徴しています。しかし、そのような偽りの代用品を拒否し、代わりに私たちの真の伴侶であるイエス・キリストにすぎるすべての人々にとって、主の力と名声に永遠に与り、主が私たちをご自身の花嫁として永遠に受け入れてく

⁴⁰ 悪魔の反乱シリーズ第 1 部「サタンの反乱と墮落」III.a 項「明けの星」参照。

4.テアテラ:妥協の時代(黙示録 2 章 18-29 節)

ださることは、悪魔の世界体制の偽預言者たちによって提供される「ポタージュの混乱<エサウが長子の権利と引き換えに得た一杯の食事:ヘブル 12 章 16 節>」とは(それらが現在どんなに魅力的に見えても)決して比べものにならないのです。

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

5. サルデス：墮落の時代(1162 年～1522 年の 360 年間)

黙示録 3 章 1-6 節

(1)サルデスにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『神の七つの霊と七つの星とを持つたが、次のように言われる。わたしはあなたのわざを知っている。すなわち、あなたは、生きているというのは名だけで、実は死んでいる。(2) 目をさまして、死にかけている残りの者たちを力づけなさい。わたしは、あなたのわざが、わたしの神のみまえに完全であるとは見ていない。(3) だから、あなたが、どのようにして受けたか、また聞いたかを思い起して、それを守りとおし、かつ悔い改めなさい。もし目をさましていないなら、わたしは盗人のように来るであろう。どんな時にあなたのところに来るか、あなたには決してわからない。(4) しかし、サルデスにはその衣を汚さない人が、数人いる。彼らは白い衣を着て、わたしと共に歩み続けるであろう。彼らは、それにふさわしい者である。(5) 勝利を得る者は、このように白い衣を着せられるのである。わたしは、その名をいのちの書から消すようなことを、決してしない。また、わたしの父と御使たちの前で、その名を言いあらわそう。(6) 耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい』。(黙示録3章1-6節)

5.サルデス:墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

それ以前の四つの時代とは対照的に、サルデスの時代が始まると、目に見える教会の組織**全体**が、「死んでいる」としか言いようのないほど深刻に腐敗していることがわかります。この状態は、その語源にも反映されています。サルデス」という名前は、この歴史的都市の名前の由来である有名な赤みがかった宝石、すなわちサルディウス(またはサルド)から来ています。この赤みがかった色は、罪深さを連想させます。(イザヤ 1 章 18 節; 黙示録 12 章 3 節, 17 章 3-4 節)。そして、この宝石に相当するヘブル語が「オデム *odhem*(אדמה)」であることは、何より興味深いです。これは、ヤコブの兄<エサウ>の別名である「エドム」と事実上同じであり、エサウ/エドムが、神の民と対照的な異教徒の国々を表す典型的な預言的象徴である(このシリーズの第 1 部で見たように)ことを考えると、これはより意味を持つものとなります。つまり、一方では、サルデスは世から見れば魅力的で輝く宝石かもしれませんが、主から見れば、岩の上に建てられた「生きた石」(第一ペテロ 2 章 4-5 節)であるどころか、死んだ石であり、その赤い色が本当の霊的狀態を物語っているのです。一方、サルデスもまた、エサウのように、生まれながらの輝かしい権利を持っていたにもかかわらず、真の霊的祝福を他に譲り渡し、「(赤い)ポタージュ」の遺産を選び(創世記 25 章 30 節; マラキ 1 章 2-3 節; ローマ 9 章 10-13 節参照)、真の神の民に、サルデスとその異教的慣習から離れることを強いています(ヤコブが不信仰なエサウから離れることを余儀なくされたように)。

世俗的な歴史家の間でさえ、(サルデスの時代にまたがる)「後

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

期」または「盛期」中世は、目に見える教会の靈性が著しく後退した時代であると一般に認識されています。12 世紀半ばから 16 世紀初頭にかけては、とりわけ、西方における帝政ローマ教皇庁の勝利、東西間の「大分裂」、学問における「スコラ派」(本質的には、正当な聖書研究に対する哲学の勝利)の支配、異端審問(15 世紀のスペイン異端審問に頂点に達する)、ローマ単一支配に対抗するさまざまな「宗派」に対する力づくの弾圧、十字軍(教会の名の下に行われた恥ずべき政治的権力誇示)、そして間違っただけの教義や異教的慣習を「正典法」として成文化し制度化しました。そしてこれは、普遍的な教皇支配の勝利を象徴するもので、教会権力の道具としてそれまでの何世紀にもわたり根付いてしまった、反-聖書の伝統や教会の死んだような教義にではなく、聖典に真理を求めらることを選ぶあらゆる人々を効果的に迫害し、抹殺するための処方箋となったのです。

したがって、サルデスは、千年以上前に始まった目に見える教会の墮落の第三段階を象徴しています。ペルガモの教会組織への浸透から始まり、テアテラでその覇権を握るようになり、サルデスの時代には、事実上、目に見える教会全体に浸透し、キリストに従う本物の信者の残りの者達を除けば、いわゆるキリスト教会にはほとんど「キリスト教的」なものはありませんでした。というのも、この歴史的岐路において、生ける御言葉であるイエスは礼拝の主要な対象ではなく(彫像、聖人、儀式などは、救いはイエスにのみ忠実に従うことによってもたらされるという事実を、事実上覆い隠していた)、書かれた御言葉であるイエスの教えは信仰と実践の主

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

要な基準ではなかったからです(聖書は、位階の権威とすでに成文化されたしきたりに比べ、遠い存在となっていました)。サルデスの時代の終わりには、世俗的な「見える教会」と霊的な「現実の教会」は、どこから見ても、二つの別々の存在となり、後者を前者から完全に分離し、新しい「見える教会」の全面的な再構成と「改革」が、地上の真の信仰共同体、すなわち、私たちの主イエス・キリストとその教え、聖なる聖典を真に信じ、それに従う人々から成る共同体を維持するために必要となったと言っても過言ではありません(ヨハネ 14 章 23-24 節参照)。

人の造り上げたすべての組織(そして、この研究で簡潔に描いた教会の歴史)に内在する根本的な弱点を考えれば、このような事態の展開は驚くべきことではありません。人間の組織は、その最も弱い部分と同じ強さしか持たないからです。(信仰、教義、実践の)誤りは「しきたり」によって記念とされる傾向がありますが、すべての本物のキリスト教集団の根底に元々ある生き生きとした霊的実在は、後世に遺すことはおろか、数値化して表現することも、制度化することも困難です。したがって、過去の成功にかかわらず、サルデスの時代には、特に西側では、ますます一枚岩になり、中央集権化され、組織化された教会は、神から遠く離れ、年を追うごとに、ますます遠くへ流れていってしまいました。もはや問題は、新たに「改宗」した異教徒の習慣や信仰を受け入れるということだけではなくなっていました。もはや問題は、完全に世俗的な視点、議題、方法論を持つ権力欲の強い一派による中央指導部の支配だけではありませんでした。サルデスの時代までに、この腐敗は、

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

(同様に信仰を通して真のキリストの体に入ることをしていない)組織への新規参入者から始まり、あらゆる手段によって達成され、行使される世俗的な権力を求める一握りの野心家たちによって<腐敗が、致命的な>「頭」にまで広がったのです。要するに、地上のキリスト教会であったものの目に見える組織は、この時には本質的に死んでいたのです。この組織が真のキリストの体の機能的な一部として存続するためには、根本的な手術が必要だったのです。

<サルデスに対する>キリストの自己描写:

1. 「神の七つの霊と七つの星とを持つかたが、次のように言われる。」：先に(黙示録1章20節)主御自身の解釈が述べられていたように、七つの星は七つの教会の七人の天使であり、イエス・キリストの教会を導くために、イエス・キリストの命令を実行する超自然的な管理者のことです。⁴¹ ヨハネの黙示録1章4節で最初に言及された七つの霊はその聖句の検証においてわかったように、キリストの教会が機能するための力を与える方である聖霊なる神を指しています⁴²。これらは、どちらも同じこと、すなわち、私たちの主が歴史を完全に支配し、主の体である教会に関するすべてのことにおいて全権を握っていることを語っています。いかなる人間の失敗も、いかなる悪魔の反対も、いかなる歴史的出来事も、主の

⁴¹ このシリーズの第1部第5項「7つの教会の天使たち」を参照してください。

⁴² このシリーズの第1部第5節「7つの霊」をご覧ください。

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

からだの完成と、そのために定められたすべての達成を挫くことはできません。サルデスの時代に目に見える教会組織に属している人々の大多数が、あるべきようにキリストに従っていなかったり、キリストにまったく忠実ではなかったという事実も、決して神の計画を挫くことはできないし、今後も挫くことはありません。この自己描写は、すべての人、特に、教会においてある程度の主権を持っていると思いついでいる指導的立場にあるすべての人、そして、自分たちの特定の組織が真の権威の宝庫であると信じているすべての人に、教会の頭であるのはイエス・キリストであることを思い起こさせるものです。イエス・キリストこそ唯一の真の権威であり、究極の権威です。超越的に、完全にそうなのです。さらに、世界の創造主であり、人類の歴史に対する御父の計画の監督者として、御自身の体である教会が、まさに適切な時に、まさに適切な方法で、その運命的な完全さと完成を達成するのを妨げるようなことが起こる可能性は少しもないのです。

キリストの特別なメッセージ：

1. 「わたしはあなたのわざを知っている。すなわち、あなたは、生きているというのは名だけで、実は死んでいる」：この言葉は、その言葉の意味どおりに受け取るべきです。すなわち、サルデスの時代には、目に見える教会組織は完全に死んでいました。この時代の目に見える教会は、「クリスチャン」と称し、唯一の真の神の生きた代理人であると公言していながら、この時には、まった

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

く主イエス・キリストの真の証人などではありませんでした。それどころか、主の生きておられた時代のパリサイ派のように、迷信や誤った教えを体現するようになり、天の御国に入りたいと願う多くの人々に対して、救いの「扉を閉ざして」しまったのです(マタイ23章13-14節参照)。このように、「クリスチャン」という、文字通り「キリスト」に属する[人]を意味する輝かしい称号を使うだけでは、実際にはクリスチャンとは言えないことに注意することが重要です。サルデスの目に見える教会の階級層と大多数の信徒は、自分たちのことを「クリスチャン」だと言っている、主は、真の霊的な意味では、彼らは「死んでいる」と言っておられるのです。つまり、サルデスの信徒たちの大部分は、永遠の命に関してキリストに信仰を持っておらず、生涯キリストに従っていないのです。彼らは信仰と弟子訓練の代わりに、目に見える教会組織の課した暗記、儀式、人間的な教義、迷信、表面的なものを代用していました。彼らは、先代のクリスチャンの名誉を、自分のものとして受け入れながら、キリストの福音の真理の光を完全に遮ってしまうほど、これらの前の時代の誤った伝統を巧妙なものにし、強調し、神聖化しました(第二コリント4章4節参照)。真のキリスト信者の数を上回るほどの自称「クリスチャン」の未信者がいることが、サルデスの時代から現代に至るまで続いている問題の傾向であり、艱難期の前半と後半にそれぞれ起こると予測されている「大背教」と「大迫害」に至るまで、またそうした時代を通して続くことになるでしょう。

2. 「目をさまして、死にかけている残りの者たちを力づけ

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

なさい。わたしは、あなたのわざが、わたしの神のみまえに完全であるとは見ていない。だから、あなたが、どのようにして受けたか、また聞いたかを思い起して、それを守りとおし、かつ悔い改めなさい…」(黙示録 3章2節-3節前半)：私たちの主イエス・キリストが、ここでサルデスの時代の教会に対して発せられた悔い改めへの呼びかけは、彼らの働きの質の低さに基づいていることを明確にしています(働きの欠如は、彼らの信仰の欠如の紛れもない証拠です。ヤコブ2章14-26節参照)。⁴³ イエスはそれゆえ、彼らに「目を覚ましなさい」、霊的な意味で生き返るように、すなわち、自分たちの行い、儀式、人間的な教えに信仰を置くのを捨てて、代わりに、唯一の道、唯一の真理、唯一の命である方のもとに心を尽くして戻り(ヨハネ14章6節)、真のぶどうの木に再び接ぎ木され、主を通して、主のために、再び本物の実を結ぶようにと言われるのです(ヨハネ15章1-8節)。

サルデスの人たちは、自分たちに伝えられてきたことに基づいて、神の御言葉と御言葉なる神をよく知ることができていました(そしてそうであったはずでした)。彼らは、神への真の信仰に献身し、真に神に従うことができた(はずでした)。これらの節によれば、彼らは「死にかけて」いて力づけられる必要がありましたが、テアテラの前の時代から本物のキリスト教を「受けた」のです。読者は過去

⁴³ 信仰と行いの問題については、特にペテロの手紙 # 14「信仰と霊的成長」、# 24「信仰の力学」をご覧ください。

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

形(ギリシャ語の未完了過去 imperfect tense)の時制が、適当にあしらわれている訳があることに気づくと思いますが、ここでのイエスの言葉は極めて正確であり、時制に注意することが重要です。サルデスが真理を「聞いた」とき、つまり、彼らが「受けた」もの(すなわち、聖書と、イエスへの信仰と弟子としての聖書のメッセージ)、これらの「もの」をまだ手にしていたとき、当時の教会の目に見える組織は死に瀕していたということです。かつては原始的で真にカトリックなく普遍的な組織であった教会は、誤った教えや伝統が集積し、官僚主義的、中央集権的、世俗的な階層社会がますます堅固になり、聖典やイエス・キリストの真の礼拝よりも儀式、典礼、お飾り、華やかさを重視する傾向が加速していたため、「死にかけていた」のです。したがって、この「死にかけている」という状態は、サルデスの時代の始まりの状況を表しているのです。

残念なことに、サルデスは、良いこと(前時代のテアテラの伝道活動)を「強化」し、悪いこと(権力欲の強い世俗的な指導者や目に見える教会の異教主義の拡大)を排除する代わりに、逆の方向に進み、非聖書的、反聖書的な慣行への退行的な焦点を強化し、同時に、忠実な働きによって実をもたらすということにおいて、主の期待に応えることができませんでした(「わたしは、あなたのわざが、わたしの神のみまえに完全であるとは見ていない。」。これは当然とも言えることでした。真の霊的生命がなく、いわゆる「教会」が実際に霊的に死んでいるところでは、神のための真の働きはあり得ないからです。私たちの主イエス・キリストのためになされるすべての真の「働き」は、必然的に、主を通して、主にあって、主

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

のためになされなければならず、主から離れては真の実りはあり得ないのです：

わたしに**つながって**いなさい。そうすれば、わたしはあなたがたと**つながって**いよう。枝がぶどうの木につながっていなければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしに**つながって**いなければ[実を結ぶ]ことができない。(ヨハネ15章4節)

神の御霊を離れ、肉の力によって、偽りの動機から、偽りの装いで行われることは、人の間では善く思われても、それは通用しません。神はご自身の全体的な計画の達成のために、そのような努力を用いることを選ばれるかもしれませんが(ルカ 9 章 50 節; ピリピ 1 章 15-18 節参照)、しかし、だからといって、それらを生み出す人々が信者であるとか、天の御国で信者の分け前を受けられるということにはなりません。(例えば、イザヤ 45 章 1-4 節のクロス王について主が語られたように：「あなたはわたしを認めなかったが、わたしはあなたを強くしよう」<英語直訳>)。

3. 「もし目をさましていないなら、わたしは盗人のように来るであろう。どんな時にあなたのところに来るか、あなたには決してわからない：眠りは、聖書の中でしばしば死のたとえとして用いられています。イエスは<実は死んでいた>ラザロが「眠っている」と言いました(ヨハネ11章11-14節)。ここでは「居眠りしているサルデス」に目覚めるように命じておられますが、この文脈での眠り

5.サルデス:墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

は、肉体的なものではなく、霊的な死です(黙示録3章1節参照:「生きているというのは名だけで、実は死んでいる」)。この声明は、目に見える教会全体に当てはまり、旧約の預言者たちを通して語られているイスラエル全体に対する主の評価同様、今取り上げているこの教会の「メンバー」である個人の大多数は、バックスライドしているか、完全に背教者であることを示しています。

泥棒が無防備な家々を襲うような「時」は、(少なくとも古代世界では)必ず夜です。夜は眠りと休息の時間ですが、ここで言っているたとえば、もちろん善悪の価値観が逆転して表現されており、平穏な「眠りにについている人」に非があるのであって、聖書的な意味では、夜は安息よりもむしろ危険な時を示します。光は真理を表し(ヨハネ 3 章 20 節, 14 章 6 節; エペソ 5 章 8-14 節)、それがないと信者は霊的に弱くなります。夜の暗闇が眠りを誘うように、真理の光の欠如は霊的な眠気を誘います。この世の暗闇に直面しても、目を覚まし、霊的に「鋭敏な」状態であることの重要性を強調するこの例えは、聖書でよく使われるもので、来たる艱難期の暗黒の時代に最も重大なことになってくる課題です(マタイ 24 章 42-44 節, 25 章 1-13 節; マルコ 13 章 33-37 節; ルカ 12 章 35-40 節; エペソ 5 章 14 節; 第一テサロニケ 5 章 1-10 節; 黙示録 16 章 15 節参照)。

主がここで警告されている「来る」とは、教会のサルデス時代の全般的な神の審査とそれに続く裁きのことです(それは目に見え

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

る教会が造り直されることによって終了します)。しかし、無自覚な霊的墮落に対する予期せぬ神の裁き、あるいは主がやって「来」られるという原則は、あらゆる時代、あらゆる組織、あらゆる個人に当てはまるものです。個人的なレベルでは、人は自分の死の日や時間を知りません。私たちの主の教えは、神の視点から見て、神が与えてくださった機会を無駄にした極めて愚かな人々の例に満ちており、神が最後にやって「来」られて、初めてその愚かさに気づいたのです(特に「金持ちとラザロ」の例を参照してください)：ルカ 16 章 19-31 節、「金持ちの愚か者のたとえ」：ルカ 12 章 13-21 節、「不正な執事」：ルカ 12 章 42-48 節；また、「あなた<主>の訪れの時」を認識できなかったエルサレムの悲劇的な失敗(ルカ 19 章 41-44 節とルカ 22 章 23 節を比較)も参照のこと。

4. 「しかし、サルデスにはその衣を汚さない人が、数人いる。彼らは白い衣を着て、わたしと共に歩みを続けるであろう。彼らは、それにふさわしい者である。」(黙示録3章4節)：教会の以前の時代の状況と、ここサルデスでの状況との対比は歴然としています。外部からの危険や内部からの悪質な影響から逃れるどころか、(ここで言及されている「少数の」人々を除いて)今や目に見える教会自体が、ほとんど不信仰者と背信者で占められているからです。それゆえ、この問題に対する主の解決策は、目に見える教会組織の再編成ではなく、むしろ、このかつての誇り高き団体の中から、真に信仰深い残りの者たちの救出であり、次のヒラデルヒヤの時代に「教会」を再建することなのです。真にイエス・キリストに従っているこの残りの者たちが、「その衣服を汚していない」とい

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

う記述は、少数の忠実な者たちの聖別された生活を指しており、真の靈性と真理の真の追求の必然的な特徴です(第一テサロニケ4章3節)。主が私たちに歩ませようとされる道を真剣に歩もうとするこの性質は、聖別されていない行動によって評判を汚す多数派とは対照的です(ゼカリヤ3章3-4節参照、また、黙示録16章15節の「私たちの衣を守りなさい<英直訳>」という命令と比較してください)。信者である私たちは皆、例外も条件もなく、イエス・キリストの血潮によって聖別された立場にあります(黙示録7章14節; 第一コリント1章30節参照)。しかし、私たちはまた、それ<血潮による聖別>が自分にとって意味あるものとして生き、この地上にいる間、聖化を経験し、聖なる歩みを続けるよう求められています(ヘブル12章14節)。このような適切かつ必要な方法で主に従った結果、私たちが今原理的に持ち、待ち望んでいる永遠の命、すなわち、私たちの肉体が復活によって贖われるその日に、完全に経験する究極的な聖化(ローマ6章22節)が将来実現するのです⁴⁴。私たちの永遠の、究極的に聖化された状態は、このように私たちの主イエスと共に「白い衣を着て歩」み(黙示録19章14節; 黙示録6章11節も参照のこと)、私たちの将来の衣服の色と質は、その時の私たちの義、すなわち、イエス・キリストを信じる信仰によって達成され、私たちの主にふさわしく従う中で確証され、最終的に、主と共に永遠に私たちのものとなる永遠の義の中でひとまわりして戻ってくる義を表しているのです(黙示録19章7-8節)。

⁴⁴ ペテロの手紙シリーズ # 13「聖化」参照。

5.サルデス:墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

キリストの約束された報酬：

1. 「勝利を得る者は、このように白い衣を着せられるのである。」(黙示録3章5節前半)：聖潔の白い衣は、罪深いこの世に隷属するサルデスの「赤」とは明らかに対照的です。上に示したように、私たちの将来の白い衣について言われていることは、私たちの復活によって実現する永遠のいのち(永遠のいのちとく白い衣)は本質的に同じ意味で、「来たるべき世において」完全で素晴らしい新しいからだで永遠に生きることを描写しています：マルコ10章30節；ルカ18章30節；ダニエル12章1-2節；ヨハネ3章16節；ローマ2章7節；第二コリント5章1節参照)⁴⁵ 私たちの永遠の命、つまり私たちの主と共にパラダイスのような境遇で永遠に続く命という現実は、イエス・キリストの福音の基本的な部分です(第一コリント15章1-19節)。クリスチャンとして、イエスへの信仰を表明する者として、私たちはあらゆる機会をとらえて、この崇高な事実を自分自身にも他の人々にも思い起こさせるべきです。私たちにとって、死は恐れるべきものではありません。むしろ、死は今よりも遥かに良い境遇への移行であり、その最たるものが、私たちの祝福された主との永遠の再会と結合を体験することなのです(ピリピ1章21-26節；第二コリント5章1-10節参照)。そして、私たちは永遠に生きるだけでなく、罪によって汚されることのない完全なからだを持ち、

⁴⁵ 復活のテーマについては、このシリーズの第5部第5項「小羊の花嫁の復活」で詳しく取り上げています。ペテロの手紙シリーズ#20「復活」も参照してください。

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

もはやこの世の苦しみに悩まされることもないのです(イザヤ25章8節, 49章10節; 黙示録7章16節; 第一コリント15章12-58節参照)。さらに、ここで言及されている白い衣は、来たるべきその時の不思議のもう一つのしるしです。私たちは、「このように」主のように、輝く白の完全な永遠の衣に身を包み、「主と共に」歩むのです(参照:ダニエル7章9節; マタイ17章2節; マルコ9章3節; ルカ9章29節; 黙示録6章11節, 7章9-14節, 19章14節; マタイ28章3節; マルコ16章5節; 黙示録4章4節)。(パウロがテモテに「永遠のいのちにしがみつきなさい。あなたは、そのために召され…<NKJV直訳>」:第一テモテ6章12節と命じているのとは対照的に)私たち信者は、自分たちの永遠の命を過小評価する傾向があります。たとえ私たちが、この不完全な世界で、現在の困難な状況下で、何とか健康を維持して永遠に生きることを保証されたとしたら、それは不信仰な世界にとって提供できる計り知れない恩恵の富でしょう。しかし、私たちはそれ以上のもの、完全な世界で完全な肉体、そして「白く」<輝く>私たちの主イエス・キリストと永遠に共に歩む完全な永遠の命を約束されているのです。

2. 「わたしは、その名をいのちの書から消すようなことを、決してしない。」(黙示録3章5節)：ここで言及されている書は、聖書の中で「あなたの(神の)書」(出エジプト32章32-33節)、「あの書」(ダニエル12章1節)、「命の書」(詩篇69篇28節; 黙示録3章5節, 13章8節, 17章8節, 20章12節, 20章15節)、「小羊の命の書」(黙示録21章27節)と様々な題名が付けられており、主は、私たちの

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

名前が「天に記されている」(ルカ10章20節)ことを少なくとも一度言われました。これらすべての節が示すように、神は、イエス・キリストを信じる信仰によって、不信心者の最後の審判(第二の死:黙示録20章6節; 20章11-15節; 使徒行伝24章25節; ローマ2章5-6節も参照のこと)から免れられるすべての人の名前を記した記録の書を天に保管されています。⁴⁶ もちろん、信者は「肉体においてした行い<新改訳IV第二コリント5章10節>」(第二コリント5章10節; 第一コリント3章12-15節; ローマ14章10節参照)に基づいてイエス・キリストに評価されますが、(たとえ、私たちの「行い」の多くが受け入れられないとしても)これは不信者の最後の審判とははるかに異なる問題です。キリストへの信仰を保ちながらこの世を全うする私たちは、「死からのちへ」(ヨハネ5章24-30節; ヨハネ3章18節と第一ヨハネ3章14節も参照)移ったのですから、「裁きに入ることはない」のです。その事実は、私たちの救いの確かで永続的な記録である「いのちの書」に、私たちの名前が記されていることからわかります(ダニエル12章1節; ルカ10章20節; ピリピ4章3節)。しかし、その書物から私たちの名前が消えることは、確実な刑の宣告を意味します(黙示録20章12節, 20章15節, 21章27節)。それゆえ、サルデスの真の信仰者たちに対する、彼らの名を「消すようなことを、決してしない」というこの約束は、多くの不信仰と墮

⁴⁶ すべての裁きはイエス・キリストに委ねられ、私たちの主イエス・キリストは生きている者と死んだ者の裁き主です(ヨハネ5章22-27節; 使徒10章42節, 17章31節; ローマ14章9-12節; 第二テモテ4章1節; 第一ペテロ4章5節)。

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

落のただ中であって、慰めとなる個人的な安心感を与えるものであると同時に、彼らがクリスチャン生活への正しいアプローチを維持するための強い励ましでもあります。この主の言葉から導き出される一つの明確な意味は、サルデスには確かにキリストから背を向けた者たちがいて、ここで要求されている悔い改めがなければ、彼らの名前はこの極めて重要な書物から抹消される危険性があるということです。

彼ら[神を信じない者]をいのちの書から消し去って、義人のうちに記録されることのないようにしてください。(詩篇 69篇28節)

今もしあなたが、彼らの罪をゆるされますならば——。しかし、もしかなわなければ、[その時は]どうぞあなたが書きしるされたふみから、わたしの名を消し去ってください」。主はモーセに言われた、「すべてわたしに罪を犯した者は、これをわたしのふみから消し去るであろう。(出エジプト32章32-33節)

「いのちの書」そのものは、決して断罪の手段ではありません。この世でイエス・キリストを受け入れなかったり、拒んだり、背を向けたりした者たちを告発する根拠となる、私たちの人生の軌跡を記した「書」を神はお持ちです(ダニエル 12 章 1 節; 黙示録 20 章 12 節)。むしろ、「いのちの書」は、その日にキリストの前に立つとき、

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

その名前が含まれている私たち全員にとってのあがないの手段なのです(黙示録 20 章 15 節)。私たちの名前が記されていることは、事実上、私たちがこの世でイエス・キリストに忠実であったことの証となるのです。現世での真の「勝利者」であるイエス・キリストの忠実な従者であるクリスチャンは、主が私たちの名前を「いのちの書」から絶対に消されることはないことをここで約束されています。

3. 「わたしの父と御使たちの前で、その名を言いあらわそう」(黙示録3章5節)：この約束は、本質的に上記の「二重否定」の肯定的な補足です：イエスは私たちの名前を消すのではなく、(代わりに)正式に認めてくださると言われるのです。将来のその祝福された時点で、いのちの書から私たちの名前が削除される可能性はすべて消え去ります。その大いなる日に復活して主の前に立つとき、私たちは主と同じようになり、その時点から永遠に主と共になるからです(第一ヨハネ3章2節)。天の宮廷で私たちの「名前」が公表されること、つまり私たちが永遠のいのちのために登録されていることが証明されることは、自分の栄光よりもこの地上での主の栄光を求めた人たち(ヨハネ7章18節)、この世のむなしく無意味な名声ではなく、真の永遠の「名誉」を求めた人たちすべてに与えられる報いなのです。このことは、現世の目に見える教会と私たちの関係にも当てはまることであり、私たちがここで学んでいるサルデスの時代の、ほとんど死んでいた、目に見える教会にも重要な適用があります。当時の目に見える組織の中で、偉大で重要な存在として祭り上げられた人々は、神の目には何の価値もなかったのです。しかし、その時代の墮落した世俗的な風潮を拒否し、代わり

5.サルデス：墮落の時代(黙示録 3 章 1-6 節)

にイエス・キリストへの純粋な真の信仰による真の救いを求めた人々は、私たちの主が「御父と聖なる御使いたちの前で」その名前を宣言される人々なのです。名声や評判は、エゴの具体的な対応物であり、世が強く求め、高く評価するものです。しかし、私たちイエス・キリストを信じる者は、永遠の名と永遠の栄誉(黙示録2章17節)を期待して生きています。なぜなら、私たちがここにいるのは、自分の名前のためではなく、救いを与える天の下の唯一の名、すなわち、私たちの祝福された主であり救い主であるイエス・キリストの名、評判、御名、御業のためだからです(使徒行伝4章12節)。

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

6. ヒラデルヒヤ: リバイバルの時代(1522 年～1882 年=360 年)

黙示録 3 章 7-13 節

(7)ヒラデルヒヤにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『聖なる者、まことなる者、ダビデのかぎを持つ者、開けばだれにも閉じられることがなく、閉じればだれにも開かれることのない者が、次のように言われる。(8)わたしは、あなたのわざを知っている。見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた。なぜなら、あなたには少ししか力がなかったにもかかわらず、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかったからである。(9)見よ、サタンの会堂に属する者、すなわち、ユダヤ人と自称してはいるが、その実ユダヤ人でなくて、偽る者たちに、こうしよう。見よ、彼らがあなたの足もとにきて平伏するようにし、そして、わたしがあなたを愛していることを、彼らに知らせよう。(10)忍耐についてのわたしの言葉をあなたが守ったから、わたしも、地上に住む者たちをためすために、全世界に臨もうとしている試練の時に、あなたを防ぎ守ろう。(11)わたしは、すぐに来る。あなたの冠がだれにも[奪われない]ように、自分の持っているものを堅く守っていなさい。(12)勝利を得る者を、わたしの神

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

の聖所における柱にしよう。彼は決して二度と外へ出ることはない。そして彼の上に、わたしの神の御名と、(わたしの神から天から下って来る)わたしの神の都、すなわち、天とわたしの神のみもとから下ってくる新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを、書きつけよう。(13)耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞かばよい。』

ヒラデルヒヤは 16 世紀の宗教改革に始まり、17 世紀の真のキリスト教の普及、擁護、堅固化、18 世紀の福音主義復興、そして 19 世紀の聖書研究と世界的伝道への献身の強化へと、この真のキリスト教が花開いたリバイバルの時代を象徴しています。教会史におけるこの刺激的な時代(ここで論じる積極的な展開は、一般に「プロテスタンティズム」と呼ばれる領域においてなされました)の霊的な勢力と重要性を十分評価しきことは難しいことでしょう。この時代は、サルデスとは対照的に、目に見える教会組織が徐々に退化した時代の第三段階であり、目に見える教会全体が霊的な意味でほとんど死んでいた時代でしたが、ヒラデルヒヤは完全な方向転換をしたことを表しています。こうしてヒラデルヒヤは、再活性化したプロテスタント教会における、組織化されたキリスト教の正真正銘の「死からの復活」を体現しています。

スミルナと並んでヒラデルヒヤは、主からあからさまに問題を指摘されていない唯一の教会時代です。実際、歴史的に見れば、ヒラデルヒヤの時代は、その伝道の量と質、聖書を通して神の真理

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

を求める正統性と激しさ、そして信者にも未信者にも向けられた広範な慈愛の点で、特に初期にはしばしば激しい反対に遭遇したにもかかわらず、非常に称賛に値するものでした。ヒラデルヒヤの功績はまた、この時代の信者たちが本質的に「無から有を生み出した」ことであり、いわば、すでにあった瀕死の組織からの離反や新しい組織の創設を通して、教会の前進を目に見える形でジャンプスタートさせ、同時に当時のクリスチャンの聖化と霊的進歩に必要な過程、方針、手法を改革したことです。こうしたことはすべて、旧教会からの激しい敵意、時には厳しい迫害、大きな政治的干渉といった環境の中で成し遂げなければなりませんでした。ルター、カルヴァン、ツヴィングリのような真の信者たちによって築かれた新しい道に対する旧教会からの反発の高まり、戦争や大虐殺につながる政治的反動、敵対する国々からの本物のクリスチャンたちの絶え間ないディアスポラ(離散:フランスのユグノー教徒など)が見られるように、この四世紀の期間にわたる西洋の歴史は、これらの事実をよく立証しています。しかし、このような困難が彼らの真理への探求に水を差すのではなく、有名な改革者たち自身やその信奉者たち、そして18世紀から19世紀にかけての本格的な神学と聖書学から、神の言葉とその適切な研究のための補助となるもの(テキスト、神学、言語学、歴史学など)が、歴史上かつてないほど発展し、流通し、活用されたことも見て取ることができます。ヒラデルヒヤが死んだ教会から勇気をもって分離したこと(16世紀)、ヒラデルヒヤを滅ぼそうとした勢力に打ち勝って生き残ったこと(17世紀)、信者の間で真の霊性が復活し、強まったこと(18世紀)、そしてこれらの肯定的な傾向が、広範な伝道活動、献身的な聖書研

6. ヒラデルヒヤ: リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

究、慈善活動へと波及したこと(19 世紀)は、ヒラデルヒヤを教会の真に特別な時代の一つとして位置付けています。

この最後の点、すなわち、かつて自分が知っていたものすべてから、また、かつて「正当性」の唯一の中心であり焦点であったものすべてから分離するという悲痛な体験は、改革者たちによって軽々しく手掛けられたものではなく、ヒラデルヒヤの時代を通して問題であり続けました。この「分離不安症(トラウマ)」の大部分は、ヒラデルヒヤが分離せざるを得なかった、今は亡き目に見える教会が「唯一の真の教会」であると強く迷言していたことに起因していたのは間違いありません。何世紀にもわたって実践されてきた儀式、華麗な礼服、堂々とした厳格さを根拠に、その主張を支持し、強調しようとしたのです。孤独なところから出てきて目に見える「普遍的な仲間」の一員になりたいという所属への欲求は、ヒラデルヒヤの歴史を通じて、ヒラデルヒヤの霊を悩ませた切望であり願望でした(すべてのカルトが巧みに付けこんで利用する、人間の正常な感情です)。これが私たちの主がご自身のメッセージ(下記参照)を通して応え、そのメッセージの終わりに、ヒラデルヒヤの真の信者に、どんな一時的な結びつきとも比較にならない永遠の交わりの、真実で驚くべき具体的な証拠、「キリストにあつて」(ヨハネ 14 章 20 節, 15 章 5-8 節, 17 章 23 節, ローマ 6 章 3-11 節; 第二コリント 5 章 17 節; エペソ 2 章 4-10 節, 2 章 13 節)、目に見えないとはいえ、キリストとの真の「結びつき」に答えて与えられる証拠を約束しておられる理由でもあります(黙示録 3 章 11-13 節)。クリスチャンにとって、キリストに属しているという現実と経験以上に大きな

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3章 7-13 節)

「所属」はなく、逆に、キリストの喪失を補うような、キリストを離れた交わりや結びつきは存在しません。聖句は、真の教会の真の兄弟たちとの一致を強調して勧めています(例えば、エペソ 4 章 3 節)、同時に、行動が一線を越えた重大な罪深い者たちや、事実、真にキリストに従う者ではない者たちとは、あらゆる面で親密な関係から注意深く離れることを強調して命じています:

不信者と、つり合わないくびき(親しい、親密な付き合い)を共にするな。義と不義となんの係わりがあるか。光とやみとなんの交わりがあるか。キリストとベリアル(=悪魔)となんの調和があるか。信仰と不信仰となんの関係があるか。神の宮と偶像となんの一一致があるか。わたしたちは、生ける神の宮である。神がこう仰せになっている、「わたしは彼らの間に住み、かつ出入りをするであろう。そして、わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となるであろう」。だから、「彼らの間から出て行き、彼ら(=不敬虔な者たち)と分離せよ、と主は言われる。そして、汚れたものに触てはならない。触なければ、わたしはあなたがたを受けいれよう。そしてわたしは、あなたがたの父となり、あなたがたは、わたしのむすこ、むすめとなるであろう。全能の主が、こう言われる」。(第二コリント 6 章 14-18 節)

困難なことかもしれませんが、悪質な影響から離れることは、単に賢明な道というだけでなく、本当に唯一可能な安全な道です。

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

サルデスの時代が終わりに近づくとつれ、すべての真の信者がそうであったことは確かです。ヒラデルヒヤが主に忠実であり続けようとするなら、伝統的な教会という死んだ建物の中にとどまることは不可能なことでした。今や完全に墮落し、靈的にも廃れたこの組織と関わり続けることは、どんなに靈的に受け入れられやすい便宜を図ろうとしても(このテーマはルターの生涯と経験によって十分に証明されています)、最終的には関わり合いによる死と深刻な道徳的妥協しか意味しないからです。ヒラデルヒヤは、既成の目に見える教会から自らを切り離すことで、困難でしたが正しい選択をしました。サルデスの靈的に死んだ体制から距離を置かなければ、ヒラデルヒヤは主に対する義務を果たすことはできませんでした(この出来事でヒラデルヒヤがしたように:「あなたがたは、わたしのことばに心を留め、わたしの名を否定しなかった」、「忍耐というわたしのことばを守った」)。サルデスの衰退期には、真の信仰と忠実さを維持するためには、分離しなければならないほど、事態は悪化していたのです。16 世紀初頭の頃には、目に見える教会は靈的に機能不全に陥っており、純粹にイエス・キリストに従いたいと願う人々には、「わたしの民よ、彼女から離れ去れ」に従うか、そうでないなら「その罪と災害にあずかる」以外に道は残されていなかったのです(黙示録 18 章 4 節参照)。

このことは、私たち全員にとって教訓となります。どんな時代であれ、信者として、長年の関係から軽々しく離れるべきではありませんが、たとえ当時の伝統的な教会(ユダ 1 章 22-23 節参照)が主張していたように、表向きは主に従う者であっても、否定的な関

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

係によって霊的に引きずり降ろされないよう、必要なあらゆる手段を講じる必要があります。これは、単につまずきや弱さ、誤った情報の問題ではなく、これらの不道德な仲間の側に、故意に、徹底して、自己正当化する罪深い行動がある場合に特に当てはまります。このような場合、私たちが介入しても、変化をもたらす効果は期待できません。この種の組織や個人にとって、信仰が完全に破壊される前に悔い改める唯一の望みは、神の裁きの介入にあります(第一ヨハネ 5 章 16-17 節; 第一コリント 5 章 5 節; ピリピ 3 章 18-19 節参照)。

だからといって、そのような分離は決して容易なことではありません。実際、このような究極的な行動に出るのは極端な状況においてのみであるという事実が、別れが辛い経験になることを事実上保証しています。また、私たちの時代には、この(正しい)原則がしばしばひどく誤って適用されてきたことにも留意すべきです。特にカルトは、被害者の人生を完全に支配するために、新しい信奉者や潜在的な信奉者に対し、友人や家族、かつての交友関係をすべて断ち切らせようと常に躍起になっています。ここで述べられているのは、そのようなことではまったくありません。それどころか、ヒラデルヒヤの時代の信者たちは、まさにそのような不当な支配的組織から離脱したのであり、そのような組織とはもはや共存することさえ不可能であり、同時に真に主に従うこともできなかつたのです。このような分離が必要とされるのは、イエス・キリストに従う自由が本質的に制限されている場合に限られます。友人、家族、長年の付き合いは、時々、時間を要し、クリスチャンの弟子としての

6. ヒラデルヒヤ：リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

歩みを理解できないことも多いかもしれませんが、それは神への礼拝を事実上妨げることは全く違うことです。そして、これらの人々やグループに対して正しいことを行うという、私たちに神から与えられた責任を放棄するものでは決してありません。

ヒラデルヒヤの信者が良心のために現代の教会から分離する以外に(信仰の難破に耐える以外には：第一テモテ 1 章 19 節) 選択肢がなかったとしても、分離のトラウマ<分離不安症>が軽減されたり、取り返しのつかない形で失われた関係に対してしばしば感じる悲しみがなくなるわけではありません。この喪失感と再結合への(むなしい)希望は、「ヒラデルヒヤ」という名前に反映されています(現代でもエキュメニカル運動--諸教派を一致させようという運動--という形で現れています)。その語源には、よく知られているように「兄弟愛」という意味が含まれていますが、この文脈では、失われた結合に対する当時の信者の愛慕の情も反映されています。この感傷とノスタルジアは、残念ながら、宗教改革の過程やそれ以降に採用された新しい組織的アプローチの多くにも反映されています。いささか皮肉なことに、教会の統治と儀式の形態は一般的に聖書で特に扱われていないにもかかわらず(それゆえ最大の柔軟性をもって対応されるべきです)、ヒラデルヒヤの真の信者の共同体の中で最大の論争の原因となったのは、まさにこの問題に関連するものでした⁴⁷。このように、「ヒラデルヒヤ」という名前は、キリ

⁴⁷ 上記の「エペソ」での議論を参照してください。教会統治の問題は、「聖書

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

ストと互いに対するその時代の真の信者たちの純粋な愛を示すと同時に、少なくともある程度は現在を憂鬱にさせるような、過去に対するやや感傷的な見方を示しているのです。この特徴は、改革派教会の多くの側面に反映されており、実質的なものでないにしても、少なくとも形式的には、古い儀式や古いやり方を思い出させ、想起させるものです。ロトの妻がそうだったように(創世記 19 章 16-26 節; 参照:ルカ 9 章 62 節, 17 章 32 節; ヘブル 6 章 4-6 節, 10 章 35-39 節, 11 章 15 節)、後ろを振り返ることは霊的な観点からは常に危険なことです。ヒラデルヒヤが、彼女が去った伝統的な教会と同等のものを建てようとするのは不可能であり(また、望ましくもなかった)、新しい教会を「同じように見せ、感じさせよう」と精力的に試みることには明らかな危険がありました。特に、「霊的な機能よりも世俗的な形式」がそもそもの問題の大部分を占めていたのですから。

これらのことは、ヒラデルヒヤに対する主の評価が、多くの点で非常に肯定的であるにもかかわらず、私たちが期待するほど光り輝いているものではない理由を説明するのに役立ちます。というのも、「わたしは、あなたがたのわざを知っている」、「あなたがたに

の基本」の第 6 部 B で扱います: 教会論です。使徒言行録をざっと読んでだけでも、使徒とその一団がこの点に関して教義的に特定の青写真に基づいて進んだのではなく、むしろ真の目的(イエス・キリストの福音: 救い、聖化、霊的成長、主への奉仕)に奉仕するために、柔軟なもの(組織)を適応させながら、非常に実践的な方法で古いアプローチと新しいアイデアを組み合わせたことがわかります。

6. ヒラデルヒヤ: リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

は少ししか力がないからだ」というフレーズには、主の非常に的確な表現を通して、やや控えめな性質の評価が見られるからです(わざについては、テアテラの場合の「あなたがたの最近のわざは、最初のわざよりも多い」という明らかに肯定的な表現と比較してみてください: 黙示録 2 章 19 節)、サルデスの場合は「生きているというのは表向きだけで、実は死んでいる」という明らかに否定的な表現です: 黙示録 3 章 1 節)。ヒラデルヒヤは多くの美德と功績を残しましたが、完全ではありませんでした。とはいえ、その時代の信徒たちは、組織的、儀式的、神学的な選択について、そのような行動は単に懐古の念に捉えられた、後に残されたものへの反応であったのですが、注意深く考えていたことは認めなければなりません。対照的に、私たちのラオデキヤ時代には、自分の吐いたものに戻る犬(第二ペテロ 2 章 22 節)のように、ヒラデルヒヤが放棄した律法主義的で非聖書的な重荷の多くを再び引き受けることにあまりにも早く、霊的な生存を確保するために以前に放棄した同じ死んだ建物を再び取り入れることを真剣に考えさえするほどなのです。

<ヒラデルヒヤに対する>キリストの自己描写:

1. 「聖なる者、まことなる者」<黙示録 3 章 7 節>: 「聖なる」と「まことなる<真実な-新改訳IV>」という言葉は、どちらも聖別という問題を語っています。「聖なる」あるいは「聖人のような」という最初の言葉は、聖化の質、すなわち、すべての不敬虔なものから離れ、罪と悪から完全に分離することを体現しています(主に従う

6. ヒラデルヒヤ: リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

者は皆、そのように召されています:ヘブル 12 章 14 節)⁴⁸ 私たちの主がここでご自分を表現するために用いた二番目の言葉は「まことなる<真実な>」であり、英語でもギリシャ語でも名詞「真理」の形容詞的対格です。真理は、すべての偽り、すべての嘘からの分離を伴います。ヒラデルヒヤは、当時の腐敗した教会から距離を置くことによって、道徳的、霊的な腐敗から離れ(すなわち、「聖なる」存在となり)、教会を支配するようになった偽りの教義に対抗して真理に立つ(すなわち、「真実な」存在となる)という聖霊の促しに応えたのです。このように、私たちの主イエス・キリストは、ご自分とご自身の性格を表すのにこの二つの言葉を用いて、ヒラデルヒヤが当時の罪深く偽りの伝統的な教会から分離するためにとった困難な道と同一視され、それを承認しておられるのです。主は真理であられるので、私たちも真理を語らなければなりません(ヨハネ 14 章 6 節; エペソ 4 章 25 節)。主は聖なる方ですから、私たちも聖なる者とならなければなりません(第一ペテロ 1 章 15-16 節)。

2. 「**ダビデのかぎを持つ者、開けばだれにも閉じられることなく、閉じればだれにも開かれることのない者**」<黙示録3章7節>: 今日と同じように、古代世界においても、鍵は出入りや立ち入る権限を意味しました。ここで言及されているのは、地上において推し進められている天の王国における行動の機会についてです。(マタイ16章19節; 参照:イザヤ22章22節; ヨハネ10章3節)。

⁴⁸ ペテロの手紙シリーズ#13「聖化」をご覧ください。

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3章 7-13 節)

神の権威なくして、神の力なくして、神の許可とアクセスなくして、神の国のために何一つできる者はいません(イザヤ26章12節; ゼカリヤ4章6節; ヨハネ15章4節)。私たちが「神のために」することはすべて、イエス・キリストにある時代のご計画に従って、神の御霊の力によって、神が与えてくださった賜物によってのみ行うことができます。しかしそのような許可がある場合、主の力とその権威に反抗して立ち向かえるものではありません。神が施錠された錠は誰にも開けられず、神が開かれた錠は誰にも閉められません。ヒラデルヒヤの信者に与えられた霊的前進と神への奉仕の機会は、メシヤ、すなわちダビデの大いなる御子からもたらされたものであり、その御子は世の救い主として、御子に従うすべての人に永遠の救いの門を「開かれた」のです。この文脈でのこの記述は、ヒラデルヒヤの信者が、何世紀にもわたって唯一の教会組織であったところから「締め出された」にもかかわらず、個人的な成長と主との交わり、そして主への奉仕の機会は、すべて主の支配下にあることを示すものです。以前の交わりから排除されたことで非難の念に悩まされているよりも、この言葉から大きな慰めを受けるべきだったのです。なぜなら彼らは神のみ心を行う力のうちに<御心を行うように>組み入れられていたからです。神なしに、誰が立つことができるのでしょうか。しかし神は、神に従うすべての者を堅く立たせることがおできになるのです(ローマ14章4節)。

6. ヒラデルヒヤ: リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

キリストの特別なメッセージ:

1. 「わたしは、あなたのわざを知っている。見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた。」<黙示録 3 章 8 節>: 開かれた扉とは、霊的な機会を意味します(使徒行伝 14 章 27 節; 第一コリント 16 章 9 節参照)。この機会の扉は主ご自身によって錠が開けられ、開かれたものであるため、ヒラデルヒヤが自らを切り離した強力な目に見える教会によって制限されることのない、本物のものなのです。真に神に捧げられた反組織を通して、神を求める明確な道を提供し、あらゆる反対を押し切って耐え忍び、組織的かつ体系的な方法で主の真理を追求し、それを世界中に伝えてきたことは、ヒラデルヒヤの四世紀にわたる主要な特徴であり、世間からは認められなかったかもしれませんが、彼らが献身していた主によって知られていた業績、あるいは「わざ」なのです。

2. 「なぜなら、あなたには少ししか力がなかったにもかかわらず、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかったからである。見よ、サタンの会堂に属する者、すなわち、ユダヤ人と自称してはいるが、その実ユダヤ人でなくて、偽る者たちに、こうしよう。見よ、彼らがあなたの足もとにきて平伏するようにし、そして、わたしがあなたを愛していることを、彼らに知らせよう。」<黙示録 3 章 8 後半, 9 節>: 私たちは完全ではないかもしれないし、神が与えてくださる資源をすべて活用し、適用することはできないかもしれませんが。私たちは「小さな力」しか持っておらず、備えていないかもしれませんが、神の御手の中では、その小さな種が、からし種のように巨大な木に成長することができるのです。彼

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3章 7-13 節)

らの欠点は何であったにしろ、ヒラデルヒヤ時代の信徒たちは、人が人生で行うことのできる最も重要な投資を行いました。彼らは、時間、エネルギー、賜物、そして物質的な資源を、主イエス・キリストの追求と奉仕のために蒔いたのです。この最も慎重な投資のために、彼らは主によって認められたのです。なぜなら、彼らの行いは「知られている」からです。つまり、それらは主によって受け入れられ、永遠に存続するのです。これらの信者たちによってもたらされた「小さな力」は、個人的な霊的成長(「あなたがたは、わたしのことばに耳を傾けた」-神のことばを知り、信じ、生きる過程が、すべての霊的成長の基礎を形成するからです)と、主のための奉仕と宣教(「あなたがたは、わたしの名を否定しなかった」-ことばと行いによって、キリスト教的な生活、キリスト教的証し、キリスト教的奉仕によって、主について証しし、主のために証しすることは、私たちを買い取ってくださった方の名を完全に認めることだからです)に向けられるのです。

彼らの献身と奉仕の結果として、(偽りの)「唯一の真の教会」であると主張する人々からの反対と圧力にもかかわらず、主はヒラデルヒヤの人々に対して、そのような人々(彼らは偽りの教会を代表しており、彼らが主張するように、真の教会を代表しているわけではないので、ここでは「サタンの会堂」と表現されています)のうちの何人かがやがて来て、ヒラデルヒヤの部隊の中にこそ、神の好意、神の教会が真に存在することを認めるようになることと約束されています。目に見える教会の信者たちは、「ユダヤ人であると主張し

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

ている」(つまり、真の神の民であると主張している)のですが、(自分たちにも神にも)嘘をついているのです。ヒラデルヒヤの時代の始まりから終わりまでの間、その古い、靈的に死んだ組織で始まりながら、真に神のものであるのは誰かを見て理解するようになり、真の悔い改めて、最初の改革者たちとその信奉者たちがそうであったように、偽りのものを捨て、真のものを掴み取るようになった人々が、実に着実に存在してきました。この人達はその功績を認められ、永遠の益を受けることでしょう。軽んじられ、追放されたヒラデルヒヤの人々にとって、<こうした人達が現れてきたことは>最大の励ましであり、彼らが神の愛の内に生きていることの最大の証拠となりました(「わたしがあなたを愛していることを、彼らに知らせよう」)。

ここで引用されている「ユダヤ人」についてはしばしば誤って伝えられているので、この主題について取り上げて論じる必要があるでしょう。この箇所を書いた人(使徒ヨハネ)はユダヤ人であり、ここで引用しているのはメシア、つまり人間性においてユダヤ人である神-人の言葉です。黙示録の後半では、イスラエルの高貴な地位は否定できません(7 章と 14 章に登場するイスラエルからの 14 万 4 千人、12 部族の門を持つ新しいエルサレムを参照: 黙示録 21 章 12 節)。このように、ユダヤ人であることは黙示録において決定的に優位なことであり、この点は聖書全般においてははっきりと言えることです(ローマ 3 章 1-2 節参照)。そして、この箇所もそう言っているのです。この「サタンの会堂」は、ユダヤ人であると主張しているだけであって、彼らは嘘をついており、実際にはユダヤ人で

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

はないのです。したがって、この文脈の否定的な意味合いからすると、改革者たちの時代において神の民であると偽っていた、靈的に死んだ偽りの教会に完全に当てはまります。したがって、この箇所には反ユダヤ的な意味はまったくなく、そのような意味は、重大かつ故意の間違った解釈によってのみ導き出されるものです。

宗教改革の時代の始まりにおける、死んだ組織化された教会を「ユダヤ人ではないのにユダヤ人であると主張する人々」と特定することは、示唆に富むものです。その最初の衰退の時代から、異教的な形態を想起させる多くの特徴に加えて、墮落した教会には古代イスラエルを意図的に模倣したものも多く見られたからです。神殿(カテドラル)、いけにえ(秘跡)、エポデ(法衣)、支配権を持つ大祭司(教皇)、モーセの律法の律法主義的解釈(教会法 canon law)、什分の一などは、この組織に「新しいイスラエル」の役割を担わせようとする意図的で明らかな試みのほんの一部にすぎません。このような傾向は明らかに、そのような身分表明を通して(擬似的な)権威を得ようとする試みであります。神は誰が真に神のものであるか、誰が真に「神のイスラエル」(ガラテヤ 6 章 16 節)であるかを知っておられます⁴⁹。

⁴⁹ より詳細な議論については、悪魔の反逆シリーズ第 5 部「審判、回復、取り替え」の II.8.b.i 項「イスラエルの独自性」をご覧ください。

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3章 7-13 節)

3. 「忍耐についてのわたしの言葉をあなたが守ったから、わたしも、地上に住む者たちをためすために、全世界に臨もうとしている試練の時に、あなたを防ぎ守ろう。」 < 黙示録3章10節 >

>: ここでまず注目すべき点は、この約束はすでに成就しているということです。ヒラデルヒヤの時代は過ぎ去り、ヒラデルヒヤに仕えていたすべての偉大な信者たちも過ぎ去りました。彼らは「**忍耐についてのわたしの言葉をあなたが守った**」、つまり、生涯にわたって主への信仰と忠実を続けるようにとの主の「言葉」に従った人々です。彼らは、個人としても集団としても、大艱難期を経験せずに済みました。ヒラデルヒヤ時代の信徒たちは、困難で代価のかかる離別、それに続く長期にわたる迫害、そして真に神を求め神に仕える目に見える教会を再建するという試練など、多くのことを耐え忍んだのです。彼らは、教師を養成するための真の意味で効果的な教育的・学術的共同体を発展させるという挑戦や、聖書的に正しい方法で神への熱意を国内外に表現し、開拓するという挑戦にも立ち向かいました。彼らは「地下牢、火、剣」にもかかわらず信仰を貫き、ヒラデルヒヤの晩年に続いた世俗的な信仰の試練にも耐え、ヒラデルヒヤの最後の世紀を支配した、(ダーウィンのな現れとして最も顕著)唯物論的な無神論という癌に蝕まれることもなく、最後まで神を信じ、神の聖典に信頼することを好んだのです。何度も試練を受け、すべての試練を乗り越えたヒラデルヒヤは、主の再臨の前に人類に降りかかる運命にある最後の、最も恐ろしい試練、すなわち艱難期から解放されるという安堵で祝福さ

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3章 7-13 節)

れています。⁵⁰この祝福において、ヒラデルヒヤは、私たち自身の時代であるラオデキヤとは対照的です。ラオデキヤは、それまでのすべての試練において自らを欺いてきたため、教会の歴史の中で最も厳しい試練に直面することを余儀なくされることとなります。この試練は無視することも、軽視することもできず、これにおいてすべての信者の信仰の真の価が露わになるのです。

4. 「わたしは、すぐに来る。あなたの冠がだれにも奪われないように、自分の持っているものを堅く守っていなさい。」(黙示録3章11節): 神の見解からすれば、「千年は一日の如し」(詩篇90篇4節; 第二ペテロ3章3-10節)であることから、主の再臨は(それに先立つどの出来事も)遠いことではありません。第二に、人間の一生という非常に短いスパンから見れば、現在と私たちの主との祝福された(個人的な)再会までの期間は、ほんの一瞬のものでしかありません(この視点は、信者が決して見失うことの許されないものです)。最後に、ヒラデルヒヤは一時の休息が約束されていますが、今日の私たちにとっては、これは本当に完全に差し迫った現実です。そして、これこそが、ヒラデルヒヤ時代の信者が、いや、すべての信者が、この箇所から得るべき最大の要点です。この研究の第一部で見たように(「来たる艱難期 第一部」第V章、黙示録1章3節参照)、終わりの時が差し迫っているという原則は、聖書、特

⁵⁰ いわゆる「艱難前携挙」を支持するためのこの箇所の誤用については、ペテロの手紙#27「信仰を脅かす3つの誤った教理」を参照。

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

に黙示録において重要かつ繰り返し語られるテーマです。(ヒラデルヒヤを救い出すという約束や、七つの教会へのメッセージに示されている教会時代の全体像のような)他のあらゆる時系列的な情報にもかかわらず、「終末」は差し迫っているのです。なぜなら、(この節で指摘されている)「終わりの時が差し迫っている」という原則は、(私たちの主が十字架で勝利されて以来)(人間の弱い論理でそれを矛盾と感ずるかどうかは別として)神にはこれらの出来事をいつでも実行に移す権利があることを意味するからです。従って、私たち信者は常にこれらの出来事に備えていなければならないのです。

上に取り上げた第二の文章については、「自分の持っているもの」とは、ヒラデルヒヤの人々が個人的にも集団的にも行った霊的成長と宣教の進歩を意味し、「堅く守っていなさい」とは、そもそもこの進歩をもたらした善行を忍耐強く続けることを意味します。これは痛烈な言葉です。というのも、主の言葉の明確な意味は、過去の業績(ヒラデルヒヤの人々のような例外的な業績であっても)にかかわらず、クリスチャンがその榮譽に満足していてよい時期はないということだからです。私たちがこのぶどう園にいる限り、それは主がある目的のために私たちをここに残して下さったからです。普遍的な言葉で言えば、その目的には常に、継続した、かつ継続している聖化(罪と悪からの分離)、霊的成長(真理のすべての良い適用、御言葉の学びと生活、祈りなどに基づく)、そして主に仕えること(主が与えてくださる恩恵に従って、私たちの賜物を用いて、ミニストリーをもって働くこと)が含まれます。これらすべての面

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

で前進し続けることによってのみ、私たちは後戻りしないことが保証され(ヘブル 2 章 1 節)、そうすることによってのみ、「自分の持っているもの(成し遂げたこと)」の結果と報酬を「堅く守る」ことが保証されるのです。

このように、前進することこそ、クリスチャン生活における唯一の真に安全なアプローチであり、この世でイエス・キリストに忠実に従ったすべての人に約束された報いである「冠を失う」ことがないようにする唯一の方法なのです。霊的に成熟したすべての信者は、少なくとも一つの冠、「義の冠」(第二モテ 4 章 8 節)を得ることができます。霊的な前進と成長が成熟に達し、その成長を実証するような模範的な人生を試練において確認されるなら、「いのちの冠」が約束され(ヤコブ 1 章 12 節)、最高の賞は「栄光の冠」であり、個人的な務めの召しを(それが何であれ)主に受け入れられるような形で果たす人のために用意されています(第一ペテロ 5 章 1-4 節)⁵¹。クリスチャン生活において忠実なすべての人が、少なくとも一つの冠を受けるということは、確かに良い知らせです。しかし、この聖句はまた、私たちが「堅く守る」ことを怠り、主が示し、私たちに歩むように命じられた道を忍耐強く歩む努力を怠るなら、その冠(そして、そのような冠に伴うすべてのもの)を失う可能性があることをはっきりと思い起こさせるものでもあるのです。この特別な警

⁵¹ 王冠の教理は、ペテロの手紙の#18「永遠の報い」と、このシリーズの第 6 部 I.7 項「教会の裁きと報い」で取り上げられています。

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

告が教会の七つの時代の中で、彼らの集団行動が最も高く評価されていたヒラデルヒヤの信者に向けられたものである以上、これは特に真実です。

キリストが約束された報い

1. 「勝利を得る者を、わたしの神の聖所における柱にしよう。彼は決して二度と外へ出ることはない。」 < 黙示録3章12節 > : この祝福された約束は、すべての勝利した信者、すなわち、イエス・キリストへの信仰を保ったまま地上での生涯を全うしたイエス・キリストに従うすべての信者に対してなされたものですが、しばしば誤解されてきました。肉体の復活をイエスに信頼し、その希望は、主のような輝かしい新しい体を持つことに堅く留められ(ローマ6章5節, 8章11節; 第一コリント15章45-49節, 15章53節; 第二コリント5章1節; コロサイ3章3-4節; 第一ヨハネ3章2節)、神の住まいのための永遠の個人的な神殿(ヨハネ4章21節を第一コリント3章16節, 6章19節と比較してみてください。エペソ2章20-21節; 第一ペテロ2章4-5節も参照のこと)、永遠に文字どおりの石柱になることがないことは確かでしょう⁵²。実際、私たちの最終的な永遠の住まいである新しいエルサレムには、神殿はおろか、岩の柱に変容した信者で満たされた神殿すら存在しません(黙示録21章22節)。こ

⁵² 私たちの永遠の体については、ペテロの手紙シリーズシリーズ#20「復活」をご覧ください。

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3章 7-13 節)

これは比喩であり、私たちの神と主イエス・キリストとの永遠の交わり
の堅固さを、実に素晴らしい形で強調する祝福された比喩なのです。
なぜなら、柱が神殿の一体化に不可欠で、取り外すことのでき
ない部分となり、<神と私たちの関係は>、筆舌に尽くしがたいほ
ど素晴らしく親密なものとなるからです。復活の日から、それは本
質的に今あるものと同じように、完全で具体的な現実となります。
その日、私たちが皆、御父と御子と共に、その一部として永遠に
経験する親密さと驚きに、この地上の誰も近づくことはできません
(ローマ6章3-5節; 第二コリント5章17節; コロサイ3章1-4節)。この
信じられないほど心強い約束は、祭祀(さいし)や豪華な装飾が施
された荘厳な建築の聖堂を持つ当時の目に見える教会から、本
質的に「追放された」ヒラデルヒヤの信徒たちにとって、よりいっそ
うの慰めとなります。彼らは、自分たちが正しく、死んだ伝統的な
教会から分離するためにしなければならぬことを心の中で知っ
ていたけれども、この知識は、喪失感、恥、恐れ of 感情を完全に
消し去ることはできませんでした。私たちの主はこのわずかな言葉
をもって、彼らが神に喜ばれることを選んだことで失ったすべてを
十二分に回復し、神ご自身とのより良い交わり、決して終わること
のない交わりを約束されたのです。

2. 「そして彼の上に、わたしの神の御名と、(わたしの神から天か
ら下ってくる)わたしの神の都、すなわち、天とわたしの神のみも
とから下ってくる新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名と
を、書きつけよう。」： 私たちがこの地上での主の奉仕において

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3章 7-13 節)

果たした役割を反映するものとして、将来私たちが改名されることについて言及しました(上記、黙示録3章12節参照)。神の御名と、私たちの永遠の住まいである新しいエルサレムの御名と、私たちの主イエス・キリストの御名とが、それぞれの信者に刻まれることは、「所属」を表す究極的なバッジです。永遠が始まったその日から、私たちは父と子に完全に属し、栄光の永遠の都、新しいエルサレムの一部となり、これらの名を実際に持つようになるのです。これは、あらゆる時代の信者にとって、特に孤立と隔離の時代において、非常に心強い約束です。ヒラデルヒヤの時代の、組織的に排除され、拒絶され、苦しめられ、軽蔑された信者たちにとって、その意味はいっそう力強いものです。またここには、一方では忠実な信者の復活した体に刻まれるこれら三つの永遠の御名と、他方では艱難期に神を拒んだ者たちの死すべき体に刻まれる「獣の刻印」との間に、明確な対比があります(終末を目前にした私たちが理解する上で最も重要なことです)(黙示録13章16-17節, 14章9節, 14章11節, 15章2節, 16章2節, 19章20節, 20章4節)。獣の刻印を受けた者たちは、その裁きは確証されています(その結果、彼らの名はいのちの書から取り除かれました：黙示録13章8節; 17章8節)、しかし、滅ぶべき肉体の命を救うために刻印を受けることを拒む者たちは、楽園のような新しいエルサレムで、神の家族の一員として、またキリストの花嫁としての印を受け、これらの祝福された御名によって永遠に覚えられることでしょう(参照、イザヤ56章5節; 62章2節; 65章15節; 黙示録2章17節, 3章12節, 14章1節、また黙示録19章12-16節と比較してください)。

6.ヒラデルヒヤ:リバイバルの時代(黙示録 3 章 7-13 節)

(信者らは)御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。(黙示録22章4節)

アブラハムや彼ら以前の多くの忠実な信者と同じように、ヒラデルヒヤの人たちも、ある意味でこの地上をさまよう巡礼者でした(ヘブル 11 章 38 節; 第一ペテロ 1 章 1 節参照)。彼らは(以前の組織から追い出されたという意味で)見捨てられたと感じたかもしれませんし、ホームレスだったかもしれません。しかし、彼らだけでなく、私たちにとっても、父と子との将来の交わりと、「天から下ってくる」新しいエルサレムでの永住は、私たちが主の目でこれらの事柄を見さえすれば、たとえ来たるべき大艱難のどん底であっても、この世が私たちに与えるどんな窮乏、排除、苦しみとも比較にならない驚異なのです。その日、私たちはこれらの栄光の名を、永遠に自分の身に負うことになるのですから。

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

7. ラオディキア： 退廢の時代(1882 年から 2026 年まで =144 年間)

黙示録 3 章 14-22 節

ラオデキヤにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。『アアメンたる者、忠実な、まことの証人、神に造られたものの根源であるかたが、次のように言われる。わたしはあなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。このように、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう。あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もないと言っているが、実は、あなた自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついていない。そこで、あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買ひ、また、あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買ひなさい。また、見えるようになるため、目にぬる目薬を買ひなさい。すべてわたしの愛している者を、わたしはしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって悔い改めなさい。見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である。耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい』。

ラオデキヤは私たちの今の時代、つまり悲しいかな、教会の退化の時代を表しています。ここでまず注意しなければならないのは、現在の墮落とサルデスの時代の墮落を区別することです。というのも、私たちの現代に起こっていること(現在の出来事にも、主が黙示録 3 章 14-22 節で示された預言的記述にも反映されていること)は、神に対する意志的な反逆というよりも、靈的な萎縮と自己満足の拡大だからです。言い換えれば、私たちラオデキヤのクリスチャンは、総体的に言えば、主のたとえ話に出てくる弟によく似ています。弟は、求められれば父の御心を実行しようと口先では熱意を示しますが、実際には何もしませんでした(マタイ 21 章 28-31 節)。このような自己満足は、私たちの時代、つまり主の再臨前の教会の最後の時代の最大の特徴です。そしてそれは、相対的に安易な生活と物質的な繁栄から生じる一般的な特性です。聖書は、神が自己満足に寛容でないことを明確に述べています(申命記 8 章 10-20 節, 31 章 20 節, 32 章 15 節; 詩篇 123 篇 4 節; 箴言 1 章 22 節; イザヤ 32 章 9-14 節; エゼキエル 28 章 5 節; ホセア 13 章 6 節; アモス 6 章 1-7 節; ゼパニヤ 1 章 12-13 節参照)。私たちが住むこの墮落後の世界で被造物が存在し続ける理由のすべては、私たちが主のために選択をする機会を与えるため

7.ラオデキヤ:退廃の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

です。このことによって、主は栄光をお受けになります⁵³。そして、主の最初の、彼らにとって最善の御心に反して、主に背く者たちの場合でさえ、主は彼らを公平に扱われることによって、栄光をお受けになるのです(詩篇 51 篇 4 節; ローマ 3 章 4 節)。しかし、私たちの存在の中心的な問題、すなわち神と御子に対する私たちの態度について、満足している者、ぬるま湯に浸かっている者において、キリストがここで私たちに語っているように、(特に、自分が神の民であると公言している者たちに対して) 主の忍耐には限りがあります。

ラオデキヤの私たちは、自分たちがすべてを持っていると思っていますが、霊的な面では、以前の時代よりはるかに劣っているのです。実際、私たちの時代は、(七つのメッセージすべてに共通する「勝利を得る」者に与えられる最後の約束以外は) 主から何一つ肯定的なコメントを受けない唯一の時代なのです。墮落の時代であるサルデスの場合でさえ、「…その衣を汚さない人が、数人」いました。サルデスのような罪深い時代には、自分の意思で神に背くという風潮に反して、神に従うことを選ぶ者がいたことは、疑う余地のないことでした。しかし、ラオデキヤの時代には、神から離れようとする動きも、神に向かおうとする動きもほとんどありません。過去100年以上にわたって地上の教会に浸透してきた当たり障りのない自己満足は、キリスト教に対する一般的なアプローチを生

⁵³ 「悪魔の反乱」シリーズ第3部「人間の目的、創造と墮落」の1.3節の「神の栄光のために創造された人間」をご覧ください。

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

み出し、あまりに中立的で、あまりにぬるま湯に浸かっているため、思いっきり後退することも、心から受け入れることもほとんどありません。別の言い方をすれば、全体的に、現代の目に見える教会(その無数の姿や組織のすべて)は、深みという点でも、確信の炎という点でも、霊的な熱情という点でも、ほとんど何も持っていないのです。キリストの言葉を借りれば、「生ぬるい」教会であり、故意に不品行であるわけでも、キリストに仕えることに深く献身しているわけでもありません。上に引用したたとえ話の弟のように、私たちは口だけ達者で、本当に主に従い、主に仕えるとなると、本質的に鈍重なのです。

改革者たちの前の時代、ヒラデルヒヤの時代は、これまで指摘してきたように完全ではありませんでしたが、ねじれや傷を持ちながらも、彼らの「わずかな力」はキリストの称賛を得るには十分かな働きをしたの>であり、来たるべき「大いなる試練の時」、艱難期(黙示録3章10節)から彼らを救い出すことを保証するものでした。対照的に、私たちの時代が、「**地上に住む者たちをためすために、全世界に臨もうとしている試練の**」<黙示録3章10節>運命にある、この急速に近づいている恐ろしい時に終わるだけでなく、ラオデキヤが前の五つの時代の半分の年数にも満たされずに切り捨てられた形で終わるのは、まさに私たち全体が練磨される必要があるためです⁵⁴。ヒラデルヒヤの人々は「**忍耐についてのわたしの言葉を…守った**」のです。ラオデキヤの私たちは、臆病な

⁵⁴ 七つの教会に関するこのセクションの序論を参照。

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

恐れや傲慢な反抗からではなく、むしろ便利さ、快適さ、自己満足から、概して灰色の妥協に流れてしまいました。これは、ほとんどすべての教会や教会組織に見られます。真剣な祈りと個人の聖化、イエス・キリストへの献身的忠誠、とりわけ信徒も聖職者も問わずに神の御言葉の真剣な学習は、年を追うごとに希薄になっています。一般的に言って、クリスチャンに、私たちの主、主の御言葉、そして私たちの人生に対する主の御心を追い求めるための、より多くの資源、より多くの時間、より多くの機会、より多くの自由がかつてないほど与えられている時代に、私たちが集団として、この世のむなしい追求を優先して、その最良の部分に脇に置く罪を犯しているというのは皮肉なことではないでしょうか(ルカ10章38-42節参照)。それこそ「生ぬるい」の極みです。つまり、神に口先だけの奉仕をし、真の弟子訓練をする代わりに、楽しく、興味深く、面白いかもしれない単なる気晴らしに過ぎない「クリスチャン活動」に没頭することによって、真の靈性を構成し、真の靈的成長に寄与すると私たちが心の中で知っている努力を避けているのです。さらに悪いことに、私たちはこのような態度を正当化する傾向があります。あたかも、私たちに与えられた時間、資源、機会の膨大な浪費が、私たちの「善意」(ガラテヤ1章10節)によって正当化され、神をも説得できるかのように思うのです。

このようなクリスチャン生活に対する、私たちの欠陥のある態度を自己正当化する傾向は、私たちの時代のために選ばれた名前「ラオデキヤ」の語源に見ることができます。「ラオデキヤ」は、その

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

語源からすると「人々」と「正義」を意味する二つのギリシャ語の形態素<形態素:単語の最小単位>の複合語であり、「[自己]正当化する群衆」と訳すことができます。この意味とニコライ派(「民衆が征服する」)の意味との間には微妙な違いがあります。現代においては、私たちクリスチャンが、神を求める(求めるという言葉が正しいかどうかさえわかりませんが)ことに非常に無頓着な態度を持っていて、自分たちがどうあるべきか、何をなすべきかという自分で造り上げた低い基準に安住していることが問題なのです。エンターテイメントに重点を置くメガ・チャーチや、耳障りの良い「全ての人のための-キリスト教的アプローチ、そして真理を犠牲にしてまで包括を迫及する(真理の「攻撃的性質」を取り除く、と言ってもいいかもしれません:ガラテヤ 5 章 11 節参照)全体的な「相對主義的」哲学は、この生ぬるい傾向の徴候です。このような風潮は、この後の時代において、宗教的な炎や熱意がほとんど唯一見出せるのはカルトや異端の発信するものだけ(それゆえ「真の知識によるものではない」)ので実のないもの:ローマ 10 章 2 節参照)という事態に至らせてしまいました。

靈的無関心(生ぬるさ)の対応する相對主義は、ラオデキヤの時代に早くも教会に伝染し始めました。キリスト教の真理に対するこのような哲学とアプローチの方法が、薄っぺらな思考をもたらすようになったことは、一目瞭然です。さらに悩ましいことは、イエス・キリストと私たちの関係は、聖書に含まれる真理の凝縮された力を離れては、決して深く純粹で燃えるようなものにはなり得ないという事実です。聖書の教えを無視したり、その重要性を少しでも低下

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

させたりすることは、イエス・キリストとの緊密な関係のダイナミックな可能性を無視することであり、その結果、靈的生活におけるあらゆるもの、特に私たち一人ひとりが召されている個々の務めに支障をきたすのは決まりきったことです。

ヒラデルヒヤの時代の後に続いた(相対的な)政治的安定、物質的繁榮、科学的進歩は、機会という観点から見れば祝福であり、それは個々のクリスチャンにかつてない可能性をもたらしました。クリスチャンが全体的に、これほど多くの時間を持ち、これほど多くの自由を得、これほど多くの靈的前進に必要なもの(原語の聖典、教育の機会、書籍、パンフレット、十分な訓練を受けた教師など、あらゆるもの)を利用できた時代は他にありませんでした。しかし、世俗の領域でしばしば起こるように、「繁榮テスト」はほとんどの人間にとって難度の高いものであり、主に従う者たちも免れることができるわけではありません。

しかるにエシュルンは肥え太って、足でけた。[そう、]あなたは肥え太って、つややかになり、自分を造った神を捨て、救の岩を侮った。(申命記32章15節)

(宗教改革の多くの時期にそうであったように)迫害の時代には、信者は真の優先順位を維持しやすくなります。神と共に堅く立つことによつてのみ救いがあり、世俗の力に頼ることの愚かさが誰の目にも明らかになるからです。このようなく世俗の>勢力が沈静化し、(少なくとも教会に関する限り)静穏さを増す世界、すなわち

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

科学と物質至上主義の宗教が徐々に影響力を増している世界では、妥協が教会にもたらす利点は、少なくとも世俗的な観点から見ればとても明らかです。他方、異-世界に焦点を当てていることは、利権的物質的観点からも不利であることは明らかです。

クリスチャンの間でさえ、チャールズ・ホッジCharles Hodgeの教えよりもチャールズ・ダーウィンCharles Darwinの教えに親しむ人の方が多というのも、不思議なことではありません。この二人は、靈的な観点から見ると、ラオデキヤの時代の始まりの象徴に当たる人物です⁵⁵。ホッジは、おそらく世界的に有名な最後の偉大な聖書志向の神学者であり、靈的な手段によって、また神の条件に

⁵⁵ 1878年に亡くなったホッジは、『組織神学』で最も有名ですが、この神学書は、改革派の教えの最良の部分を注意深く組み合わせるとともに、科学という新しい宗教に対する学術的な弁明を述べたものです。『種の起源』で知られるダーウィンは、その数年後の1882年に亡くなりました。オックスフォードの『キリスト教会辞典』Oxford Dictionary of the Christian Churchによれば、彼は「次第に宗教の不可知論者となった」。したがって、ダーウィンはラオデキヤのクリスチャンの典型であり、迷い、揺れ動き、ついには懐疑と科学への信仰が神への信仰を消し去ってしまった(らしい)のです。この二人の中間に位置する人物として、F.デリッチュ F. Delitzsch (1890年没)も挙げられるでしょう。デリッチュは、その著作が今日でも聖書の真理を追究する人々にとって多大な価値を持つ偉大な人物ですが、(筆者に言わせれば、世俗に傾倒した息子の影響で)老年になってから揺らぎ始め、最終的には旧約聖書の「現代的」本文批評を信用するようになりました。このように、彼の生涯は、「科学的証明」の影響の下で信仰が崩壊していく、ヒラデルヒヤ改革派から「現代的」ラオデキヤ派への変遷モデルとして見る事ができます。

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

基づいて聖典から真理を探究するために、言語学的、体系的、歴史的知識を応用した最高峰の人物です。一方、ダーウィンは、神からも聖書からも離れ、物質界から「答え」を経験的に探求するという、(真理とは呼べない)まったく異なる観点を持つ哲学的影響をもたらしました。前者は神のみに方向性を求め、後者は神の方向にはほとんど目を向けることなく、人間と人間の科学的能力に方向性を求めました。科学技術の時計の針を戻したいとは誰も思わないでしょうが、ダーウィンの視点が台頭し、社会全体においてホッジのアプローチが一般的に支持されなくなったこと(つまり、あらゆる方面から科学への敬意が高まり、それに伴って神の言葉から真理を求めることへの敬意が低下したこと)は、この七つの教会時代の最後の時代の一般的な特徴に少なからず寄与していると言ってよいでしょう。先ほど述べたように、サルデスでさえ、「**衣を汚さない人**」がいたのに、ラオデキヤでは、私たちのほとんどが、誇るべきでないこと(物的世界での力量)を過度に誇る罪を犯しており、一般的に、教会のどの世代よりも、主や聖書への関心が低いのです。読者の皆さん、私たちの中にこの傾向に「逆らう」ことに熱心な者がいないとは言いません(この言葉を書いたり読んだりすることが、まさにそのような健全な態度の表れであることを期待したいものです)が、それでも私たちは皆、時代の子供なのですから、私たちは皆、特に私たちに向けられた主の御言葉を心に留め、この点について自分自身を吟味する必要があります(詩篇139篇23-24節; 第二コリント13章5節; ガラテヤ6章4節)。

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

聖書を堅く守っている私たちは、現代世界の膨大な唯物論的知識に照らすと、それがとんでもない、突飛な、まったく信じられない視点であるかのように、常にその哲学的基盤からそのような立場を守るよう求められています。しかし、聖典とその權威に対する攻撃は、コリントの人々がパウロの靈感と權威を拒絶したのと同じように、適切な価値観を覆すことで、しばしば「良家の者<正統派の仲間>」(すなわち、妥当なもの)として受け入れられるのです。(第二コリント 11 章 20 節; ヨハネ 5 章 43 節)。また、コリントの人々が、自分たちを粗末に扱う人々に対してより敏感に反応したように(第二コリント 11 章 20 節; パウロが不本意ながら厳しく対処した例を参照してください: 第二コリント 7 章 8-16 節)、私たちの時代にも、ぬるま湯以上のものを求める人々が、しばしば(「奴隷にし、搾取し、利用し、押しつけ、顔を平手打ちする」ような:第二コリント 11 章 20 節)超權威的な偽教師やカルトに引き込まれます。この悲しい現状は、指導者と信者、「聖職者と信徒」の両方が失敗した結果です。一般的に言えば、私たちラオデキヤの時代は、ほとんどの場合、一般的なクリスチャンが教師や指導者の權威をそうすべきように尊重しておらず、教師や指導者はそもそも彼らの尊敬に値していません。この基本的方程式の両者が十分に条件を満たした例は、ほとんどありません。すべての関係者に欠けているのは、真のコミットメント、真の献身であり、私たちが口々に人生で最も重要だと主張するもの、すなわち主イエス・キリストとの関係のために犠牲を払い、努力する真の意志なのです。

私たちの弁明として、私たちの時代のクリスチャンの熱意という

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

炎に対する悪魔の攻撃は、信じられないほど巧妙かつ効果的であつたと言えます。敵は、私たちの存在、価値観、基準を直接攻撃するのではなく、19 世紀の初めから、あからさまな背教よりむしろ、熱心な靈性と差し控えることのない信仰を徐々に萎縮させ、氣力を削ぐ策略をしてきたのです(艱難期の前半に実際に勃発する背教のための完璧な備えです)。この戦術は、ラオデキヤ時代の人間生活と社会のあらゆる分野を通して見つけることができます。ダーウィニズムや科学的相対主義(すなわち、どのような真理があるのかは物質的な領域に求めなければならない)であれ、精神分析(すなわち、問題解決の手段は神によるものではなく人間的なものによるもの)であれ、聖書に対する学者たちの懷疑論(すなわち、「高等批判」など)の高まりであれ⁵⁶、無数の「現代」社会の傾向は、その実際的な影響として、信仰を減退させています。そして、この攻撃には二面性があります。私たちは、主要な科学者や学者たちから、私たちの信仰は見当違いであると繰り返し言われ続けてきただけでなく、私たちもまた科学や技術を神の真理の代用品として、提供する誘惑に駆られてきたからです。理想を言えば、神を信じる私たちは、個人的な糧と個人の務めを果たすために(聖別された方法でそうするならば)、この世のメディアをあたかもその糧の手段であるかのように信賴することなく(私たちが持っている真に良いものはすべて神から来ています:ヤコブ 1 章 17 節; ヨブ 1 章 21 節)、現在手みじかにあるものは何でも利用

⁵⁶ 1871 年頃のウェルハウゼンの著作が原典批判の始まりとされ、1901 年頃のグンケルが形式批判の始まりとされています。

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

することができるはずでず。しかし、主ではなく、この世のものに頼るようになるたびに、私たちの信仰は損なわれていきます。確かに科学的、物質的、技術的手段の発展、拡大、歡喜が、私たちの集団的思考において、大いに評価されるようになったというのが現代の傾向なのです(この傾向に対して、信者は注意深く身を守る必要があります)。

科学技術の面では、これは特に医学の領域で顕著ですが、サタンは、人間の潜在的な死への恐怖の鉄髓を強力に打ち込んできて、身体的な問題が生じたときに、神を無視して癒しの術に頼ることを奨励し、信者の信仰を鈍らせようとしています(ヘブル 2 章 15 節; 出エジプト 15 章 26 節, 23 章 25 節; 詩篇 103 篇 3 節, 107 篇 20 節; ホセア 11 章 3 節参照)。学問の面では、聖書の真理に対する単純な信仰が腐食していることは、19 世紀後半から 20 世紀にかけて、聖書を「学問的に」扱う傾向からはっきりと見て取ることができます。原典批判、形式批判、再編集批判、考古学的修正主義、聖書の正確さに対する科学的攻撃、「歴史的イエスの探求」、福音書の真の「ケリグマ<信仰を引き出すために説いたイエスの本質的な知らせ>」を<教育や指導などから>分離しようとする試み、脱神話化などなど、これらはすべて、言葉では聖書の「真理の探求」を言っているけれども、実際のところは(聖書の真の力に対する嫉妬と傲慢さから)独りよがり、自己賛美的な偽物で、聖書を破壊することに専念しています。聖書を教え、理解するために設立された偉大な学問機関が、ほんの数世代のうちに、(そもそも聖書に対する関心がどの程度あるかは別として)今や聖書に対する

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

反論にしか関心を示さないという事態に至っているのです。

ラオデキヤが七つの教会時代の中で唯一、(真の信者たちが完全に撤退を余儀なくされた「死んだ」サルデス以外には)外的にも内的にも反対意見が述べられていない私たちの時代までに、全体的に自己満足の澱(おり)が私たちの思考に徹底的に堆積してしまい、少なくとも目に見える様々な教会組織の教えに関する限り、もはや善悪の区別をつけることがほとんどできなくなってしまったことを意味しています。その結果、対立するグループが鋭い見解を表明する代わりに、「熱くも冷たくもない」、ほぼ均質なグループの集合体(表面的な外見上のみの違いだけ)が見られるという状況が生まれてしまっています。この悪魔的な相対主義戦略の効果は明らかです。真理に対する直接的な挑戦の代わりに、繁栄、怠惰、緩い基準、神の言葉に対する無関心によってもたらされた信仰の妥協は、私たちの時代の教会を(全体的に見れば)次第に、ほとんど無味乾燥で、表面的で、むなしく、「生ぬるい」機関にってしまったからです。神の御言葉、イエス・キリストの御姿、御教えへの献身という点で、この「耳障りのよい」キリスト教は、生演奏の偉大な交響曲の活力を、録音された「エレベーター・ミュージック」のようなバックに流れる音楽へと本質的に低下させてしまっています。これと同じように、私たちの「キリスト教」は、大切にされ、尊敬され、全神経を傾けるべきものではなく、軽い娯楽のための、単なる無償の付随的なものになってしまっている場合があまりにも多いのです。

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

これに関連するエンターテインメントの部分について、私たちは少し考えてみる必要があります。すべての真剣な事業において、(表向きは注目を集めるために採用された)娯楽の要素が、手段であると同時に目的になってしまうのは非常に容易に起こることです。私たちの救いの神と御子の犠牲が、それだけで私たちの注意を引くのに十分でないのなら、何のための娯楽なのかと問われるかもしれません。しかし、現代においてキリスト教と称されるものの多くに残されているのは、愉快で楽しい気晴らしだけです。ぬるま湯に浸かっているクリスチャンにとって、真の靈的な内容がほとんどない、あるいはまったくない、楽しさいっぱいのは、神に対する責任を楽しく「ベースカバー(責任を果たす)」してしまうための完璧な方法のように思えます。これは、キリストがこの聖句で私たちに非難している「生ぬるい」の定義そのものに近いです。信仰よりも科学、靈性よりも物質主義、内面的な現実よりも見栄え、質、真の实体、犠牲よりも量、名声、享受など、あらゆる面で「ぬるま湯」に浸るこの傾向は、艱難期の前半に予言されている「大背教」に、私たちをより一層陥りやすくしてしまいます。

キリストによる御自分についての記述：

1.『アーメンである方、確かで真実な証人、神による創造の源である方がこう言われる——。』<新改訳IV>

私たちに対するキリストの御自身の説明におけるこれらの要素はすべて、キリストの言葉の權威ある性質を物語っています。つま

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

り、私たちの時代の基本的な認識全体に反して、私たちは真理と権威の源ではないのです。むしろ、イエス・キリストこそ、教会の長として、究極的で唯一の真の真理の根源であり、私たちの究極的で唯一の真の権威なのです(第一コリント11章3節; エペソ1章22節, 5章23節; コロサイ1章18節, 2章19節)。

「**アーメン**」:「アーメン」としての方であられるイエスは真理であり(ヨハネ 14 章 6 節)、真理を確認し宣言するお方です。ヘブル語からのギリシャ語音訳である「アーメン」は、「真理にあって」、「真くまこと>に」という意味です。それゆえ、私たちの主の名称にあるように、主は真理を正しく表しておられるだけでなく、主が真理であられるという事実を明らかに強調しているのです。このことは、すべての答えを持っているのは自分たちだと信じていることを、行動や言葉によって明言している教会時代の構成員にとって、注意を払わなければならない重要なこととなります。自分自身の基準を確立し、そのような自分自身で開発した基準によって自分自身を(好意的に)判断することの愚かさは、(聖書によってそう宣言されているように:第二コリント 10 章 12-13 節)火を見るよりも明らかであり、信じられないほど傲慢なことです。クリスチャンの信仰と実践の唯一の正しく適切な基準は聖書であり、神の御言(ことば)である「ロゴス」であられる私たちの主イエス・キリストの言葉そのものです(ヨハネ 1 章 1-2 節, 1 章 14 節, 5 章 39 節, 6 章 63 節, 8 章 47 節, 17 章 8 節, 18 章 37 節; 第一ヨハネ 1 章 1 節; 黙示録 19 章 13 節; 以下も参照:イザヤ 55 章 11 節; ヨハネ 17 章 17 節; ロ

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

一マ 10 章 17 節)。

「証人」：私たちの自分自身についての虚偽の主張(本当は盲目で、裸で、靈的に貧しいのに、豊かで裕福だと主張する)への反論として、キリストはここで、問題の本当の真理を示す「証人」であり、「信頼できる」(すなわち、報告することすべてにおいて「忠実である」)、「真実である」(すなわち、その証人の内容は完全に正確である)証人であることを示しておられます。それゆえ私たちは、自分の目にはどううまく弁解しようとも、主の御前では弁解の余地がないのです。信頼できる忠実な証人として、真理は私たちからではなく、主から発せられます。私たちは、自分の考えや言葉、行いによって聖句を軽んじるかもしれませんが、それでも主の御言葉は頂点に君臨しています。さらに、この種の私たちの自己欺瞞がすべて、主の御臨在の燦然と輝く光の中で溶け去り、義をもって世を治めるために主が再臨される日が間近に迫っているのです。その日には心の秘密は暴かれ、すべての真実がさらされるのです。(ローマ 2 章 16 節、1コリント4章5節、伝道の書12章14節参照、イザヤ26章21節、1コリント3章13節、2ペテロ3章10節)

「創造の源」：私たちはキリストが造られた被造物に過ぎませんが、御父の代理人として、イエスはまさに「創造の源」です(ヨハネ 1 章 3 節; 第一コリント 8 章 6 節; コロサイ 1 章 16 節; ヘブル 1 章 2 節)。私たちの主が御自身について記述しておられるこの最後の言葉は、創造主(「陶器師」:イザヤ 29 章 16 節, 45 章 9 節, 64 章 8 節; エレミヤ 18 章 6 節; ローマ 9 章 20-24 節)の力と權威を

7.ラオデキヤ:退廃の時代(黙示録 3章 14-22 節)

前にして、造られたもの(「陶器」)の傲慢さが嘲笑の対象として取り上げられる、聖書の多くの箇所を意図的に思い起こさせてくれるものです。このタイトルが明らかにしているように、私たちが主から指導を受けなければならないのは確かであり、その逆ではありません。私たちが造られたお方としてのキリストの本質的な權威を考慮することは、何が受け入れられ、何が受け入れられないかをキリストに指図しようとする、現代にはびこる態度を正すことになるはずです。

キリストの特別なメッセージ

1. 「わたしはあなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。このように、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう。」: ラオデキヤの時代における、私たちの集団的な働きの質に関するキリストの最初のコメントは、非常に衝撃的なものであり、明らかに私たちの痛いところを突こうとしています。なぜなら、この時代の信者が自分たちを弁護しようと考えることがあるとすれば、それはまさにこのことだからです: 「熱意、靈性、靈的成長において欠点が見つかるかもしれないが、私たちの行いがその欠点を補ってくれるに違いない!」。これは、古今東西、あまりにも多くの信者や見せかけの信者が犯してきた、一般的かつ危険な誤りです。私たちが「神のために何かをする」ことができるという考えは、全くの誤りであり、傲慢であり、神を冒瀆する考えです(第一コリント4章7節; ローマ11章35節も

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

参照)。私たちは行いによって救われたのではなく、恵みによって救われたのです(エペソ2章8-9節; ローマ11章6節参照)。それなら、どうして恵みから離れて自分達の行いの報酬を期待できるのでしょうか? (ピリピ2章13節; エペソ2章10節)。確かに、イエス・キリストを信じる私たちの人生に対する神の目的の大部分は、「悔い改めにふさわしい行い」をすることです(マタイ3章8節, 5章16節; ルカ3章8節; 使徒行伝26章20節; ガラテヤ6章9-10節; 第二テサロニケ3章13節; テトス2章14節, 3章1節, 3章8節, 3章14節; 第一ペテロ2章12節, 2章15節)。しかし、ラオデキヤの住人は、賜物、特に神が私たちに与えてくださった賜物よりも、自分たちの働きに感心しているため、私たちが持っているすべてのもの、「命と息と万物」(使徒行伝17章25節)を与えてくださったのは、実は神であることに気づかないことが多いのです。実際、私たちが神に仕えることができるのは、神が私たちに個人特有の靈的賜物、特定の務めを与え、その効果をあらかじめ定めておられるからなのです(第一コリント12章4-7節)。主は私たちの奉仕を導き、力づけ、励ますために御霊を与えてくださいました(ゼカリヤ4章6節)。そして主は、永遠の過去において、私たちがなすべき業そのものさえも備えておられました(エペソ2章10節)。まじめに聖書を読むすべてのクリスチャンにとって、主の御前で誇れる根拠は、私たちが行った業によるものでないことは明らかなはずです(ローマ4章2節)。なぜなら、私たちは主から離れては何もできないからです(第一コリント12章3節)。真の良い行いは、クリスチャンの継続する靈的な歩みの一部なのです。そのような行いが有効であるためには、その人がイエス・キリストを信じる者でなければならないことは言うまでも

7.ラオデキヤ:退廃の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

ありません(行いによる救いはないからです)。さらに、靈的に成長し、自分の独特な賜物を認識し、神が私たち一人ひとりのためにお定めになったユニークな働きに備えた後に初めて、最も効果的に実をもたらすようになるのです。言い換えれば、神の御計画、御意志、そして神の基本的なルールに従って行われたいものは、神に「良い行い」と判断されるとしても、わずかな実りしかない可能性が高いということです。イエスは真のぶどうの木であり、私たちはイエスの中にある枝にすぎません。イエスが私たちに言われたように、「イエスの中にとどまる」ことによつてのみ、私たちは真の実を結ぶことができます(ヨハネ15章1-8節)。つまり、真にイエスの弟子であることによつてのみ、私たちは「生ぬるい」業ではなく、真に神を賛美する業を生み出すことができます(ヨハネ15章8節)。

それゆえ、「主の名によつて与えられた一杯の冷たい水」、つまり正しい動機から正しい方法でなされた正しい行いは、その報いを失うことはありません(マタイ 10 章 41-42 節)が、キリストのために表向きだけ与えられた何百万もの水、あるいは間違つた動機から与えられた何百万もの水、あるいは神のご計画に沿わない悪い目的のために与えられた何百万もの水は、よく言っても自己宣伝のための無意味な行為です(悪く言えば、自分自身の偽善を推し進めようとする傲慢な試みです)。業による救いと個人的な義を求めるこの誤りは、宗教改革前の目に見える教会で制度化され、その制度における靈性の死の少なからぬ要因でした。神が私たちに何かを必要としていると考えるのは、傲慢の極みだからです(ロ

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

一マ 11 章 35 節)。そのような態度でいるとき、私たちは偶像崇拜をする異教徒よりも優れていると思いますか？(使徒行伝 17 章 24-25 節)。現代の地上に見える教会で行われていることは、表向きはキリストのために行われていても、実際には「木、干し草、切り株」にすぎず、偽りの動機から生まれた肉の業であり、キリストが私たちの人生を評価するときには燃やされてしまう運命にあるのです(第一コリント 3 章 12-15 節)。

このようなラオデキヤの「業」を、主は総合的に評価されたのです。明らかに、この時代に行われたことのすべてが無駄になったわけではないものの、この非難がラオデキヤの性格を如実に示しているという事実は、私たち皆を立ち止まらせるはずです。それゆえ、この一面的な評価に続く「熱心になって悔い改めなさい」という命令は、私たち個人には当てはまらないとどんなに感じて、この時代のすべての信徒が心に刻むべきものです。というのも、主の御言葉の論理に意味があるとなれば、この評価が他の人のためのものだと感じるのと同じだけ、私たち自身にも当てはまる可能性があるからです。結局のところ、(靈的な意味で)自分が豊かで裕福だと思っている人々は、実際には貧しく裸で盲目なのです。

「熱心になって悔い改めなさい」というキリストの命令を心に留めるよう、自分自身を奮い立たせる必要があることは、ここで主が(ラオデキヤが感染していた)自己満足の態度を明らかに嫌っていることを考えれば、なおさらです。自己満足とは、(靈的に)熱くも冷たくもなく、神への熱意に関してはぬるま湯に浸かっている状態の

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

ことで、主に優先順位の問題です。私たちは神を愛し、大切にしていると言います…しかし、どれだけでしょうか？ 神は、私たちに代わって御子を究極の犠牲として捧げるほどに、私たちを愛し、大切にしてくださいました。神の愛、神の「熱意」は、私たちに代わってなされたこの至高の「わざ」によって、また、私たちを気遣い、配慮してくださる神の無数の、多様で奇跡的なわざによって、明らかにされています。私たちはそれに応えて示す成果があるでしょうか？ ラオデキヤの場合、その答えは「まったくない」のです。なぜなら、彼女の働きは「熱くも冷たくもない」ものであり、激しい愛と犠牲の伴うものでもなく、真の「熱心さ」もないからです。

ラオデキヤの時代における優先順位と言え、神は数ある中の一つに過ぎず、一般的に言えば、最優先事項ではありません。熱心で嫉妬深い神(私たちの神はそういう方です)は、日々、そして御子という賜物において、かつて、そして永遠に、圧倒的なまでに、私たちに対してその熱心さを示されました(第一ヨハネ 4 章 10 節)。この神を、尊敬はするものの、それほど高くではなく、他のすべての人や物(神々であれ、偶像であれ、偽りの優先順位であれ)を超えて、何よりもまず尊敬するというものではないという生ぬるい態度は、忌むべきものです(「わたしの前に他の神々を持つてはならない」は第一の戒めです: 出エジプト 20 章 3 節)。神の目から見て受け入れられる唯一の態度は、パウロが告白している態度です。(神から離れて)この世とそこにあるすべてのものを「ごみ」とみなし、この世で成し遂げられたこと、得られたこと、あるいは成し遂げられる可能性のあることはすべて、来たるべき日にイエス・キリストの承

7.ラオデキヤ:退廃の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

認を得ることに比べれば、無に等しいとみなすことです(ピリピ 3 章 7-11 節)。

まさにこの永遠の視点こそ、私たちの時代に最も一貫して欠けているものです。以前の時代の明白な信仰とは対照的に、現代では、天国の現実、死後の永遠の命、永遠の報酬、復活についての疑念が絶え間なく聞かされます。そして、健全で熱心なクリスチャンの歩みに不可欠なこれらの真理が受け入れられていても、その論理が私たちの生き方に適用されていないことがあまりにも多いのです。パウロの「私にとって、生きることはキリストであり、死ぬことは益である」(ピリピ 1 章 21 節)が私たちの視点であるべきなのに、あまりにも多くの場合、私たちの態度はむしろ、現在の生活を尊び、死を恐れているのです。死を恐れること、来たるべき栄光を疑うこと、そしてこの地上生活に過度の近視眼的な焦点を当てることは、信者の場合、すべて聖書の真理を学び、適用することを一貫して怠っていることの症状であり、優先順位の低さが、真の現実の理解や適用の低さに結びついていることの症状です。要するに、原因も結果もぬるま湯に浸かっていることの症状なのです。キリストの真の熱心な信者として、私たちは、神がこの地上での私たちの忠実な奉仕に報いてくださることを理解し、信じなければいけません(ヘブル 11 章 6 節; 以下も参照:第一コリント 3 章 8 節; ヘブル 6 章 10 節, 11 章 26 節; 黙示録 11 章 18 節, 22 章 12 節)。地上で得られるものと比べて、来たるべき報いの比類なき価値を信じ(ローマ 8 章 18 節; 第二コリント 4 章 17 節; マタイ 6 章 19-20 節; ピリピ 1 章 23 節参照)、復活を信じることです(ヨハネ 11 章 25

7.ラオデキヤ:退廃の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

節; 第一コリント 12 章 19 節)。このような深い現実を通して、私たちは死を恐れる必要から解放されました(ヘブル 2 章 14-15 節; 第一ヨハネ 4 章 16-18 節; 第一コリント 15 章 54 節; 第二テモテ 1 章 7-10 節参照)。私たちが将来手にするものは、この世のどんなものよりもはるかに優れているのですから、私たちは来るべきものに焦点を合わせるべきなのです(コロサイ 3 章 1-4 節)。私たちが愛すべきは今の世ではなく(ヤコブ 4 章 4 節; 第一ヨハネ 2 章 15-17 節; 以下も参照下さい: ルカ 14 章 26-27 節; ヨハネ 15 章 19 節)、私たちの真の市民権がある来たるべき世なのです(ピリピ 3 章 20 節)。

このようなクリスチャン疑惑の文化は、私たちのクリスチャンとしての生き方が生ぬるい(つまり、神と神の真理を求めるあらゆる機会があるにもかかわらず、靈的に成長しなかった結果、靈的に未熟である)ことに起因していることに加え、先に述べた相対主義が少なからず影響しています。問題の一部は、私たちがこの時代に、目に映るものによって左右されただけでなく、見かけの現実を受け入れてしまったことです。この世の権威によって強化された相対主義の説教者に耳を傾けすぎる一方で、このテーマに関する神の言葉にはあまりに注意を払わないできました。この世に真に独立した主体は存在しないことを忘れてはなりません。私たちは自分のものではないのです。それゆえ、(それがこの世の極悪非道な支配者であれ、御霊であれ: ガラテヤ 5 章 16-18 節) 私たちは聞くもの、注意を向けているものを信じます。私たちは一つの教会の時代として、この世の雑音や知恵、あらゆるメディアから途切れ

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

なく流れ出る科学的、技術的、文化的なお喋りに過度に関心を寄せてきたことは否定できません。しかし、私たちは神にどれだけ注意を払っているのでしょうか？神と神の助言を求めることに、どれだけの時間と労力を割いているのでしょうか。聖書を読む頻度は？どれだけの頻度で祈っているのでしょうか。神の御言葉の教えを求め、理解することにどれだけの時間と労力を費やしているのでしょうか。なぜなら、私たちがこの世にいるのは、真理に対する弱い評価(すなわち相対主義;エレミヤ 23 章 26 節参照)を通して私たちの思考の型に神を押し込むためではなく、主の真理と御霊を通して私たちのこの世的思考を完全に**変える**ためだからです(ローマ 12 章 2 節; エペソ 4 章 22-24 節; 第二コリント 5 章 17 節; コロサイ 3 章 9-10 節参照)。

これらはすべて、かつての偉大な信仰者たちが(聖書とその教えにしっかりと根を下ろして)知り、理解していたことであり、彼らが考え、話し、行うすべてのことの基本原理として、心の奥深くに据えられていたものです。真理を本当に心から信じる者にとって、真理は人生のすべてに影響を与えるものであり、真理を信じるそのような信念を離れては、真の熱意や熱心はありえません。一時的で短時間の熱狂は、さまざまな手段(激励の言葉、感動的な音楽、感動的な儀式など)によって錬り上げられたり、誘発されたりするかもしれませんが、そのような偽りの熱狂は、それを生み出した刺激がなくなるとすぐに朝もやのように消えてしまい、人生の重圧(ましてや来たる艱難期の重圧)のもとではまったく役に立ちません。神のみことばの一貫した教え、すなわち神の真理のあらゆる側面

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

と聖句のあらゆる部分を掘り下げる教えの代わりに、このラオデキヤの時代には、聖書が多くの重要な面で語っていることの、表面的で単純化された概説に落ちてしまっています。この不健全な傾向の三つの主要な例として、「携挙」、「組織的安全保障」、「永遠の安全保障」の教えが挙げられます(これら三つはすべて、私たちが過去に研究したものです:ペテロの手紙シリーズ#27「信仰を脅かす三つの教理」を参照してください)。艱難期に備えることの重要性は、「携挙」という単純で誤った教えによって損なわれてきました。靈的成長のために個人的責任を負うことの重要性は、教会員であることや教派中心のキリスト教という誤った強調によって損なわれてきました。個人の聖化とイエス・キリストの弟子となることの重要性は、「一度救われれば、いつでも救われている」という誤った教えによって損なわれてきました。これら三つの教えはすべて、聖書の見解を間違っただけで述べるほど単純化しすぎたもので、聖書への不注意がいかにも現代の生ぬるさを助長しているかの一例です。というのも、もし私たちが艱難期に直面する必要がなく、単に組織に参加しているだけで靈的に「正しい道を歩んでいる」のだとしたら、そして、この世で何をしようとも永遠に安泰なのだとしたら、神が私たちに求める熱心さの自然な動機の多くが欠けてしまうからです。実際にはそのようなことはないのですが、現代において最も熱心であるべき多くの人々の心の中では、この種の誤った教えが真実とみなされ、そうでなければ熱心になるはずの神への熱意の多くを消してしまっています。

信仰を萎縮させるこれら三つの有名な誤った教えと同様に、こ

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

の地上における物質的繁栄、特に並外れた物質的繁栄は、イエス・キリストを通して神と密接な関係を持つことの究極的かつ必然的な結果であるという考え方があります。この考え(その最も極端な形は「繁栄の福音 (prosperity gospel)」として知られています)の誤りについては、以前にも詳しく扱ったことがあります。ここで指摘する必要があるのは、私たちの物質的な豊かさが、私たちの側で何らかの特別な靈的地位に到達することと何らかの形で関係しているという暗黙の、あるいはほとんど意識していない思い込みでさえも、必然的に事象を見誤るものであり、信じられないほど危険なものであるということです。⁵⁷ 神は靈的な面だけでなく物質的な面でも祝福されますし、過去の偉大な信仰者たちが驚くべきこの世の祝福の受益者であったことは事実です。ヨブ、アブラハム、ダビデらの、その類まれな富と地位は神のおかげであると聖書に記されています。しかし、この神の偉人三人が耐えた類まれな試練や苦難を経験したいと思う人がどれほどいるのでしょうか。また、貧しさ、特に現代なら貧しいと見なされる貧しさが信仰者の共同体の間の常であった初代教会の人々 (使徒行伝 2 章 44-45 節; ヤコブ 2 章 5-7 節, 5 章 1-6 節参照)よりも、今日の信者が靈的に優れていると正直に考えている人がいるのでしょうか? しかし、当時の比較的貧しい信徒たちの中の貧困に苦しむピリピの信徒たちは、より裕福なコリントの信徒たちよりも優れた聖書の賛美を受けています

⁵⁷ 「悪魔の反乱」シリーズ第 4 部「サタンの世界システム」の 1.2 節をご覧ください。さらに、イクシスのウェブサイトには、このトピックに関する多くの電子メールによる回答が掲載されています(リンク:過去の投稿を参照)。

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

(ピリピ 4 章 10-19 節と第二コリント 8 章 1 節-9 章 5 節を比較)。

兄弟たちよ。あなたがたが召された時のことを考えてみるがよい。[キリストに召されたあなたがたは]人間的には、知恵のある者が多くはなく、権力のある者も多くはなく、身分の高い者も多くはない[という事実を]。それなのに神は、知者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選び、(この世から見て)有力な者を無力な者にするために、この世で身分の低い者や軽んじられている者、すなわち、無きに等しい者を、あえて選ばれたのである。それは、どんな人間でも、神のみまめに誇ることがないためである。(第一コリント1章26-29節)

これらの節に述べられている原則は、個人的な富の問題にも等しく当てはまります。相対的な繁栄は人生の状況であり、最終的には主の摂理とご配慮に左右されます。物質的な富が、神がその人に与えておられる目的を達成することを可能にする限り(例えば、贈与の賜物:ローマ 12 章 8 節)、それは霊的な財産と見なされるかもしれません。しかし、それが信仰者を神から遠ざけるようなものであれば(富にはそのような傾向があります)、それは霊的に不利な点として考えるのが正しいでしょう。これが、主が「金持ちの若い支配者」に対して、持っているものをすべて貧しい人々に与えなさいと命じられた真意です(マタイ 19 章 16-26 節)。キリストは、未来の弟子たち全員に、財産をすべて清算して何も持たなくなれと言

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

われたのではなく(それでは神に仕える手段がなくなってしまうます:ルカ 22 章 35-36 節参照)、むしろ富を蓄えるのではなく、主により頼むようにと言われたのです(マタイ 6 章 19-24 節; ヨブ 31 章 24-28 節; 詩篇 49 篇 6 節, 52 篇 7 節, 62 篇 10 節参照)。

サタンがヨブについて言った非難めいた言葉、「彼が持っているものすべてを打ちなさい。そうすれば、彼は面と向かってあなたを呪うでしょう」は、普通に考えれば、全くの間違いだったことは(ヨブ 1 章 11 節)、悪魔も分かったことでしょう。というのも、私たちのほとんどを神から引き離す傾向があるのは繁栄であり、苦難は正反対の効果をもたらすからです(詩篇 78 篇 34-35 節; 次の節も参照:申命記 4 章 30 節; ホセア 5 章 15 節)。ヨブ、アブラハム、ダビデはみな、神によってすでに富と権力を得ていたにもかかわらず、並はずれて神を敬い、神とともに歩み続けたという点で例外的でした。それゆえ、この三人がそれぞれ、私たちすべての模範として、信仰の純粹さと神の憐れみの深さを示すために、特別な試練を受けるよう求められたのは偶然ではありません(ヘブル 11 章 17-28 節; ローマ 15 章 4 節参照)。物質的な繁栄に対するより多くの一般的な反応は、それが神からの祝福であろうとなかろうと、神との関係をないがしろにし、そのような富の存在が靈的な健康の表れであるという誤った思い込みをすることです。繁栄に対するこのような人間の一般的な反応の結果は、ラオデキヤの場合に見られるような自己満足です(申命記 8 章 10-20 節; 31 章 20 節, 32 章 15 節; 箴言 30 章 7-9 節; イザヤ 32 章 9-14 節; エゼキエル 28 章 2-5 節; ホセア 12 章 8 節; アモス 6 章 1-7 節; ゼパニヤ 1 章 12-

7.ラオデキヤ:退廃の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

13 節)。

しかし彼らは食べて飽き、飽きて、その心が高ぶり、
わたしを忘れた。(ホセア13章6節)

私たちが意識的に、あるいは無意識のうちに、自分の繁栄を自分の手柄とし、傲慢にも自分自身や自分の財産を最も重要なものと考え始めるとき、私たちの目には神の存在は小さく映るようになります！今のような物質的な幸福があっても、ラオデキヤは千年王国ではありません。そして、上に述べた教会の時代の流れを見れば、私たちが今日享受している物質的な繁栄は、私たち自身の努力によるものであるというよりも、ヒラデルヒヤの時代から受け継がれている祝福の結果であることは明らかです(儉約家の両親から受け継いだ遺産を、浪費家の子供たちが享受しているようなものです)。私たちが、(私たちの「偉大な努力」と「偉大な霊性」の結果として)物質的にさらに大きな驚嘆の入り口に立っていると感じているすべての人々にとって、ラオデキヤの時代が代わりに「吐き出され」、かつてない祝福の時代ではなく、艱難期へとまっすぐに預けられ、そこで自己満足が終わりを告げることを知ったときの衝撃はいかばかりでしょうか。

そういうわけですから、私たちは、現代の特徴であるこの恐ろしい自己満足と戦う決意をしましょう。神と御子を、私たちの心の中で、そして生活の中で第一に考えましょう。もし私たちが、人生における他の何よりも神を尊ぶなら、私たちは神を求め、神の真理を

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

求めるようになるでしょう。そうすれば、ぬるま湯に浸ることはなくなり、神の評価において間違いなく「熱い」善い行いが、私たちの霊的成長と共に、当然のこととして後からついてくるようになります。

2.「あなたを口から吐き出そう。あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もないと言っているが、実は、あなた自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついていない。そこで、あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買ひ、また、あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買いなさい。また、見えるようになるため、目にぬる目薬を買いなさい。」:ラオデキヤは自分たちの霊的状況を全く正しく認識していません。パウロの謙遜さとは対照的です。パウロは用心深く、自分の霊的な地位(第一コリント 4 章 3-5 節; ピリピ 3 章 10-14 節)を過信することを避けましたが、ラオデキヤの時代の信者は、霊的な状況が正反対であるにもかかわらず、自分たちは最善であると思ひ込む傾向があります(第一コリント 4 章 7-8 節参照)。ラオデキヤは、自分には喜ぶべきことがあり、他の人々からうらやましがられるべきだと思ひ込んでいますが、霊的には悔めな姿であり、物事を正しく見るすべての人々にとって哀れみの対象です。ラオデキヤは自分たちの物質的な豊かさから、自分達は霊的にも豊かであると思ひ込んでいますが、実際には物質的な豊かさにもかかわらず(そして、物質的な豊かさのゆえに)、霊的な貧しさにあえいでいるのです。彼らは巨大で印象的な教会堂を建てたかもしれませんが、そこで行われていることの霊的内容

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

は、主からしたら嘆かわしいものです。ラオデキヤは身なりを整えていると思い込んでいますが、その行いは神に受け入れられず、知らず知らずのうちに裸で歩き回っており、靈的な感覚を持っているすべての人にはその恥が見えているのです。要するに、ラオデキヤは自分がすべてを知っていると思い込んでいるのですが、実際には自分の靈的狀態の本質が見えておらず、その傲慢な自己評価はまったく見当違いなのです。全体的に言えば、ラオデキヤはイエス・キリストの裁きの座でかなりのショックを受けることになります。

それゆえ、この時代の信者の一員として、私たちはこれらの節に注意を払い、ラオデキヤに特徴的なこの恥ずべきパターンに従わないようにする必要があります。そのためには、キリストの具体的な指示に従う必要があります。主は私たち皆に、金、衣服、眼に塗る薬を「わたし<イエス>から買いなさい」と命じておられます。火で精錬された「金」(私たちの業績を表す)は、本物の靈的な業績、つまり神に受け入れられる実をもたらすことを意味します(マタイ 6 章 19-21,22-24 節; 第一コリント 3 章 12-15 節参照)。「白い衣」(恥を隠すため)は、個人の聖化、すなわち、非難されるよりも主に誉れをもたらすクリスチャンの歩みを表しています(参照:イザヤ 61 章 10 節; ゼカリヤ 3 章 4 節; 黙示録 3 章 4-5 節, 7 章 9-14 節, 16 章 15 節, 19 章 14 節)⁵⁸。「目に塗る薬」(視界を明瞭にするため)は、

⁵⁸ 黙示録 16 章 15 節では、衣服はまさにそのような個人的な聖別を表し、衣服の欠如は恥をもたらします。

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

靈的な識別力、すなわち、靈的な成熟から来る眞の知恵と悟りを象徴しています(マタイ 6 章 22-23 節)。これら三つの「買いもの」(神のために行った眞のわざに対する報い、聖なる生活、知恵)はすべて靈的成長の結果であり、靈的成長の過程はそれらを得るための「貨幣」です。クリスチャン生活で最も大切なものは、お金で買うことはできません。イエス・キリストのために成熟したクリスチャンの生活の一部である、本物の実り、聖別された歩み、靈的識別を達成するためには、靈的成長の丹念なプロセスへの献身とコミットメントが必要なのです。一貫して、規律正しく、心を込めて聖書を読み、祈り、聖書を学び、聖書の原則を生活に適用し、靈的賜物から来る実り豊かさをもってキリストのからだである他の人々を助けることが、このプロセスの基本なのです。それぞれの課題においてキリストに近く歩めば歩むほど、深く、効果的になり、恵まれるのです。

悲劇的なことに、物質的な豊かさに頼る代わりに、私たちのラオデキヤの時代のあまりに多くの人々が、単なる見かけを優先して、この明らかに厳しいプロセスを(作為または不作為に)拒否しています。彼らに対する主の言葉は、明確な戒めです。神のみことばを拒絶し、ないがしろにする(神のみことばを読み、神のみことばに従って祈り、神のみことばに教えられ、神のみことばに従って生き、神のみことばに従って仕えることをしない)ことは、人生を楽しみ、世間から見れば「賢い」ように見えるかもしれませんが、そのような行動は、実のところ、完全な愚行です(ヨブ 5 章 13 節; エレミヤ 8 章 9 節; 第一コリント 3 章 19 節)。

7.ラオデキヤ:退廃の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

3. 「すべてわたしの愛している者を、わたしはしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって悔い改めなさい。見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。」(黙示録3章19-20節): しかる(叱責)(*elengchos*; エレンコス ἐλεγχος)は一般的に言葉によるものであり、懲らしめ(ペイディア *paedeia*, παιδεία)は通常、体罰的なものですが、この二つの言葉を合わせて使っているのは、警告と処罰の一切合切を示唆するためととれます⁵⁹。ここにあるのは、主が、言葉による脅しから深刻で痛みを伴う懲らしめへとエスカレートする一連の手段を通して、ラオデキヤの生ぬるい信徒たちの注意を引きつけるという、非常に明確な絵像です。この聖句が明らかにしているように、もし主が私たちを愛していなければ、私たちに対してこのような行動をとることはされないでしょう。主の「杖と鞭」は愛と憐れみをもって用いられ、常に私たちの益のためになされるという事実を思い起こすことは、確かに私たちにとって慰めになります(詩篇23篇4節; ヘブル12章4-11節)。しかし同時に、懲らしめがいかにか公平で愛情をもって行われ、その最終的な効果がいかにか肯定的なものであったとしても、痛みを伴い、恥ずかしいものであることに変わりはありません(第二コリント7章8-

⁵⁹ 例えば、箴言 3 章 11 節のヘブル人への手紙 12 章 5 節の引用でも、この2つの語根が対になっています。

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

12節):

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。(ヘブル12章11節-新改訳Ⅲ)

ですから、私たちと主との間で個人的な問題になる前に、また、私たちの個々のクリスチャンの歩みを正すために主が取られる具体的な懲戒措置であるペイディア(懲らしめ)にまでエスカレートする前に、私たちがこの一般的な叱責に応えることが望ましいという事実に疑いの余地はありません。これはラオデキヤ全体へのメッセージである以上、この聖句の第一の適用は、私たちの教会時代全体に対するものです。キリストは「戸の外に立って」、「たたいて」おられます。キリストは私たちの注意を引いておられ、もし私たちがそれに応じるなら、キリストとの交わりは本来あるべき姿のように素晴らしく高まるでしょう:「わたしはその人と食を共にし、その人はわたしと食を共にする」、集団的な観点からは、私たちが研究している終末の出来事の終結における主の再臨が、ラオデキヤの時代にいる私たちに差し迫っているという意味で、主は「戸口におられる」のです。主の再臨と私たちが今いる場所との間には、私たちの時代に残されたものと、その間にある艱難期だけがあります。主の「ノック」は、やはり集団的なレベルで、艱難期(ここではぬるま湯に浸ることは事実上不可能になる)という形で究極的に注目を惹く出来事を示しています。そして、その暗黒の時代にこの呼び

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

かけに応じる者すべての者は(大背教の中で墮落するのではなく)、その壮大で栄光の日に行われる主の勝利の祝宴、すなわち花嫁である主の教会の婚宴で、本当に「主と食事を共にすることになるのです(イザヤ 25 章 6-8 節; 黙示録 19 章 6-9 節)。

しかし、今日この言葉を読む私たちが応答する唯一の方法は、個人単位です。ですから、「熱心になって悔い改めなさい」という命令は、私たちが個人的に受け止めるべきものであることは間違いありません。ギリシャ語では、ここで「悔い改める」と訳されている単語はメタノエオ(μετανοέω) <メタノエオは動詞。メタノイアは名詞> であり、その動詞の語源は「考えを変える」という意味です。問題なのは、この単語の最も明らかな「悔い改める」と「考えを変える」という二つの表現にすると、どちらの言葉も原語のギリシャ語にはない意味を含んでしまう危険性があることです。考えを変えるという概念は、特に大きな代償や結果を伴わない、比較的簡単なことのように思えますが、抽象的にはそうであっても、メタノエオは聖書では重大な決断にのみ使われます。例えるなら、ランチに何を注文するかで考えを変えるのと、特定の人と結婚するかしないかどうかで考えを変えるのとでは違いがあり、聖書のメタノエオは常に後者のレベルのものです。つまり、聖書のメタノエオは常に、深く感じられ、人生を変える可能性のある「心の変化」であり、根本的に重要な問題に対する考え方の転換であり、多くの場合、ここでのように、間違った行動方針から神に立ち返る決心なのです。この言葉が「悔い改める」と訳されているのはそのためです。しかし、これが悔い改めの伝統的な意味、つまり、罪や悪から離れ、神に立ち返る

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

という意味であるにもかかわらず、この言葉は長年にわたって少なからずの「お荷物」を蓄積してしまい、しばしばその本来の意味にまったくそぐわない反応を引き起こしています。というのも、罪から離れ神に立ち返るプロセスには感情的な要素もあるのですが、悔い改めは、現在の進路について本当に、深く、根本的に「考えを改める」ことでしか達成されないもので、感情の爆発によって達成されるものではないからです。真の悔い改めには確かに感情が伴いますが、それは感情に基づくものではなく、悔い改めようとする人が表わす感情の激しさに左右されるものでも、もちろんありません。神は、私たちが心の奥底で何を考えているかに関心を持たれるのです。神は、心の中で起こっていることを正確に反映しているかどうかわからない、印象的で表面的で感情的な(そしてしばしばすぐに心変わりしてしまう)後悔の表明に惑わされることも説得されることもありません。外面的な見せかけとは別に、真に悔い改め、キリストの言葉を心に刻み、キリストが示された真の道を忠実に歩むことは可能なのです。その一方で、個人が外に表明をするほどに後悔の念を感じていながら、「悔い改めの表明」の後、その道を歩まず、すぐに古い道に戻ってしまうこともあり得ます(実によくあることです)(種まきのたとえで、最初は喜んで御言葉を受け取っても、試練の時に離れてしまう人々を参照): マタイ 13 章 20-21 節)。ラオデキヤの生ぬるい信徒たちは、ここでイエス・キリストによって、彼らの考え方を根本的に変えること、彼らの中途半端なやり方の誤り、自分たちの霊的生活に対する評価の誤りを認識すること、そして、主への献身よりも今ここにある物質を優先させるという、妥協に満ちたパターンから離れることを命じられています。真実に

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

そうすることが真の悔い改めなのです。

この方程式の肯定的な側面は、密接に関連するもう一つの命令「熱心になりなさい」にあります。ラオデキヤの人々が靈的な惰性から向きを変えるべきであるように、彼らは正しい道、靈的な成長、愛と生産と善行と信仰と現世を超えた希望の増大に向かうべきなのです、すなわち、心を尽くしてイエス・キリストに向かうべきなのです。私たちはこの命令を悔い改めの後に考えていますが、主はこの命令を第一に置かれ、ひとたび心の奥底で主を自分のすべてとすることを真に決心すれば、この決心を損なうすべてのものから目を背けることは、当然のこととして続く傾向があることを示しておられます。ひとたび私たちがこのレースで競うことを真に決心すれば、そうする意欲がすでにあるのだから、必要な規律あるライフスタイルは、より容易な事になることでしょう(第一コリント 9 章 24-27 節; ピリピ 3 章 14 節; 第二テモテ 2 章 5 節; ヘブル 12 章 1 節 参照)。

この二つの命令のうちの、「熱心になって」は明らかにより感情的な命令です。私たちの多くが表に出したくない感情の領域(すなわち、悔い改め)は、神の目からは感情とはあまり関係しているものではなく、私たちの多くが感情を減らしたり、排除したいと願う領域(すなわち、悔い改めた後のクリスチャン生活: ラオデキヤの人達は「熱狂者」と見られることに抵抗している)は、神の目からは<私たちが>感情的に献身をより必要としている領域なのです。なぜなら、このラオデキヤの時代には、「一度きりの」非常に感情

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

的な主への再献身をし、その後は(もう「仕事」は終わったのだから)くつろぎたいと思うのがごく普通のことですが、神の目から見れば、この二つの命令に示されているように、状況は全く逆だからです。私たちはその代わりに、クリスチャン生活を送ること、神の計画における自分の役割、神のために意図された実りについて熱心になるべきなのです。私たちは、靈的成長とその良い結果すべてを最優先とし、神のための人生の展望に胸を躍らせるべきなのです！そうすれば、(自分自身のためだけに生きてきた、以前の精彩を欠いた人生とは対照的な)「新しい態度」を維持することは、自然な結果となることでしょう。私たちの神は、私たちの益のために私たちに「妬む」ことをされる「熱心」⁶⁰な神であり、被造物の誰一人として滅びることを望まず(マタイ 18 章 12-14 節; ヨハネ 12 章 47 節; 使徒 17 章 27 節; 第一テモテ 2 章 4 節; 第二ペテロ 3 章 9 節; 哀歌 3 章 33 節も参照)、神を選んだ私たちの誰一人として、偽りの献身の対象で人生を浪費させることを望まれないからです(出エジプト 20 章 5 節, 34 章 14 節; 申命記 4 章 24 節, 5 章 9 節, 6 章 15 節)。主は、救いを願う私たちに、冷淡で無感情な面を見せられたのではなく、むしろ、この世が始まる前から愛しておられた方を、私たちに代わって犠牲にしてくださいという、最も崇高な愛を

⁶⁰ 「嫉妬」と「熱心」はヘブル語では全く同じ言葉です: qana', קנא. その語源は顔の赤みであり、内面的な深い動揺を表し、それが肯定的な目的(「熱心な」)である場合も否定的な目的(「嫉妬深い」)である場合もあります。BDBを参照。

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

表しておられるのです(ヨハネ 3 章 16 節; ローマ 5 章 8 節; 第一ヨハネ 4 章 10 節)。それゆえ、主のこの偉大な愛に適切な方法で応えようとするすべての人々に対して、主が神聖な熱心さ、すなわち、外面的な感情表現ではなく、御言葉の一貫した適用に現れる真の心の態度を称賛し、また命じておられるのも不思議なことではありません(民数記 25 章 13 節; 第二コリント 11 章 2 節; テトス 2 章 14 節; 第一ペテロ 3 章 13 節; 第一コリント 12 章 31 節, 14 章 1 節, 14 章 39 節; 第二コリント 7 章 7 節, 7 章 11 節, 9 章 2 節; ガラテヤ 4 章 18 節参照)。私たちは、主イエス・キリストからのこの命令に応え、この世で神の御業を行うための「熱心者」となり(テトス 2 章 14 節; 第一ペテロ 3 章 13 節)、主と主の御言葉に対する熱意で沸き立ち(ローマ 12 章 11 節)、いかなる代用品も慎むべきです。私たちの神は「妬む神」(出エジプト 34 章 14 節)なのですから。

私たちの主が「戸口に立ってノックしておられる」今、私たちは、個人として、また教会のこの時代として、個人的・集团的懲らしめが始まる前に、そして来たる大艱難期が始まる前に、主との親密な交わりの力と親密さを経験するために、それに応じるべき時なのです。いわば「神を後回しにする」のは間違いであり、自分の靈性を箱の中に入れてしまうのは間違いであり、真に継続性や深いコミットメントなしに神に口先だけのサービスをするのは間違いであり、クリスチャンであると公言しながら、まるで本当のクリスチャンではないかのように生活するのは間違いであり、イエスが人生で最も重要な存在であると主張しながらも、現実には、この世を造られた方を排除して、富、成功、名声、快樂、この世のものの過度な楽しみ

7.ラオデキヤ:退廃の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

という、他の「神々」を追い求めるのは間違いであり、イエスを遠ざけ、私たちの人生の主要な点、すなわち、イエスのために生き、イエスの御心を行ない、イエスの望まれる方法で私たちの「ぶどう園の一角」で働くことに、本当に真剣になって注意を払わないことは間違っているのです。

主がここで求めておられる根本的な態度の変化を成し遂げるためには、私たちは主の御言葉を聞き、それに意味ある形で応えなければなりません。ちょっとした間だけ悲しみや後悔を表明し、その後「吐いたものに戻る」(このやり方では「吐き出される」危険があります：第二ペテロ 2 章 22 節と黙示録 3 章 16 節を比較してください)のでは意味がありません。鏡を見ただけで、自分の真の姿を意識から消し去ろうとする人のようになっては意味がありません(ヤコブ 1 章 22-25 節)。私たちの主がここで命じ、求めておられることを成し遂げるには、私たちの考え方全体を断固として献身的に変えること、主を第一に考えること、私たちが召されている霊的成長と実りのプロセスに献身することが必要なのです。

キリストが約束された報酬：

1. 「勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。それはちょうど、わたしが勝利を得てわたしの父と共にその御座についたのと同様である。」(黙示録 3 章 21 節)：今、この現世での私たちの主イエス・キリストとの親密な交わりの深遠で崇高な祝福を、過小評価することは望みませんが(「彼と食を共にす

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

る」: ヨハネ 14 章 23 節, 15 章 4 節; ローマ 8 章 9-10 節; 第二コリント 13 章 5 節; ガラテヤ 2 章 20 節; エペソ 3 章 17 節; コロサイ 1 章 27 節; 第一ヨハネ 2 章 24 節, 3 章 24 節, 4 章 13-16 節参照)、しかし、「来世において」キリストと共にいることは、はるかにすぐれている」(ピリピ 1 章 21-23 節)ことには異論の余地がありません。世に「打ち勝ち」、信仰の勝利を得る者に約束されている多くの祝福の一つは、来たる千年王国において、キリストの王としての支配を共有することです(ローマ 5 章 17 節; 第一コリント 4 章 8 節; 第二テモテ 2 章 12 節; 黙示録 1 章 6 節, 5 章 10 節, 20 章 4-6 節; 黙示録 22 章 5 節参照)。ヨハネの黙示録の後半では、復活した信者たちが、千年の間、主の地上王国の統治に参加する私たちの権威の象徴である「かず多くの座」に座るといふ、この約束の成就を実際に見ることができます(黙示録 20 章 4-6 節)。この約束は、「諸国民に対する権威」(黙示録 2 章 26-27 節)を行使するというテアテラに与えられた約束と性質が似ていますが、ここでは実際に、私たちの主イエス・キリストと共に「王座を共有する」ことが約束されており、注目と期待に値する、世界的な王国の管理における主との親密さが示唆されています。それゆえ、この特別な約束は、教会時代の最後の時代に置かれている私たちの状況に特にふさわしいものです。将来、イエス・キリストと最も親密な関係を分かち合うという見通しは、私たちの時代が現在、イエス・キリストに対して特徴的に生ぬるい反応を示しているという現実と、著しく対照的だからです。イエス・キリストの御座を分かち合うためには、今、主と主の命令に応えるのが最善であり、主を私たちの人生で最も重要なものと考えなければなりません。(ヨハネ 14 章 23 節, 15

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

章 4 節)

この約束によって、私たちは、キリストが私たちに歩ませたいと願っておられる道歩んでいる(あるいは、少なくともキリストの「<戸を>たたく」のに心えてそうする)者たちが、ラオデキヤに確かにいることを、ようやくここで知ることができます。このように、主の御座にあずかるという特別な特権が、七つの教会の時代の中で特別並外れているわけでもない者に約束されていることは、ラオデキヤが艱難期に突入して終わるという事実を考えれば、それほど驚くべきことではありません。キリストの再臨に先立つその最後の恐ろしい時代における「信仰の勝利」には、最も熱心な献身が必要であり、このことは、ここでの「王座」のイメージが黙示録 20 章 4-6 節で「殉教者の王座」、すなわち、最も恐ろしい試練の坩堝の中で信仰を妥協するよりは、イエス・キリストのために死ぬことを熱心に選ぶ信者たち、その多くは間違いなく艱難期開始前のラオデキヤの時代に救われた信者たちである、という事実にも反映されています。ラオデキヤの時代の多くの人々は、過去の栄冠に満足することを選びました。しかし、そうせずに、小羊が導かれるところならどこへでも熱心に従うことを選ぶ者には、小羊の王座を共に分かちつことになる、小羊との究極の「セッション」<主と共に統治の座に着くこと>が待っているのです。

『耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい』。(黙示録 2章7節, 2章11節, 2章17節, 2章29節, 3章6節, 3章13節, 3章22節)

7.ラオデキヤ:退廢の時代(黙示録 3 章 14-22 節)

-- 「来たる艱難期 第2部-B:天の前奏曲」に続く